

日下部重太郎著〔天正十一年版〕

國語<sub>の</sub>趣味と常識

發行所 東京 丁未<sub>ていむ</sub>出版社

## 卷頭に

「國語百談」が賣切になつてゐたさうだ。すると、漱石の夏目さんも生前に、國語にこんな面白い本があると言はれたと、聞いたから、幾百談もにしてくれと發行所からの申込が有つた。そんな餘計な世辭をませた申込はことわると答へたなら、さぞ男があがつたで有らうに、こゝ一番、男をさげて、百談の若干を取捨し、更に増加して百五十ばかりとし、「夏目漱石」の一話までも述べ、名づけて「國語の趣味と常識」と題した。

大正十一年一月

著者しるす

目次

一	君が代の歌	一
二	日の丸の旗	二
三	大日本	四
四	朝鮮	五
五	支那	七
六	印度	九
七	南蠻	一〇
八	西洋と東洋	一一
九	富士の山	一三
一〇	萬歳	一四
一一	大日本史の假名遣	一五
一二	儒者と豆爾波	一八

次目 識 常 と 味 趣 の 語 國

一三	詩歌の譯	一八
一四	酒達磨	二一
一五	普通文の碑	二三
一六	口語文の碑	二五
一七	官報と口語文	二九
一八	一言の電報	三〇
一九	尾崎紅葉	三一
二〇	葛原勾當	三三
二一	假名の手紙	三六
二二	薩摩芋	三九
二三	南瓜と關雞	四〇
二四	煙草	四一
二五	ポイコット	四二
二六	國語の輸出	四三

次 日 識 常 と 味 趣 の 語 國

二七	的といふ語	四三
二八	無用之者不可入	四四
二九	意味の取りやう	四六
三〇	數醫と贅六	四七
三一	他國人の綽名	四九
三二	源氏物語	五一
三三	讀賣新聞	五一
三四	新聞と雜誌	五二
三五	新譯語	五五
三六	日本の漢字	五六
三七	國語の數詞	五八
三八	時刻の名	五九
三九	七 値	六一
四〇	名 數	六三

次目 談常と味趣の語國

四一	昆蟲	六八
四二	孝女白菊の詩歌	七六
四三	攝津大掾	七七
四四	八歳の留學	七八
四五	小泉八雲	八一
四六	言海	八六
四七	日本領土の言語	八八
四八	王堂藏書	八九
四九	外山博士	九一
五〇	那珂博士	九七
五一	雅號	一〇〇
五二	人名の讀み	一〇三
五三	八月一日さん	一〇八
五四	姓名の文字	一一一

次目識常と味趣の語國

五五	姓名の順	一一二
五六	龍祥院	一一三
五七	外國語の早合點	一一四
五八	漢字の電報	一一二
五九	萬國字	一二三
六〇	萬葉假名	一二四
六一	假名の發達	一二六
六二	名前の假名	一三二
六三	假名の利用	一三三
六四	國字	一三六
六五	國語	一三七
六六	國文	一三八
六七	文體	一三九
六八	益軒と福翁	一四〇

次 目 識 常 と 味 趣 の 語 國

六九	前島男爵	一四三
七〇	南部義壽氏	一四七
七一	漢字と文章	一五三
七二	海外に於ける日本文	一五七
七三	日本の新聞	一五八
七四	日本語葉の會	一六〇
七五	ローマ字ひろめ會	一六四
七六	ヘボン氏の辭書	一六六
七七	大日本國語辭典	一六八
七八	發音の遊戲	一七一
七九	漢語と諧調	一七五
八〇	音韻變化	一七八
八一	語族	一七九
八二	南蠻缺舌	一八一



次目 談常と味趣の語國

八三	字 音	一八二
八四	江北の枳	一八四
八五	茶 釜	一八九
八六	すがさ日記	一九一
八七	幼兒の言葉	一九二
八八	雜 題	一九五
八九	流行語	二〇四
九〇	言語の變遷	二〇五
九一	現代語の調査	二〇八
九二	平家物語	二一〇
九三	東歌の國々	二一四
九四	薩摩と仙臺	二一五
九五	國がへ	二一九
九六	方言の數々	二二一

九七	力ある方言	二二八
九八	方言と標準語	二三〇
九九	言葉の島	二三四
一〇〇	飛驒の白川	二三五
一〇一	田中大秀	二四五
一〇二	飛驒の桃太郎	二四八
一〇三	三井寺の鐘	二四九
一〇四	八景	二五七
一〇五	櫻	二五八
一〇六	杜鵑研究	二六一
一〇七	金風	二六二
一〇八	國母陛下	二六四
一〇九	春畝公と陶庵公	二六五
一一〇	外交	二六六

次目 談常と味趣の語國

一一一	新日本	二六七
一一二	舶來語	二六八
一一三	壽限無	二六九
一一四	名がはり	二七〇
一一五	落し嘶	二七一
一一六	天河屋	二七二
一一七	ナンヂャモンヂャ	二七四
一一八	先斗町	二七五
一一九	言語の記録	二七六
一二〇	語原と字原	二七九
一二一	日鮮同系	二八一
一二二	朝鮮語や琉球語	二八二
一二三	滿洲語や蒙古語	二八三
一二四	當字	二八四

次目説常と味趣の語國

二三五	トランプ	二八六
二三六	外來の變生語	二八七
二二七	洋語まがひ	二八八
二二八	言葉の洒落	二八八
二二九	うそ字うそ読み	二九〇
二三〇	議會の大笑	二九一
二三一	言葉の色々	二九三
二三二	文章の趣味	二九六
二三三	言葉と文章	二九七
二三四	文章の模範	二九九
二三五	文章の洗鍊	三〇〇
二三六	指導の兩面	三〇一
二三七	祖國の言葉	三〇五
二三八	日本語の性	三〇六

次 目 識 常 と 味 趣 の 語 國

一三九	言葉と心情	三〇八
一四〇	かなづかひ	三〇九
一四一	櫻根博士	三一一
一四二	ローマ字と國語	三一四
一四三	歌ガルタ	三一六
一四四	松蟲と鈴蟲	三二二
一四五	鶯	三二三
一四六	十二箇月	三二四
一四七	神代の古事	三二七
一四八	國語の分布	三二八
一四九	文藝の大使	三二九
一五〇	現代の文章	三三一
一五一	蘇峰と雪嶺	三三三
一五二	頼山陽	三三四

次目 識常と味趣の語國

---

一五三	井上梧陰	三三六
二二四	夏目漱石	三三八

# 國語の趣味と常識

日下部重太郎著

## 一 君が代の歌

歌の詞

歌の調

我が國歌の詞は、古今集の賀歌いほりうたの第一首にもとづいてゐて、それには「わが君は千代にましませ」一本には「され石のいはほとなりて苔のむすまで」とある。和漢朗詠集には「君が代は千代に八千代にしかく」とある。歌の詞は古今集の方が意味明白であるけれども、歌の調は朗詠集の方がすぐれてゐる。

さて明治初年代に陸海軍に軍樂隊が置かれた頃、この歌が國歌に見立てられ、そののち其の歌曲には、宮内省雅樂課の課員林

歌

讀人しらず

日の丸

廣守氏が古い曲譜によつて同十二年に作られたのが擇び採られた。それが一般に國歌として行はれてきたのは、同二十三年に文部省で祝祭日の唱歌を定めて、廣く之を國民教育に用ゐてからである。この歌は、よみ人しらずであるが、讀人の名は知られなくても、その作が國民の聲として永くうたはれるのが、この無名の讀人の眞の生命である。

## 二 日の丸の旗

ひむかしの青海原の波間より

豊さかのぼる日の大御神 (村田春郷)

日の丸は我が國に深い由來があり、昔から之を軍旗や軍扇や船旗などに用ゐて來たものである。幕末に至つて外國との關



烈公の建  
議

今の作り  
方

旗の意味

係で、國旗を定める必要が起り、幕府は水戸の烈公の建議を用ゐ、安政元年七月諸藩に向つて日本の總船印には白地に日の丸を用ゐよと布告した。もとは國旗を「總旗印」または「總國印」などと呼んだ。明治維新の後、三年正月廿七日に政府は、今の作り方の日の丸の旗を國旗と定める事を布告した。それから祝祭日などに之を家々にも掲げることが全國に行はれる様になつた。

この旗には深い意味がこもつてゐる。我が皇祖天照大神は日の神にましまし、我が帝國は日の出る所に近くて大日本と稱へ、一系の皇統は天つ日と共に窮り無く、國民の心は潔白で赤誠であることを尊び、日の丸の旗は我が國に最もよく適ふと云はれてゐる。日の丸の旗は實に大日本帝國の好い象徴である。古歌にも、

めぐる日のかはらぬ影や君が代の

かぎり知られぬためしなるらむ (藤原實枝)

### 三 大日本

宮典

國號

讀み

「大日本」の文字は、古くは日本書紀に現れてゐて、オホヤマトとよみ、大日本豊秋津洲などとある。唐より前の支那の正史には、我が國を「倭國」と呼んである。唐書には日本傳があり、「咸亨高宗年號元年、倭人始更號日本、遣使賀平高麗」。使者自言、國近日所出、以爲名」と記してある。李白が「哭晁卿安倍仲麻呂詩にも「日本晁卿辭帝都」とある。さて「日」の字音は入聲であり、「本」の字音は「P音考」の説もある如くであるから、「日本」の字音は本來ニッポンとよみ、それが變じてニホンともよむに至つたのである。支那語で *Jipen*<sup>キヤ</sup> (北

京音、朝鮮語で *Ipon*<sup>イポム</sup>、ちてはマヌロ、ホーロの旅行記に *Zipangu*<sup>ジプアング</sup> 日本國)といひ、その他の洋語で *Japan*<sup>ジャパン</sup> または *Japon*<sup>ジャポン</sup> といふなど、すべて「日本」の字音に基づくのである。我が帝國憲法に掲げられた「大日本」の國號は、ダイニッポンと稱へるが宜い。「日本銀行」の如きも、その兌換紙幣に *Nippon*<sup>ニッポン</sup> *Ginko*<sup>ギンコ</sup> と記してある。但し、東京の「日本橋」の如きはニホンバシとよまねばならぬ。

#### 四 朝鮮

朝鮮の名は、史記の宋世家に「武王乃封箕子于朝鮮」と見えてゐる。朝鮮とはアサ、アザヤカの意味で、支那から朝日の輝く方を稱へたものである。朝鮮には、南部に馬韓、并韓、辰韓の三韓が割據したことがあり、また全部に新羅、百濟、高句麗、高麗<sup>一名高麗</sup>の三國が鼎

立したこともある。それから新羅朝と高麗朝とを経て李朝となつた。さて朝鮮を雞林とも云ふ。その起りについては、東國通鑑などに、新羅王が金城の西の始林の中に雞の聲を聽いて男兒を得た祥瑞により、始林を雞林と改め、因つて國號としたと説き、唐書の新羅傳に、龍朔元年以其國爲雞林大都督府などと見えてゐる。また朝鮮を槿域とも云ふ。近くは日韓併合の際、李焄と李熹との二公に賜はつた詔書に、これを御用ゐなさつてある。支那人は他に「日域」や「西域」などと稱へた例もある。木槿の花は朝に開いて夕に萎むから、支那人が朝日の方にある朝鮮をさして槿域と稱へたのだと云ふ。或はその國に木槿の花が多いから槿域と呼んだのだとも云ふ。

## 五 支 那

から

「から」は、もと「加羅」といふ古の朝鮮の西南邊の小國の名であつたのが、轉じて「韓」の字訓となり、更に支那の事に轉用されて「唐歌」(詩)、「唐物語」(日本「唐天竺」)、「唐様」で貸家と書く三代目などといふ。萩の家遺稿には、「西洋文字」に「からもじ」と振假名してある。

漢

「漢」は、楊子江に漢口で流れ合ふ漢水に因みがあり、漢朝の號となつたので、漢朝の亡びた後でも、その名残で、我等は「漢土」、「漢字」、「漢學」、「漢文」、「漢人種」、「漢法醫者など」といふ。

唐

「唐」は、我が國から遣唐使や留學生や入唐僧の往つた「唐朝」の號である。その縁で、唐朝の亡びた後の支那の事物にも、我等は「唐本」、「唐物」、「唐音」實は宋以後の音などといふ。また轉じては、西洋

もろこし

品をも「唐物」「西洋人」をも「唐人」といふ。

「もろこし」は、我が國から支那へはもろくの海山を越して行くとの意味で、支那をさすと云はれてゐる。漢字では「もろこし」を「唐土」と書き、唐土の事物を「唐土人」「唐土船」「唐土文字」「唐土黍」などといふ。

支那

「支那」は、あの萬里の長城を形見に残した秦朝の號に基づいてゐる。「震旦」「支那」などは、もと印度から漢土を稱へた名で、西域記にも「翻摩訶支那爲大漢國」とある。洋語に China といふのも、同じ語原である。

中國、中華

さて支那人自らは「中國」または「中華」と稱へてゐる。それは、世界の中央の國または世界の中央に位する文明國の義である。今も「中華民國」と稱へ、こちらでは「日支交渉」と云ふのを、あちらで

は「中日交渉」などと云ふのである。

## 六 印 度

異稱

語原

日本での  
通稱

後漢書の西域傳に「天竺國一名身毒」と云ひ、唐の玄奘の西域記には「印度之稱、異議糾紛、舊云身毒、或云賢豆、今從正音、宜云印度」と云つてある。また通志略には「天竺即捐毒也」と記し、山海經には「天毒」と記してある。蓋し、何れも「印度」といふ名の通音または訛音である。「印度」といふのは、或は月の意といひ、或は因陀羅いんだら即ち帝釋たいしやくの名に基づくとの説があるけれども、この國の西北部を流れる大河のインドス河の名から出たといふ説が有力である。

我が國では、昔は之を「天竺」と呼んだのが通例で、今は普通に「印度」と呼んでゐる。さうして「天竺」といふのは、轉じて遠い外國、又

は高い天空の意となつて、天竺<sup>マニび</sup>茄子、天竺鼠、天竺木綿、又は、天竺にあがるなどと云ふ。西洋では新世界發見の時に之をIndia即ち印度の一部とまちがへたので、遂にアジアのを「東印度」とよび、アメリカのを「西印度」とよび、アメリカの舊住民を「アメリカ印度人」とよぶに至つた。

## 七 南 蠻

禮記の王制に、東夷南蠻、西戎北狄の別を擧げ、南方曰蠻、<sup>ひたひ</sup>題交趾、有不火食者矣。と説いてある。夷蠻戎狄とは未開の民を云ふ。支那及び日本において南蠻と呼んでゐたのは、その因襲である。我が國では、足利時代の末から徳川時代にかけて、呂宋や安南や暹羅<sup>シムラウ</sup>などの南方の地をさして南蠻といひ、またその方面



を通つて來た西洋人ポバルニアガル人などイを「南蠻人」といひ、之に關係ある事物を「南蠻船」、「南蠻寺」、「南蠻鐵」、「南蠻黍」、「南蠻辛」、「南蠻煮」、「鳴南蠻」などといひ、その名稱が今も残つてゐる。かやうに「南蠻」の元の意味は段々失はれてきた。

## 八 西洋と東洋

西洋といふのも、支那から呼び初めた名稱である。明人王圻が三才圖會の「山海輿地全圖」に世界を圓形の中に圖し、大明國を中央にして、「小西洋」、「大西洋」、「小東洋」、「大東洋」と記入してある。いはゆる「小西洋」とは印度の西方、「紅海」の東方に位し、「大西洋」は「歐羅巴」及び「地中海」の西に位し、「小東洋」は朝鮮の東南方に位し、「大東洋」は南北兩「亞墨利加」の西方に位して居る。「西洋朝貢典錄」

の明人の如きは、アジアの南邊及び西南邊の諸國を「西洋」と汎稱してある。我が國でも慶長・元和の頃には、印度あたりを西洋と汎稱したのである。その後、支那及び我が國において、漸く歐米の諸國をさして西洋または泰西と呼ぶに至つた。

かやうに歐米の諸國をさして西洋といふのに對して、我等はアジアの諸國を東洋と呼ぶに至つた。その東洋とは、西洋人の謂はゆる オリヤント Orient に當るのである。その語原はラテン語で、日出る所の意味を以て、ヨーロッパから東方諸國をさす。しかし支那人は元來自ら「中華」と稱へてゐるから、その謂はゆる東洋は日本をさすのである。我等が「東西兩洋の文明の融合」と呼ぶのは、アジアの文明と歐米の文明との融合を云ふのである。

## 九 富士の山

めてたい  
山

富士見

火山

「元朝の見るものにせん」と宗鑑が吟じた富士の山は、我が日本人が崇めて居るのみならず、外國人も此の山を見るのを日本見物の樂しみの一つとしてゐる。この山は、漢字では「富士」「不二」「不死」「不盡」などと書く。或は「富士びたひ」とたとへられ、「富士見西行」とゑがかかれ、また「富士見町」「富士見橋」「富士見坂」「富士見峠」「富士見樓」「富士見軒」「富士見亭」などといふ名となつて居る。

この山は元活火山で、赤人の長歌の中にもゆるる火を雪もて消ち、ふる雪を火もて消ちつつとあり、そののち古今集の序には「今は富士の煙も立たずなり」とあるが、更科日記には「夕ぐれは火のもえ立つも見ゆ」とあり、近くは寶永年中に噴火したこともある。

アイヌ語學者バチエラー (J. Bacheler) 氏らの説では、富士とは樺太のアイヌ語のフチ(火の意)といふ言葉と同じであらうと云ふ。果してさうなれば、アイヌ語が日本一の名山の名となつて居るのである。

## 一〇 萬 歲

萬歳の由  
來

そもく君主にひかつて「萬歲」と祝ひ呼ぶことは、支那から起つてゐる。戰國策に「民稱萬歲」と見え、史記の項羽紀に「楚軍皆呼萬歲」と見え、漢書の武帝紀に「呼萬歲者三」と見えてゐる。我が國では、延暦遷都の時の踏歌たぎの樂章に「聖主億萬歲」を唱へたと朝野群載に見え、三代實錄には「再拜稱萬歲」などと見えてゐる。この語は漢音ではバンセイと云ひ、吳音ではマンザイと云ひ、ま

た混じてバンザイと云ふ。古い物語などの假名がきには、ばんぜいともあり、また千秋萬歳はセンズマンザイとよみ、萬歳樂はマンザイラクとよんである。明治の大御代に臣民が「ばんざいの三唱」をしはじめたのは、めでたい憲法發布の日に、大學生等が觀兵式への行幸を拜して斯様に歡呼した事であると云ふ。廿七八年戰役や卅七八年戰役の時には、最も盛に之を唱へて、大元帥陛下に對し奉つてのみならず、廣く軍人の出征や凱旋の時にも呼ぶに至り、歐米の從軍記者は、Banzai を日本みやげとして歸つて行つた。なほ轉じては種々の祝賀の場合にまで之を用ゐてゐる。

## 一一 大日本史の假名遣

嘗て梧陰存稿を讀んで大いに感じた中に、

余が尤も惜む所のものは水戸義公の大日本史を編纂せらるるに當り三宅觀瀾のごときは國文を用ゐむとの議を建てしも當時多數の勢に制せられて遂に漢文を用ゐるに至りしことにして氣運の未だ至らざりしとはいへ遺憾のことなり」といふ一條があつた。かねて大日本史の活字本も出た上に、さらに水戸徳川家の許諾を得て明治四十五年に和譯大日本史が出版されたのを見て、深く氣運の變遷を感じたのである。

大日本史の中に引いた和歌は萬葉假名で書いている。例へば小式部内侍の傳には、

於朋延椰摩伊玖能能美知能登乎計禮婆摩駄布美毛美孺阿摩能波志多底。

伊勢大輔の傳には、

伊理志倍濃、奈良濃美邪古乃、夜陪散俱羅幾興婦、扈扈濃倍理仁保比奴類加奈。

とある。「登乎」は「登保」幾興婦は「計婦」とあるべきのに、さりとは甚

だしい假名ちがひである。なほ卜部兼好の傳には、

古古毛麻多、宇伎與奈利計利、與曾奈賀良於毛比志麻麻能邪麻奢刀毛我那。

と正しくあるのに、靜の傳には、

志豆也志豆、志豆乃遠駄末幾玖里加陪志、牟加志遠以末珥、奈寸與志毛加奈。

とあつて、清濁が正しくない。「かな」希望は「かな」感歎とまぎれない様にあるものである。

## 一一一 儒者と亶爾波

星巖の和歌

紅蘭女史の直話とて聞き傳へた事に、梁川星巖が或日三條公の宴に侍り、興に乗つて一首の和歌を詠じた所が、さすがの詩人も亶爾波を間違へて居たので、或人が之をとがめると、公は「儒者に亶爾波はかまはぬ」との仰せで有つたと云ふ。これは當時の儒者に與へられた一つの治外法權で有つて、世は方に昌平叢の儒官佐藤一齋の訓點が行はれる頃であつた。この治外法權撤去の精神で「國語及漢文」として中等教育に一科目を立て、居る現代とは、よほど世の中がちがつて居たのである。

儒者の治外法權

## 一一三 詩歌の譯



阿倍仲麻呂が明州で唐人と別れる時に卽興に詠んだ三笠山の月の歌は、大日本史に「因寫以漢語示之、衆皆感歎」とある。仲麻呂ほどの詩才なれば、之を詩に譯して見せたなら、唐人の感歎も一層深かつたであらうと思はれる。話がかはつて、白氏文集の燕子樓の第一の詩、

滿窓明月滿簾霜 被冷燈殘拂臥牀

燕子樓中霜月夜 秋來只爲一人長

唐物語

を唐物語には

もろともに見しに光やまさりけん

いまはさびしき秋の夜の月

となほしてある。全體絶句を短歌になほす時は詞が不足して、十分に原作の意を寫すことが極めて困難である。之に反して、

短歌又は俳句などを絶句になほす時は、原作の意を寫すのに詞が十分である。俳諧名家傳に據るに、蓼太の門人が、

五月雨やある夜ひそかに松の月

の句の意を漢譯して、長崎に來てゐた清國人に見せると、その人大きに感心し、因賦一絶寫其意。倣壘之誚所不辭也。とことわつて、

長夏草堂寂 連宵聽雨眠

何時懸月色 松影落庭前

と譯したさうである。俳句は殊に簡潔で含蓄の多いものゆゑ、五言絶句になほすのは宜いが、七言ではだれる様である。しかし韻文を巧に他國語の韻文になほすのは、翻譯の中最も困難な事であらう。「翻譯は反逆」といふ洒落さへあるでは無いか。

蓼太の句  
の漢譯

翻譯は反  
逆

一四 酒達磨

羽山善藏

唐詩の端  
唄

時は文化文政といふ天下太平樂の代の比、武州忍藩おしのに實名を  
羽山善藏といひ、曾ては藩主の御前講をも勤めた程の人、それが  
詩仙酒仙となりはて、酒ぶとりの赤ら顔で、酒達磨さかだるまと藩中はんちゆうに呼び  
ならされた奇人が有つた。この人が唐詩選の五言絶句を端唄はなうた  
になほしたと云ふ。その二つ三つを舉げると、

○題袁氏別業 賀 知 章

主人不相識 偶坐爲林泉

莫謾愁沽酒 囊中自有錢

こちの亭主は知る人ぢや無いが、斯う出會うたも庭のよき。

酒を買はうと氣を採ましやるな、錢は財布に持つて居る。

○春 曉 孟 浩 然

春眠不覺曉 處々聞啼鳥

夜來風雨聲 花落知多少

春のねむさにつひ寝わすれて、あちらこちらに鳥の聲。  
さてはゆふべの嵐のつよき、庭の櫻も散つたらう。

○古別離 孟 郊

欲別牽郎衣 郎今到何處

不恨歸來遲 莫向臨邛去

これ待たしやんせ此方の人、今宵あなたは何處行かしやんす。  
歸り遅いはわしやだじや無いが、色里などへは行かんすな。

○尋隱者不遇 賈 島

松下問童子 言師採藥去

只在此山中 雲深不知處

松の木かげでわらべに問へば、御師匠さんは薬探り、

この山なかにはゐられませうが、雲が深うて何處ぢややら。

これらの端唄譯は一冊の寫本となつて傳へられたと聞く。

安政丁巳新版の端唄一夕話の中に、ある端唄を唐詩選の五言絶句の譯と説明してある。これも元は此の人の作から出たものであらう。

## 一五 普通文の碑

明治三十年のころ、岐阜縣揖斐郡北方村に知人林治郎右衛門氏を尋ねて、話が林萬八翁の記念建碑の事に及び、發起人の中に碑文を漢文家に頼みたいとの意向があるのを聞き、それは折角

平易な國  
文

の事業のために惜い事であるで、漢文の讀める人は甚だ少い、斯様に此の地方に大恩のある先生の碑文は、凡そ小學生でも讀める程に平易な國文にされたいものであると陳べた所、即座に賛成された。やがて他の發起人らも皆同意し、萩野博士に撰文を頼み、句讀點附きで、翌年めでたく建碑が出来た。「彰德行」の題字は久我侯爵の筆である。その碑文は左の通り、

萩野博士  
の撰文

この彰徳の碑は、林萬八翁の爲に建てつるなり。翁は美濃國揖斐郡北方村川口の人。所兵衛翁の五男なり。幼名は末次郎、長じて萬八と稱し、別に知眞と號す。幼きより慧敏人に勝れ、同村の野田李珀、林宇内の二氏に學びて、書算易學に長ず。十六歳の時より、師の許を得て、里人に教授す。懇切にして善く人を誘きければ、業を受くるもの日々に多し。四十歳の比

には、入門の子弟既に五百人に及び、六十を越えてはすべて千人に餘れり。翁資性剛健にして、老いて益壯なり。風雨寒暑といへども教へて倦まず。身多能なれども、専心を教育に委ねて、かつて他事を顧みざりき。明治十三年七月十日、年八十五にて歿す。翁既に德行あり、天壽あり、至誠の感ずる所、門人子弟年を経て忘れず。余もと翁を知らずといへども、其の有徳の人なるに感ず。文を請はるゝに及びて、其の行狀の概略を敍で、後の人をして感奮興起する所あらしむ。

## 一六 口語文の碑

明治四十二年九月、栃木縣安蘇郡氷室村の第二小學校に、元の校長遠藤氏の記功碑が立てられた。これを聞いて、同校の校長

小林彰吾氏に頼んで、その碑文の寫しを送つてもらつた。「遠藤胤範君碑」の篆額は辻男爵の筆である。これは、我が國で現代の口語文體の碑文の始といふべきものか。

遠藤胤範先生記功碑

大和 關 巖次郎 撰

遠藤先生は我が秋山小學校の恩人であります。學校が初めて建てられたのは明治九年五月ですが、其の前、六年四月村の普門寺を假敎場とした時から授業をせられました。其の頃は小學校小授業といふ名目でしたが、十年六月一旦辭職して朽木縣師範學校に入學せられ、其の業を卒へて、秋山小學校訓導兼校長となつて再び本校に來られました。それは十九年八月であります。それから三十九年九月まで前後あはせて二十五年あまりの間、忠實に其の職に勵み、真心こめて専ら子



弟の教導に盡されましたのは、秋山の人が残らず感謝する所  
であります。言ふまでもなく、現在の秋山の人は大方先生の  
お世話になつたもので、先生は實に亦秋山の恩人であります。  
明治三十九年九月、此の年此の月は秋山小學のために亦秋山  
の人のために、最も記憶すべき時であります。先生は長らく  
胃癌で苦しんで居られて、奉職の間も絶えず治療に手を盡さ  
れましたが、其の甲斐もなく、此の月四日五十五歳で東京の長  
興胃腸病院で歿くなられたのであります。先生は眞に其の  
職務に殫れた方であります。秋山の人が先生の死を聞いて、  
さながら慈母に別れたやうに哀悼の涙に咽んだのは、當然の  
事であります。先生の名は胤範、幼い頃は多聞次と申されま  
した。下毛安蘇郡氷室村大字秋山の人で、代々殖林を業とす

る家に生れ、父は泰十郎といはれました。幼い時から物事に聴く、わけて學問が非常に好きでした。それ故自分の好きな道を人に授けたくて、教育を一生の事業とせられたのであります。下毛の此のあたりに實學が盛んに起つて、風俗も人情も一層美しくなり、秋山小學の同窓會が栃木縣の模範青年團體として縣の當局から選奨せられましたのは、一に先生の徳化に基くのであります。賢徳の高い配駒場氏との間に二男六女を擧げられて、長男の武文といふ方が今家を嗣いで居られます。先生が歿くなられてから五年目、秋山同窓會の人々は先生の徳を忘れぬため、校庭に碑を建てることにしました。其の時恰も病氣を唐澤山に養うて居る私に、先生の事歴を添へて撰文を請はれたので、深く其の徳を感じて、茲に先生の事

蹟のあらましを敍べたものであります。

この新しい碑文を読んで、私は誠にうれしく思つた。うれし  
いと共に聊か感じた所を云へば、口語文は今後大いに之を鍊り  
上げて、成るべく簡潔に書ける様にせねばならぬと云ふ事であ  
る。

## 一七 官報と口語文

官報は明治十六年七月一日に創刊された。今でも官報は、其  
の以前の片假名交りと漢文直譯體との文章の習慣を保存  
してゐる。さて官報に口語のまゝの言論が初めて載つたのは、  
同廿三年十一月末からの第一回帝國議會の議事速記録である。  
速記については、日本語速記術の發明家田鎖綱紀氏をはじめ其

三上博士  
の復命書

嘉納校長  
の告辭

芳賀博士

の門下の人々の功勞を忘れてはならぬ。口語文の復命書が初めて官報に載つたのは、同卅六年に三上博士が書かれた萬國學術會議の復命であらう。また口語文の式辭が初めて官報に載つたのは、嘉納東京高等範師學校長が朗讀された同四十三年三月の同校卒業式の告辭であらう。

## 一八 一言の電報

「刷卷すまきを手に取りもちて先づぞちもふ、庭のをしへの遠きむかしを」と詠んで、亡き父君眞咲翁まきさき（翁はあちこちの大社の神職をつとめ、また「かなのくわい」の「みやぎのぐみ」仙臺支部などを起した人）の御靈にさゝげられた「國民性十論」の著者、芳賀博士の奇想と健筆とは、人の知る所である。かの「月雪花」の如きは、大方は病院で寢

てゐながら書き流されたものだ」と聞く。先生は嘗て悔みの電報を「ヤレヤレ」と打たれたと。一言の感動詞わづかに四文字で、幾百言の弔辭にもまさる感じがする。

## 一九 尾崎紅葉

明治三十二年から同志の人々と國語學會を設けて、時々は當代の名家を招いて、國語に關する演説をも聽いたのであつた。さて前に「多情多恨」といふ言文一致體の作を公にし、その後更に「金色夜叉」を新聞に出してゐた尾崎紅葉氏の演説を頼みたいと思つて、翌々年の四月下旬に、自分は幹事の一人として、牛込の横寺町に尋ねた所が留守であつたので、事の次第を頼み置いて歸ると、二十七日の日附で送られた返答が斯うで有つた。

拜答然者昨夜者御來訪相成御申置の次第拜讀致候此前も御断り申上候通り小生は演説大下手の大きらひに候間是ばかりは平に御免を願ひ候目下新聞小説下書中にて甚だ忙しく候へばいづれ手隙次第御目に掛り段々御話も伺ひ又此方の演説不得手の始末も申上度と存候毎々の御申込を餘りにすぎなきやうにて心に不濟候へども右様の事情なれば御辭退申候より外無之其内是非々々得拜眉て御懇話申上度期其節候　　草々不盡

紅葉氏は「僕の文章には裏うちがしてある」。「七たび生れて文章を作らう」と告白した人である。村山鳥逕氏の話に「紅葉先生の父君は彫刻師の穀齋といふ名人で、先生は芝の紅葉山いみぢやまの下で生れた。芝居も好きで無かつた。それには曰くがある。」多

情多恨が一代の名作でせう。後に不幸の死を遂げた友人と作者自身とが、そのモデルになつて居るやうである。との事であつた。

## 二〇 葛原勾當

葛原くわがはら勾當は盲人の傳記に光を放つ人である。勾當は、瑞檢校の歿するに先だつ十年前の文化九年に、備後の安那郡八尋村で生れ、幼名を柳三と稱へ、長じて重美と名づけた。一泉は晩年の號である。不幸にして三歳の時に天然痘に罹つて失明し、九歳から琴を學び、十一歳で京都に上つて松野檢校の門に入り、十五歳で卒業して勾當の位を許され、十六歳から郷國で琴の教授を始めた。これは隣村の菅茶山が歿した年で、勾當はそれから一

天然痘で  
失明

日記をし  
るす工夫

七十四個  
の活字

生の間弟子を教導し、同縣の阪谷朗廬の歿した翌年即ち明治十五年に、七十一歳で歿した。

勾當の一生において國語の上に特筆すべきは、自ら日記を記された事である。その方法は、一揃ひの平假名及び若干の漢字の木製活字を、縦八寸五分、横四寸七分、深一寸三分の活字整頓箱から一つ一つ取出し、二行の野杵の上下を二つのピン木で留めた紙に捺して綴り行き、第一行を記し終れば、之を第三行の所に移し留め、第二行を記し終れば、之を第四行の所に移し留めて、以下も斯様にして綴られたものである。その活字は左の七十四字である。

い　ろ　は　に　ほ　へ　と　ち　り　ぬ　る　を　わ  
か　よ　た　れ　ろ　つ　ね　な　ら　ひ　う　ゐ　の



れくやまけふこねてあさきゆ  
めみしえひもせすん  
一二三四五六七八九十正月日  
同奉封御候志ハト葛原一泉

右の漢字も行書又は草書の活字である。この活字で綴られた日記は發音的に書いてある。一例を舉げて見れば、嘉永五年正月の條に、

ながく。りういんにて。こまり。はつかごろより。きびしくなりて。りようじすれども。じせず。くすりもきかず。きうもきかず。まめのこもきかず。

句當は音樂の才に勝れ、さうして樂天家であつた。坂田丈氏撰文の碑に「師嘗語人曰、我兩目無觀物、然亦有天錫、能知音律、當其

澄心凝思時、空際彷彿有聲、大絃小絃、宮商相和、真有擊節三歎之妙、不知他人有之乎否、と記してある。また日記の中に、

やまさとの。このあはらやに。すみつれと。

ろれともいわす。はるわきにけり。  
(嘉永五年正月一日)

うくいすの。こへたにきけは。うめのはな。

さくもさかぬも。うれしかりけり。  
(安政三年正月七日)

などと記してある。勾當の孫しげ齒君に至り、その傳記逸事をも詳にして、葛原勾當日記を出版された。三上博士の序文の一節に、「此の日記の假名遣の全然發音法に依れることは、今日、國語國字の大問題を議する人の參考となるべし」とある。

三上博士  
の序文

## 二一 假名の手紙

明治四十三年、小西信八氏の東京盲啞學校在職二十五年祝賀會において、同氏は思ひ出を語り、かねてから大切にしておられた一通の手紙を朗讀されたことがある。それは三宅米吉博士が贈られた假名の手紙である。二氏は嘗て「かなのくわい」の幹部の有力者で、發音的假名遣を主張する「ゆきのぶ」の熱心家であつた。博士は「ゆきのぶ」の機關雜誌の主任で、また小學讀本などを改良し、そのほか國語の新研究を始めた人である。小西氏が今の東京聾啞學校の前々身である訓盲啞院に就任されたのは明治十九年一月二十三日。この手紙はその際に贈られた假名の名文で、國語の上にも思ひ出が多い。小西氏に請うて左に之を載せて置く。

ちかごろ　ごぶさた　いたしそる、きけば　このごろ　きみ

わ　くんもうあいん　え　うつられたる　よし、およろこび  
もうす　べきか、おなげき　もうす　べきか、ともかくも  
さらに　ひとしごと　できて　おもしろからん、きみが  
かねて　より　けなし　いたる　もうあいん　を　きみ　みづ  
から　いま　より　しはいする　こと　となりたる　なれば、  
かならず　おおいに　ふるき　を　あらためて　おし　めく  
らの　ため　に　よき　しくみ　を　はかり　もうけらるゝ  
こと　もちろん、また　しかあらん　こと　を　のぞみたて  
まつる　なり、さりながら　かの　めくら　おし　わ　あたり  
まえ　の　ひと　に　あらず、また　おさなき　こども　でも  
なければ、きみが　これまで　の　けいけん　にて　は  
なを　たらざる　べし、よりに　きみ　その　こと　を　なす  
に　さきだつて、みづから　まづ　みみ　を　やぶり　め  
を　つぶりて　おし　めくら　と　なりたまえ、みづから　お  
し　めくら　と　ならずんば　けつして　おし　めくら　の  
ため　に　はかる　こと　できまじ、みず　きかず　いわずし

て くふう を こらしたまえ。

一げつ 三〇にち

み、よ、

こにし さま

## 二二 薩摩芋

その傳播

薩摩芋は、もとアメリカからヨーロッパ、それからアジアへ傳はつた物である。アジアでは印度洋を通つて支那、琉球、薩摩、關西などへと追々に傳はり、青木昆陽の建白により江戸時代の中頃に全國にひろめられた。これを琉球では「芋」といひ、薩摩あたりでは「琉球芋」といひ、肥前や長門などでは「唐芋」といひ、中國や四國から東では、およそ「薩摩芋」といふ。昆陽の「蕃薯考」の「蕃薯」は外國芋または舶來芋といふほどの意味。「甘藷先生之墓」の「甘藷」は

その異稱

sweet potato と同じ意味である。

四〇

### 二三 南瓜と鬪雞

かぼちや

しゃも

「かぼちや」は安南よりも南の Cambodia から来た瓜である。この瓜のために、この國の名が、日本語となつた仕合せ。又「しゃも」は暹羅雞の略で、元は暹羅の國から傳來した鬪合につかふ雞である。山田長政との交換としてはあきたらぬ心地がするけれども、鳥の身分で國の名を代表するとは、さても健氣な事である。近來は博物の名が假名がきにされるのは喜ばしい。南瓜や鬪雞と書いて漢字の上の聯想を起させるために難讀に陥らせるよりは、假名がきにする方が、面倒くさくなくて、大いに好い。

産物と地名

なほ我が國の名産の漆器は、國の名と同じく、英語で Japan と

その原産地

日本への傳來

呼ばれて居る。支那にも、英語で國の名と同じく呼ばれてゐる名産がある。それは チナ CHINA 即ち陶器である。これは、我が内地で「輪島」「黒江」「瀬戸」「丸谷」「伊萬里」などといふ類ひである。

## 二四 煙草

煙草の原産地はアメリカで、喫煙の風習もアメリカ印度人の習慣から來たものである。タバコといふ名の由來に異説があり、煙管の土語とも、或は煙草の土語とも、或は産出した地名などとも云ふけれども、アメリカの土語に基づく事だけは疑ない。アメリカ發見の後二世紀の間に、喫煙の風習は世界にひろがり、タバコといふ名は、諸國の國語に入つて殆ど世界の共通語となつてゐる。我が國へ煙草が渡つたのは天正の頃だと云ふ。元

祿の頃には、「取る日より懸けてながひる煙草かな（其角）」「駿河路で煙草のひなら茶摘の火（野坡）などの俳句となつてゐる。

## 二五　ボイコット

非買同盟

人名から  
變轉

「非買同盟」などとも意譯されてあるが、もはや原語のまゝ日本語化したボイコットは、もと Boycott <sup>ボイコット</sup> といふ人の名から起つたと云ふ。この人はアイルランドの或大地主の差配人であつたが、西暦一八八〇年にこの人と耕作人との不和が起つて、耕作人はボイコットを強迫し、商人はこの人と賣買することを拒絶したとの事である。この一件から今の意味に轉じたのである。我が國語にも、人名を事物の名としたものに「澤庵」や「清元」や「義太夫」などがある。



## 二六 國語の輸出

或國民が他の國民とつきあひ、又はその文物を傳へると、その國語の單語が入りこむ。我が國語は、支那や印度や西洋から來た單語を數多持つて居る。さうして我が國語の單語も外國語に入りこんで居る。Mikado, Shinto, Samurai, Bushido, Harakiri, banzai, koto, samisen, geisha, kimono, jirikisha, (=rikisha=rickshaw) などは既に英語などに入つてゐる。また我が國の新しい法律や學藝の語が、支那語の中に數多採用されてゐる。

## 二七 「的」といふ語

「國家的觀念」、「立憲的行動」、「外交的手腕」、「積極的政策」、「抽象的說

その起り

明「紳士的」態度などといひ、すべて現今の我が新聞雜誌その他の圖書の語、及び國民の日用語に「的」といふことが甚だ多い。もし今これを取去るとしたなら、頗る差支が出来るに違ひない。「的」といふ語は宋元このかたの通俗文に見え、現に支那語及び時文に之を用ゐてゐる。我が國で此の語を今の如く用ゐた起りは、御一新の頃、洋學書生が譯讀の際に *aesthetic* を「審美的」といふやうに、原語の語尾の音と支那の用字法とを併せ取つたのにあると云ふ。大槻博士はこの「的」を用ゐられないやうである。近來は「野蠻な男」を「蠻的な男」大袈裟にやるを「大々的にやる」などとさへ云ふに至つた。

## 二八 「無用之者不可入」

「無用之者不可入」と書いてあるのを見て「無用の者でも這入れぬ事はない。是れこの通り這入られる。」とからかつた支那人があつたと。しかしこれは一種の日本文と見るべきもので、支那文では無いのである。かの唐詩に「秋聲不可聞」とあるなどは、秋風が聞いてかられぬ程悲しいと云ふ意味である。秋風は聞くものでないぞと禁止の意味に取つては誤である。それで、外國文を書く時には能く考へねばならぬ。或所に「Visitors are dischad to touch this cannon.」といふ立札があつた。これを意地悪く解すれば「見物人は此の大砲にさはると無能力になつて、最早さはる事が出来なくなる。」といふ意味に取られる。たとひ曲解者が無いとせよ、「Visitors are requested not to touch this cannon.」とあるべきである。

## 二九 意味の取りやう

ボコベン

明治二十七八年の役の後に「駄目だ」の意味でボコベンと云ふ言葉が我が國に流行したことがある。ボコベンは「不穀本」の訛りである。我が日本人が滿洲で品物の値をつけた時に、彼方の商人が「それでは原價にも當りませぬ」の意味で、手眞似をして此の語を用ゐたのを、こちらでは單に「駄目だ」と取つたからの事であると聞く。

宜しい

「宜しい」と云ふやうな返答は、どちらの意味にも取られて困ることが有る。言葉の意味は、場合によつて、どの様にも取れる。殊に詩人肌の人は、取り様が格別である。前に東京帝國大學文科の講師で、後に東京高等師範學校の講師であつた米國人ウッ

ウッド氏  
の置土産

博士 (Dr. Wood) は、大正元年十一月の末、木枯の吹きすさむ頃病死された。その前日に、友人のボウルズ師 (G. Bowles) が “How do you feel?” と (お感じは如何です、即ち御氣分は如何ですの意味で) 尋ねられると、博士は “I feel Christ's way is the best way” (基督の道が最も善い道であると感じます) と答へられたと、その時に看病をされた篠田錦策氏から聞いた。これは、この人の置土産として最も味のある言葉だと感ぜられる。

### 三〇 藪醫と贅六

石部金吉安氣樂助・日本左衛門・海老茶式部などといふ異名が數多あるが、藪醫・竹庵や上方贅六の如きも、普通なもののうちである。竹庵は藪醫といふ縁でつけたのである。昔の醫者には

ヤブ醫

ヤボ醫

何庵といふ名が多く有つた。和爾雅に「倭俗稱庸醫爲藪醫者。蓋藪者草莽之謂猶言野醫也。」と云ひ、或は「藪の如く僅かの風にもさわぐ」醫者とも云ふ。しかし藪は竹やぶの意では無くて、野暮の意であらう。奥細道菅菰抄には「野夫の野はイヤシと訓ず。

今民間にヤボと云ふ言葉も、野夫より出づるなり」と説いてある。

ゼイ六

また上方贅六の贅の字はアイロニーであるやうに思はれる

が、それは贅澤の意で無くて、ゼイの音の借字である。「ゼイ六は

サイ六

「サイ六」の東訛りて、「才六」とは、「才藏」や「才助」などと同じく、侮り輕し

めて呼ぶ名であらう。浮世風呂に、上方者が江戸子の贅澤自慢

を罵つた所に、物の廢りにならん様にしてこそ、自慢したがエイ

はいナ。上の者の目から見ては、トトやくたいぢやがナ。自慢

らしう云ふ事が皆へコタコぢや」といふ。江戸子は「それだか

ヤンキ  
ー

ジ  
ン  
ブ  
ル

チ  
ヤ  
ン  
チ  
ヤ  
ン  
坊  
主

ら、あめへ方の事を上方うかたぜいろくと云ふ。と賤しめる。ぜいろくとは何のこつちや。さいろく。へへ、關東べいが、さいろくをぜいろくとけたいな詞つきぢやナア。と言ひ争ふ所がある。

### 三一 他國人の綽名

「ヤンキ」とは、元アメリカへ移住したイギリス人と呼んだ名で、後には轉じて廣く米國人を斯う呼ぶやうになつた。その起りは、フランス人がイギリス人をアングレAnglaisと呼んだのを、アメリカ印度人が聞いてヤンキYankeeと訛つたのだなどと云ふ。「ジンプル」とは、よく太つて、正直で正義を愛する様な姿で、イギリス人を面白く呼ぶ名である。我が國で明治二十七八年戦役の頃に支那人を「チヤンチヤン坊主」と呼び、三十七八年戦役

露助

の頃にロシア人を「露助」と呼んだ。チャンチャン坊主とは、もと鬘髪を垂れた支那人を嘲つて呼んだもの、露助とは、露語でロシア人をロスキ、日本人をヤボンスキと言ふから、ロスキを日本化して嘲りの氣味で呼んだものであるゆゑ、敵愾心の盛な時節が過ぎ去れば、その流行語も廢れて行く。支那では西洋人を嘲つて「洋鬼」と呼び、日本人をば「東洋鬼」と呼んで居るが、この後はその語も追々廢れるだらう。廣東省へ雇聘されて居た醫師窪田俊夫氏の話に、南清では外國人を「蠻鬼郎」と嘲り呼ぶ風がある。こちらで云へば「毛唐人」の類ひ。或日、知人の家に行くと、小兒が何か無しに斯う呼んだので、その家の主人らに大いに氣の毒がられた事があつたと。

洋鬼と東洋鬼

蠻鬼郎



## 三三二 源氏物語

源氏物語は紫式部が石山寺で湖水にうつる明月を眺めつゝ、書いたものだと言ふ美しい傳説がある。「湖月抄」といふ註釋書の名も之に由る。石山寺には「源氏の問キ」があり、紫式部の硯箱といふ物まで置いてある。さうして須磨寺には光源氏の位牌があり、初瀬には玉葛の君の墓があると聞く。或試験の時とかに、「源氏物語は如何なる書物か」といふ問に對して「平家物語の類で、源家の盛衰を記した書物……」と答へたといふ話もある。

## 三三三 讀賣新聞

江戸時代に、大阪落城とか赤穂義士討入とか、地震や火事など、

世の中の出来事を瓦版の早刷にして、之を讀みつゝ賣り歩いた。それを「讀賣」と呼んだのである。さて西洋文明の傳來により幕末に「新聞」及び「新聞紙」と云ふ譯語が現れた。さうして「讀賣」と「新聞」とを一つに名づけたのが、即ち今の「讀賣新聞」、この新聞は明治七年の創刊である。

### 三四 新聞と雜誌

新聞と雜誌

「新聞」や「雜誌」と云ふ漢語は、古い書物を探せば、古い所にも見當る熟語であるけれども、之に今の様な意味を與へたのは、近く西洋の文物を取入れるやうになつてからの事である。即ち文久二年に蕃書取調所から、官板「バタビア新聞」などが出で、元治元年には岸田吟香氏らの「新聞紙」が月に三回横濱で發行され、慶應元

### 新聞雜誌

### 兩方面の 發達

### 明六雜誌

年には蕃書取調所の柳川春三氏の「西洋雜誌」が月々發行され、明治元年には福地源一郎氏の「江湖新聞」や辻新次氏の「遠近新聞」が東京で、橋爪貫一氏の「中外新聞」が大阪で發行された。「新聞」といひ「雜誌」といつても、同じ様な體裁のもので、月に數回以内發行された。明治四年に出た關篤介氏の「新聞雜誌」といふのも有つた。

我が國における日刊新聞の鼻祖は、明治三年十二月十二日創刊の「横濱毎日新聞」であると云ふ。その後、「東京日日新聞」や「郵便報知新聞」や「朝野新聞」や「曙新聞」や「讀賣新聞」などが出で、七年二月に「明六雜誌」が出た。その頃から新聞と雜誌とが、その體裁と内容とを異にして發達して來た。

ついでに記す。明六雜誌は、明治六年に創立の明六同社から翌年二月に第一號を出し、同八年の秋までに四十餘號をかさね

た雑誌である。はしがきに「頃日吾儕盍簪シ或ハ事理ヲ論シ或ハ異聞ヲ談シ一ハ以テ學業ヲ研磨シ一ハ以テ精神ヲ爽快ニス其談論筆記スル所積テ冊ヲ成スニ及ヒ之ヲ鏤行シ以テ同行ノ士ニ頒ツ瑣々タル小冊ナリト雖モ邦人ノ爲ニ智識ヲ開クノ一助ト爲ラバ幸甚」とある。「盍簪」とは朋友相集るを云ふ。その社友の中には、加藏弘之、柏原孝章、神田孝平、阪谷素、清水卯三郎、杉亭二津田真道、津田仙中、村正直、西周、西村茂樹、福澤諭吉、箕作麟祥、森有禮らの諸氏が見えてゐる。

また洋々社談は、明治八年五月に洋々社から第一號を出し、同十六年の末までに九十餘號をかさねた雑誌である。はしがきに「社友會スル毎ニ其相示ス所ノ文ヲ採リコレヲ活字ニ印シ以テ同行ノ士ニ頒ツ讀ム者ヲシテ洋々ノ樂ヲ共ニセシメント

ヲ欲スレハナリ」とある。その社友の中には、伊藤圭介、大槻文彦、木村正辭、黒川眞頼、小中村清矩、阪谷素島、田重禮、那珂通世、南部義籌、西村茂樹、宮崎道三郎、依田百川、井上哲次郎、岡本監輔らの諸氏が見えてゐる。明治初期の思想界を知るには、明六雑誌などと共に之を讀むべきである。かの西周氏の「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」や清水卯三郎氏の「平假名の説」の如きは、明六雑誌に載せてあり、南部義籌氏の「修國語論」や「文字ヲ改換スルノ議」や黒川博士の「言語文字改革ノ説」の如きは、洋々社談に載せてある。

### 三五 新譯語

近世このかた西洋の文物が入り來る時は、その原語は多く漢語で譯された。「演説」といふ語は、古い書物に見えてゐるのであ

哲學

動機

透視畫

るけれども、それが speech の意味に用ゐられ出したのは、福翁自傳に「演説の新法を始め」とある通りである。philosophy の譯語即ち「哲學」は、文字の通りに賢哲の學と解されたが如きは、やゝ恕すべしとして、その外に甚だしい滑稽があるのである。教員の檢定試験に、「動機」とは如何といふ問に對し、motive の譯語と知らないうで、「動機」とは運動の機械にして啞鈴・球竿棍棒等と云ふと答へた者もあると聞く。また「何々の透視畫を描け」といふ問題に對し、その何々を自在畫でかき、之を小さい壁孔から覗き見てゐる所を畫がいて出した者もあると云ふ。

### 三六 日本の漢字

一筆啓上  
と御座候

昔から「一筆啓上者可解御座候者不可解」と云はれてゐる。無

賄所

井上勝手  
口殿

忌中

暗に同文だと云ふけれども、日本と支那と漢字の用法に随分ちがふ所がある。ために折々滑稽な事が起る。支那から新參の留學生が、學校の「賄所」(まかなひどころ)に包み金を持つて來たので、此方では當惑したと云ふ事を再三聞いた。また日本人の姓名などの漢字のよみは、一寸で支那人に分らない。大概はその字音で讀む。「林」をリン、「窪田」をワートテン、「日下部」をリトシャープトと呼ぶが如きである。何分にも萬葉假名式の漢字は、特に支那人に解し難い。「井上勝手口」の札を誤つて姓名と合點し、「井上勝手口殿」と書いてよこしたなどは、振つてゐる。また先頃天津居留の日本商人が死んだので、その門扉に「忌中」と書いて張つて有つたのを支那人が見て、日本人は公然我が中國を侮るのであるから、之に仇が、へしをするのは當然だと叫んで、日貨排斥をあ

より立てたと云ふに至つては、如何に支那人が神經過敏の時節柄とはいへ、實に沙汰の限りである。

### 三七 國語の數詞

珍らしい特色

我が日本語の數詞には、珍らしい特色をもつて居る。即ち一の二倍を二ふた、三の二倍を六むい、四の二倍を八やと呼ぶ。ひととふた、みとひよとや、これら一對毎の父音は元來共通で、母音がかはるのである。荻生徂徠の南留別志なまに、之を一方の音の轉と説いてある。さて其の母音は、相對的に小と大との感じを與へる。いつ(五)ととごも共通の父音を持つてゐる。七ななと九ことは、特に同音を重ねるが、之に對する數詞はない。十から上の數は、とをあまりひとつ、とをあまりふたつ、はたちあまり、みつ、よそぢあまり、む

あまり



つ、もゝあま<sup>〇</sup>りなゝつ<sup>〇</sup>の例に數へた様である。「あま<sup>〇</sup>り」と言ひ足すところは、樺太アイヌ語に“ikashma”即ち「あま<sup>〇</sup>り」を用ゐて“Shine ikashma wan”（一 あま<sup>〇</sup>り十）“hoh ikashma ashishne-hoh”（二十 あま<sup>〇</sup>り百）などと云ふ形式に似た所がある。今我等は、一から十までには和語をも漢語をも用ゐ、十から上にはすべて漢語を用ゐ、たと<sup>二</sup>二十歳、六十歳、八十歳、人、百鳥、五百枝、千、五百秋、八百萬の神、千萬の齡など、特別の場合にばかり和語を用ゐるのである。

### 三八 時刻の名

正午<sup>〇</sup>といひ午前<sup>〇</sup>後と云ふのは、むかし十二支を以て時刻を呼んだ名残である。即ち夜半の子の刻から始つて丑寅卯辰巳午未申酉戌亥に終り、卯が日の出で、午が日中、酉が日の入として

あつた。又數詞を以て時刻を呼んだ。夜半の九つから始まり、八つ、七つを経て、明け六つとなり、五つ、四つを経て、日中の九つとなり、それから又循環して八つ、七つ、暮れ六つ、五つ、四つ、夜半の九つとなるのである。夜半と日中との時刻は年中變りがないが、日の出、日の入の時刻は四季日々に變るから、昔の時刻には伸び縮みがあつた。たゞ春と秋との晝夜平分の日だけが、今の時計の時刻と二時間毎に相合するのである。支那では、漢魏の時代から夜の時刻を十干の一半、即ち甲乙丙丁戊に區別し、之を五夜と呼んだ。之を十二支の時刻にくらべると、戌亥子丑寅に當る。杜陽雜編に「文宗視朝後、即閱群書、謂左右曰、若不甲夜視事、乙夜觀書、何以爲人君邪」と有つて、乙夜之覽といふ語が出来たのである。また數詞を以て夜の時刻を呼ぶ。甲夜が初更で、乙夜が二更、丙

夜が三更、丁夜が四更、戊夜が五更。しかし昔の時刻の名は實用上では段々すたれて、文學上で餘命を保つといふ有様である。

### 三九 七 値

七値七ち即ち一週七日といふ事は西洋から傳はつた。古くはオランダ語の *Zun dag* のなまりで日曜日日曜日をドンタクと呼んだ。しかし我が國には七日目毎に休む習はしが無かつたから、その意味が變つて、休日をしてゐる者を見れば、今日はドンタクかと云つた程である。尤も横濱などでは、西洋人との交際のため、御一新前から日曜日や土曜日といふ事が有つたさうである。兵學寮や軍醫寮では、既に明治五年五月から日曜日を休暇と定めた。さうして我が國で廣く一週間の定めを用ゐて、日曜日と土曜日

の午後とを休暇としたのは、政府の達しによつて明治九年四月から始つたのである。

一週七日の名稱は各國互に異同がある。わが七値は七曜の名稱を付けたものである。左に英語の名稱を擧げて七曜と對照してみよう。

日曜日	Sunday	日の神の日
月曜日	Monday	月の神の日
火曜日	Tuesday	軍の神の日
水曜日	Wednesday	北歐神話の大 神の Odin 即ち Woden の日
木曜日	Thursday	雷の神の日
金曜日	Friday	大神の后の神の日
土曜日	Saturday	農の神の日

右のうち日曜日と月曜日とは都合よく一致し、土曜日も聯絡してゐる。支那では、禮拜日日、禮拜一月、禮拜六土の例に云ふ。

#### 四〇 名 數

名數は一々擧げるいとまも無い。上御一人、兩親、三種の神器、四天王、五大洲、六歌仙、七福神、近江八景、禹域九州、釋迦の十大弟子など、一から十までが特に多い。十一からは凡そ少くなる。これこれあら／＼擧げて見ると、

十まで

十一以上

佛教にいふ、十一智、十一面觀世音、漢の麒麟閣の十一功臣。十二月、十二宮、十二支、十二律、十二因縁、十二光佛、十二神將、十二使徒、十二指腸、春秋十二國、大内裏の十二門、十二ひとへ、ギリシアの十二神、北歐の十二神、十字架の十二種、ローマの十二銅表。十三佛、

十三宮門跡、十三夜、十三經、十三代集、朝鮮の十三道、普通にいふ足利將軍十三代、キリスト最期の晚餐會が十三人。禪の十四變化、天主教の十四段。十五夜、十五鬼神、十五比丘尼御所、上杉の十五黨、徳川將軍十五代、水晶婚式が十五年目。十六菊、十六夜、十六善神、十六羅漢、十六ひさし。十七夜、十七文字、十七條の憲法、大内裏の十七殿、孟子の十七弟子。松が十八公、十八番、十八大師、武田の十八將、關東の十八檀林、唐の十八學士、支那本部の十八省。十九執金剛、女厄の十九歳。

## 二十以上

牡丹が二十日草、陶器婚式が二十年目。二十一史、二十一代集。二十二社、ドイツの二十二大學。二十四孝、二十四氣、二十四時間、二十四番花信風。二十五菩薩、二十五迂回、男厄の二十五歳、銀婚式が二十五年目、在職二十五年祝賀會は當今の流行。二十六文

字、二十六夜待、江戸城の二十六門。成實宗の二十七賢聖。二十八宿、雲臺の二十八將、東照宮の二十八將。

大寶令の冠位三十階、法華經守護の三十番神、新教徒と舊教徒との三十年戦争。三十一文字。三十二方、三十二相、三十二賢聖障子。三十三天、觀音の三十三身、西國三十三箇所、女厄の三十三歳。佛教の三十四心。三十五日。三十六計、三十六峯、三十六歌仙、三十六詩仙、三十六俳仙、三十六町は一里、韻鏡の三十六字母。金剛界の三十七尊。英國教會の三十九箇條。不惑が四十歳、バイブルの迷信數が四十。四十二章經、悉曇の四十二字門、男厄の四十二歳。日本の四十三縣。四十七士、米國の四十七州。四十八願、四十八刻、四十八手、四十八文字、越中の四十八瀬。四十九日。五十音圖、五十番歌合、知命が五十歳、金婚式が五十年目。五十

二位、一年は五十二週間。東海道が五十三次。源氏物語が五十四帖。六十間は一町、耳順が六十歳。六十一歳が還暦。易の六十四卦、外典の六十四書。日本は昔六十六州、それから六十六部。古稀が七十歳。七十一番職人歌合。七十二候、七十二峯。俱舎の七十五法、金剛石ダイヤモ婚式ウヰが七十五年目。七十七歳が喜壽。八十梟帥、八十氏人、八十隨形好。八十一思惑。八十八夜、八十八歳が米壽、四國八十八箇所。外道が九十五種。濱の名の九十九里、川の名の九十九曲。

百以上

百姓、百官と東百官、百箇日、百日紅、百度參、百日咳、百藥の長、英佛の百年戦争、百日草は菊、百花王は牡丹、百谷王は大海、百人一首は小倉そのほか色々。百一物。百二都城は要害堅固の名稱。今韻百六韻に古韻二百六韻。百八の煩惱、百八の鐘。早稻田伯の



千以上

百二十五歳説。二百三高地。二百十日と二百二十日。比丘戒は二百五十で比丘尼戒は五百。曲禮三百、三百諸侯、三百代言、一段は三百坪。詩經の三百五篇。圓を割れば三百六十度。一年三百六十五日。支那の四百餘州。四百四病。支那の南朝四百八十寺。五百枝、五百霧、五百重の波、五百羅漢。注射薬の六百六號。八百屋、八百長、うそ八百。江戸の八百八町、松島の八百八島。

千秋節、千字文、千本櫻、千石船、千里眼、千金丹、千枚漬、千日草、千羽雀、千社詣、千手觀音、千兩役者、千里の馬、千なり瓢箪。アラビヤの一千一夜物語、京の三十三間堂の佛の數が一千一體。千五百秋の瑞穂の國。良二千石。威儀三千、三千世界。八千種、八千度。八千八川は信濃川。

萬以上

萬歳、萬燈、萬歳樂、萬戶侯、萬金丹、萬葉集、萬壽節、萬乘の君、萬里の

長城、萬朶の櫻。三十三間堂の佛の數が三萬三千三百三十三體と云ふのは、ろれつまはし。土佐の四萬十川。四萬六千日。八萬四千の法門。寶龜の御代の百萬塔、專修念佛の百萬遍。八百萬づの神。十萬億佛土など。

#### 四一 昆蟲

昆蟲といへば、今では小學生でも、其の何物であるかを知つてゐる程の普通な名稱である。しかし、その字義は何と云ふ事かと問はれて、即答しかねたので、前かた之をしらべて見たことがある。

昆蟲といふ名稱は、遠く支那の昔から起つてゐる。詩經の靈臺篇の序には、文王受命、而民樂其有靈德、以及鳥獸昆蟲とあり、

禮記の王制には「昆蟲未蟄」とあり、禮運には「水旱昆蟲之災」とある。なほ蜡の祭の祝辭に、

土反其宅、水歸其壑、昆蟲毋作、豐年若土、歲取千百。

とあるのが見える。この祝辭は、神農氏の代から有つたと云ふ傳説があり、漢の蔡邕の獨斷などに之を載せてあるけれども、後世の疑作といふ説が信ずべきやうである。

「昆」の字義に種々ある。「昆同也」がその一つ。漢書の揚雄傳に「嚙々昆鳴」とある。「昆後也」がその一つ。書經の仲虺之誥に「垂裕後昆」とある。また爾雅の釋名に「來孫玄孫之子曰昆。孫昆貫也。恩情轉遠、以禮貫連之耳」とある。しかし、これも後昆の義である。「昆兄也」がその一つ。詩經の國風に「謂他人昆」とあり、禮記の檀弓に「昆弟之仇」とある。昆の字を固有名詞に用ゐたものに、詩經の

商頌の「昆吾夏桀」史記の李斯傳の「昆山之玉」の如き例がある。

昆蟲の昆は、右の外の意義で、これに二つの説がある。「昆明也」

昆明也の  
説

昆衆也の  
説

がその一つ。禮記の王制に、鄭玄は「昆明也。明蟲者、得陽而生、得陰而藏」と注してゐる。文選の魏都賦の「昆蟲毒噬」の李善注も、之に従つてある。この説は陽は明かで暖い、陰は暗くて寒い、昆蟲は春暖の時候から漸々發生し、寒冷の時候に至つて蟄伏するといふ意味に取つてある。つぎに「昆衆也」がその一つ。大戴禮の夏小正に「昆者衆也、由魂魄也者動也、小蟲動也」といひ、孔廣森は「昆既爲衆、又爲動、轉相注釋」と注してゐる。實に蟲類は群れ集る物である。段玉裁は説文解字注篇上七に、昆の字を「惟明惟動、動斯衆」。云々と総合的に解説してゐる。けれども今確かに昆蟲の字義を定めるには、自分は六書精蘊の説を參考して、「昆衆也」の

説に従はうと思ふ。「蝨」は「昆」の古い通字である。「蝨」は又「蛄」に作ることがある。六書精蘊六卷に「蝨」の字を説いて「細蟲總名。蟲類好聚而多。從二蟲。明意。今通用昆。」と云つてある。

つぎに「蟲」の字義に廣い狹いがある。大戴禮に「有羽之蟲三百六十、而鳳凰爲之長。有毛之蟲三百六十、而麒麟爲之長。有甲之蟲三百六十、而神龜爲之長。有鱗之蟲三百六十、而蛟龍爲之長。有倮之蟲三百六十、而聖人爲之長。」と云ふ所の蟲は、下等動物から人類に至るまでを含むものである。書經の益稷に雉子を「華蟲」と稱へ、詩經の周頌に鷦を「桃蟲」と稱へ、埤雅に鼠を「穴蟲」の總名と云ひ、我が國語に人を「はだかむし」と云ふが如きも、廣義のものである。又世の常に「鳥獸蟲魚」と云ふのは、鳥獸魚と區別して狹く云ふものである。禮記の月令に「孟春之月蟄蟲始振。」と云ひ、詩經の國風

に「嚶々草蟲」と云ふが如きも、狹義のものである。さうして六書精蘊六卷に蟲の字を説いて、「濕生化生者也、熱氣所蒸、其聚常衆、從三蟲、象其夥也」と云つてある。蓋し蟲の字義は狭きから廣きに及んだのである。

和名のムシ

和名には蟲をムシと云ふ。日本釋名には「蟲は蒸せなり、濕熱の氣蒸して生ず」と説いてある。この解説は、「濕生化生者也、熱氣所蒸、其聚常衆」といふが如くである。俚言集覽に、我が國の俗語に溽暑を形容してムシムシと云ふのを、詩經の大雅の「早既大甚、溽隆蟲蟲」。疏云、蟲蟲是熱氣蒸人貌に比べてゐるのは、面白い。ムシをムシケラとも云ふ。古くは宇津保物語俊蔭などにも見えてゐる。ムシと云ふ言葉は轉じて、小兒の疳かの病をも云ひ、又心氣の意味で「ムシが知る」「ムシがよい」なども云ふ。さうして昆蟲をさし

ては、舊來はハフムシ又はトブムシなどとも呼んだ。

昆蟲といふ名稱は、元は今の通りに用ゐられたのでは無い。宋の鄭夾漈の通志の「昆蟲草木略」といふのは、漢書の成帝紀の「草木昆蟲咸得其所」の用ゐる方の如くで、昆蟲をば動物と云ふ程の廣い意味にしてある。昆蟲草木略には、生物を分けて「草類・蔬類・木類・果類・蟲魚類・禽類・獸類」としてある。しかし明の彭大翼の山堂肆考には動物に「羽蟲・毛蟲・鱗蟲・甲蟲・昆蟲」の名目を擧げてある。小野蘭山は昆蟲草木略を校正して我が國に刊行し、また明の李時珍の本草綱目を原據として、本草綱目啓蒙を刊行した。これには動物を蟲・鱗・介・禽・獸の六部に分けてある。

西洋における昆蟲の研究は、古く *Aristoteles* から開けてゐるけれども、その著しい發達は第十七世紀以後の事で、イタリア人

Malpighi フランス人 <sup>キエーネー</sup>Cuvier ら諸氏の力によつて、昆蟲學が漸く成立つた。昆蟲の學名 *insecta* はラテン語の *insectum* から出てゐる。ヨーロッパ諸國語のも概ね之に基づき「分切するもの」の意である。それで之を「分切蟲」とも直譯してある。また昆蟲を英語に *hexapod* と云ふ。これはギリシア語の *hexapous* から出てゐて「六足のもの」の意である。それで之を「六足蟲」とも直譯してある。なほ昆蟲學を英語に *entomology* といふのは、昆蟲即ち *entoma* の學の意である。*entoma* はギリシア語であつて「分切するもの」の意で、ラテン語の *insectum* と同じ意味だと云ふ。

我が國で昆蟲といふ名稱が明かに六足蟲をさすに至つたのは、西洋の博物學が傳はつて後の事である。慶應四年出版の博物新編略解には、動物を「胎生類・卵生類・鱗介類・昆蟲類」の四つに分



けてある。その「昆蟲類」の中には、まだムカデやカタツムリをも入れてあつた。明治六年出版の英和字彙には、「insect」を「羽蟲」と譯し、「兩翼或は四翼なる六足の蟲類の總名」としてある。翌年出版の田中芳男氏譯、動物學には、「六足蟲をさして「昆蟲」と稱へてある。同十年能勢榮氏譯述、動物生理學には、「分折蟲は六足あり、二羽又は四羽を有つ。その體は三部に區別す、頭胸腹是なり」と述べてある。翌年同氏譯纂、中等動物學には、「之を「分切蟲」と譯してある。その後の動物學書には、概ね之を「昆蟲」と稱へてある。

なほ西洋の普通辭書を見るに、「昆蟲」の如きは、簡明なる動物學的説明を載せ、その標本蟲を示してあるものもある。然るに言海や日本大辭林などの「昆蟲」の條を見るに、「名詞」むし「又は「名詞」むし、むしけら」といふに過ぎない。専門辭書で無いとは云へ、やゝ

精確な説明を普通辭書にも望まねばならぬ。

#### 四一 孝女白菊の詩歌

孝女白菊の詩は、巽軒井上博士が九州旅行中に想ひ着かれたと云ふ七言三百八十四句から成る長篇の古詩で、明治十七年まづ郵便報知新聞に、つぎに同年發行の巽軒詩鈔に載せられ、當年の文學界を驚かしたものである。さて同十五年に始めて新體詩抄が出版になり、二十一年の頃東洋學會の雜誌に萩の家落合氏の孝女白菊の歌が出てから、新體詩そのものの評判までが急に高まつてきた。かの酒達磨の唐詩の端唄譯では、絶句の五言が七七または七五の句になつてゐるが、この新體詩では、

阿蘇山下荒村晚 夕陽欲沈鳥爭返

無邊落木如雨繁 隔水何處鐘聲遠

云々の古詩の七言が、

阿蘇の山ざと秋ふけて 眺さびしき夕まぐれ

いづこの寺の鐘ならむ 諸行無常とつげ渡る

云々と今様流の七五の句になつてゐる。その詩もその歌も共に金玉の文字である。なほフロレンツ(K.A. Florenz)博士が之をドイツ語譯にされた「白菊」も有る。

#### 四三 攝津大掾

嘗て兆民居士の「一年有半」を讀んで、居士が今一度文樂座へ行つて、越路太夫(こしぢだいふ)即ち後の攝津大掾(せつのだいじょう)で本名は二見金助(ふたみかねすけ)を聽いてから死にたいと述懐した所に至つて、居士が藝術における敬愛の

兆民居士  
と越路大  
夫

念の深きを感じざるを得ぬと共に、越路太夫その人にあこがれざるを得なかつた。この人が「太功記十段目」を語つて、夕顔ゆふがは柵だまのこなたよりあらは顯れ出でたる武智たけちといふ所に至り、大概の者なら一氣呵成に語り續ける、又さうしなれば聽衆の氣も散つてしまふ所を、攝津大掾は「バッテリー」と休み、懷紙を取出して鼻をかみ、さらに緩々と湯を呑み終つて、「光秀みつひで、必定ひつじやう、久吉ひさよしこの内うちに」と語り續け、しかも此の間も満場をして水を打つた様に謹聽させたと云ふ。前かた、大掾の「酒屋の段」や「順禮歌の段」を聽き、わが國に斯程の藝術があるぞと思つて、うれしかつた。げに相撲は東京、浄瑠璃は大阪。

#### 四四 八歳の留學

女子英學塾長津田梅子女史は津田仙氏の息女で、明治四年八歳の時に米國留學を命ぜられ、あちらで十年餘り普通教育を受けて十六年に歸朝された。歸朝の初は、なつかしい母君とも語りかね、父君が通譯されたことがあると聞く。それから更に國語國文を修められた。二十二年に再び米國に留學して、二十五年に歸朝された。女史の英語英文における堪能は、本家本元の人も中々及ばぬ程であると云ふ。女史の著作の中に、平家物語や太平記などの國文を英文に抄譯された「花がたみ」といふ書物がある。女史は、國語改良の手始として、文章を口語に近づけ、盛に振假名を使つて國文を讀み易くし、知識を普及し學問を通俗にするが宜しいと云つて居られる。

なほ女史の思ひ出話に、明治の初、女學御獎めの有りがたい御

拜謁の光  
榮

思召により、私ども最初の海外留學女生五名は、畏くも皇后陛下に拜謁を仰付けられ、赤阪御所において御簾ごしに拜謁し、御思召の御書付を下し賜はり、その後で御菓子と御絹とを戴きました。その御思召書に、

## 御思召書

其方女子にして洋學修業之志誠に神妙の事に候追々女學御取建の儀に候へば成業歸

朝の上は婦女の模範とも相成候様心掛日夜勉勵可致候事

辛未十一月

留學の辭  
令

とございます。留學の辭令は開拓使から出ました。その頃は今の様に内閣が無かつたから、黒田長官の取斗で開拓使から出たのでございました。拜謁の翌日五人打揃つて前日の装束で、江木寫真館において記念の寫真をとり、翌月米國公使ランマン

氏の夫人に伴はれて米國に渡り、サンフランシスコにおいて夫  
人と共に六人で記念の寫眞をとりました。その寫眞は二つと  
も残つてゐます。それから十三年目に歸朝してみると、全く母  
國語を忘れてゐましたが、之を取返して習ふ事は速くございま  
した。その五人の學友は、吉益亮子あきら女史むすめ、舊幕臣吉益氏の娘で出  
後明治十七年頃残念にもコレラ病でわかじにされた。と上田悌子ていこ女史むすめ、上田敏博士の親族  
六歳むねと山川捨松すくまつ女史むすめ、山川健次郎博士の  
人と益田繁子しげこ女史むすめ、益田孝氏の妹、即ち後の瓜生男爵夫人と私と  
でございました。と語られた。

#### 四五 小泉八雲

小泉八雲、何とゆかしい日本言葉の好い名であらう。その名

を聞いただけでも、神祕的觀察を以て詩趣に満ちた筆を馳せて我が日本の風土人情を世界に紹介した其の人と爲りが偲しのばれる。

小泉八雲とは、イギリス人 Rafadio Hearn が我が國に歸化して

の改名である。この人の如く詩的生涯を送つた者も、あまり多くは有るまい。その父は Charles Bush Hearn とし、ダブリン

生れの人で、ギリシア駐屯の英國軍隊附軍醫として Santa Maura

英國の保護の下にある に赴き、ギリシア婦人或はマルタ島 Rosa

Tessima を娶り、西曆一八五〇年嘉永二年六月廿七日に此の天才を生

んだ。その六歳の時に父の故郷に従ひ歸つたが、不仕合にも早く兩親に離れ、大叔母 Brenane 夫人舊教徒の許で教養された。

十四歳の時からバリの或神學校に入學したが、牧師となるのが



厭いとやら大叔母が財産を痛めたやらで、中途で退學して一旦故郷に歸つた。廿歳の時に米國に渡り、一時は落ちぶれて印刷人となり、新聞記者となつて文名が初めて顯れ、後にはニユー・オルレアンス新聞の文學部主筆となつた。

さてヘルン氏が日本を知り初めたのは、明治十六年の頃ニユー・オルレアンス市に開かれた大博覽會における日本の出品に特別の興味を感じ、日本から派遣の事務官服部一三氏に日本の話を聞いた事である。さうして明治十九年の頃西印度諸島のフランス領Martinique島に移つて詩人的生活をしてゐた。その後ハーバ―書籍會社から或畫家と共に派遣されて日本に遊ぶ折を得て、明治廿三年四月十三日横濱に着いた。程なく此の會社との關係を切つて、自ら日本の研究を始めた。

松江

熊本

神戸

東京

その年の九月から、服部一三氏文部省普通學務局長の紹介で松江中學の英語教師に聘せられて、神代以來の由緒があり、風景も美しい處に住み、深く日本を愛し、同校の教頭西田千太郎氏の媒で舊松江藩士小泉湊氏の女節子と結婚し、遂に歸化するに至つた。その名は、八雲立つ出雲から取つてある。たゞ松江の冬が身に適しないので、廿四年十一月から熊本高等中學の英語教師に轉任し、廿八年に辭職して神戸クロニクル新聞の文學記者となつた。その後東京帝國大學總長外山博士が深くその文章に感じて三十年に文科大學講師に聘し、英文學講座を擔任させた。それから卅六年まで勤続して學生を導き著作に努め、その後一時は無任の身となり、更に早稻田大學に聘せられて英文科を擔任した。はえぬきの日本人よりも日本を愛してゐると告げた小泉八雲

終焉

傳記

節子刀自

日本趣味  
の權化

氏は、あたら五十五歳の齡を以て、三十七年九月二十六日、俄に去つて白玉樓に上つた。法號を正覺院淨華八雲居士と稱へ、東京雜司谷（まじがや）の共同墓地に葬つた。墓碑には、小泉八雲之墓と誌してある。その傳記は、田部隆次氏の著書「小泉八雲（はつうん）」（早稲田大學出版）に詳である。特に此の書物の中に載せた「思出の記」の一篇は、貞淑にして内助の功の多い未亡人節子刀自の記述であつて、故人の精神生活を知るのには、遺著と共に必ず之を讀まねばならぬ。故人の筆にした日本趣味の權化たる英文學の最も多くは、實に刀自の國語を媒として出來たのである。故人は深く國語を親愛してゐた。好んで英語などを使ふ日本人は、大きらひで有つたと云ふ。

## 四六 言 海

明治三十二年の夏、根岸に大槻博士を尋ねた時に、博士が言海について話されたことがある。その話に、言海は私が二十九歳の時に文部省の命をうけて起草し、それから十年の後にやうやう脱稿したものである。その編纂に最も苦心した事の一つをいへば、前の人が幾多の解説をして置いてくれた古語や難語の方は容易く説明ができたが、日々誰も用ゐてゐる普通の言葉の方が、却て解説に困難であつた。例へば、「うつ」といふ他動詞にも、犬をウツ、釘をウツ、額をウツ、首をウツ、仇をウツ、敵をウツ、鐵砲をウツ、前まへをウツ、綿をウツ、説をウツ、刀をウツ、幕をウツ、水をウツ、紐をウツ、繩をウツ、碁をウツ、蕎麥をウツ、芝居をウツなど、種々の意

味があり、少しのちがひでも、辭書としては之を區別して置かねばならぬ。かやうに煩雜な區別をするのには、精神の極めてさわやかな時を擇んでしとげた。けれども言海が出てこのかた、これらのウツの區別が分明でないとして言海を見てくれた人は、恐らく幾人も有るまい。さて言海を私版として出版したのは、脱稿の後六年目であつた。出版の前に原稿を見ると、訂正したい箇所が甚だ多かつたので、そのまゝ出版をしかね、訂正に従事すること二箇年半、その間、喫飯と入浴と睡眠との外は殆ど筆を執つたのである。また出版に先だち、世の購求者の出金を成るだけ少くしたいといふので、折角編纂して置いた一萬餘言を削除し、又すでに出來てゐた數多の挿畫までも省いてしまつた。その時は實に骨身を削る思ひがした。出版した後、言海を見

ると、不十分の箇所や誤りの箇所があるので、更に増訂したいと思ふことが切である。その後、他の日本辭書も出たが、自分のと誤りの箇所が同じい事を見る時には、思はず冷汗が出ると語られた。

#### 四七 日本領土の言語

日本語はわが大日本帝國の國語である。しかし我が國の領土の人民の言語には、琉球語も朝鮮語も、オロコ語もギリヤック語もアイヌ語も、臺灣の支那語や蕃語などもある。琉球語は、大昔の日本語から分れたものである。朝鮮語は日本語と共にウラル・アルタイ語族の日韓語系に屬し、オロコ語やギリヤック語は同語族の滿洲語系に、またアイヌ語は北極語族に屬すると云ふ。

但し、それらの所屬については異説もある。支那語は印度支那語族の親玉で、臺灣の支那語は對岸の福建語派等に屬し、臺灣の蕃語は南洋語族のマレー語系に入ると云ふ。わが領土の内ばかりにも、言語研究のたねは澤山にある。

#### 四八 王堂藏書

明治四十四年即ち西曆一九一一年三月四日、餘生をスウイスの湖畔に送るべく横濱を船出した老紳士は、*Basil Hall Chamberlain* 氏である。同氏は一八五〇年英國に生れ、一八七三年初めて横濱に上陸し、それから重に日本語及び日本の古典を研究された。その後東京帝國大學文科大學の教師現に名譽教授となり、嘗て外山博士等と共にローマ字會の創立者となり、日本語のために言文一

王堂藏書  
の譲渡

致の主張者となり、日本文典の著者となり、古事記その他古文學の翻譯者となり、アイヌ語の光に照した日本語の研究者となり、琉球語と日本語との比較研究者となり、西洋人が日本の現代文學を學ぶためにした文字のしるべ等の著者となり、我が語學の上に貢獻したことの甚だ多い人である。その日本語は自由、その日本文は自在、その日本趣味は造詣が深く、その和漢の藏書は五車に滿ち、一々英王堂藏書の朱印を捺してあるさうである。「王堂」とは「バジル・ホール」の漢語譯である。同氏は多年精根を盡くして集めた愛藏の書籍とは云ひながら、之を讀む人の妙いヨーロッパに持ち去るのは、學者の徳義で無いことを佐々木博士に語られ、その取次によつて、因縁淺からぬ上田萬年博士に一萬一千餘卷の王堂藏書を譲り渡して行かれたと云ふ。



## 四九 外山博士

外山博士が我が國における教育の發展、學藝の振興、社會の改良などに力を盡くされた事は、永く記憶すべきものである。いま、國語の方面における博士の貢獻について聊か述べたいと思ふ。

まづ博士の國字改良の本願を説かねばならぬ。漢字を廢めて表音文字を國字とするのが、その主張である。「漢字破」明治十七年十月出版が、そのコトランである。小競合こせりあひをやめて大同團結を以て國字を改良するのが、その本願である。それで「かなのくわい」の大寄合明治十七年一月において、

「諸君篤と考へて見られよ。漢字を廢して假名になさんと云

ふ丈は同説なれども、他の點に於ては多少異同あらんは勿論の事なり。その異同たる、決して月雪花の異同に止まらざるならん。もし是まで通り部門を立て置かねばならぬ譯ならば、雨の部、風の部、地震、雷、火事、親父シヤヂの部までも置かずんばあらざるなり。」

と喝破して、月雪花の三部の合併を促された。さうしてローマ字會明治十八年二月創立の主唱については、

「假名にするも羅馬字にするも、漢字を廢したる上の事なり。未だ漢字を廢することに定まりもせぬのに、假名でなくてはならぬの、羅馬字でなくては厭いとだのと争ふ者は、兵法を知らざる者と云はざるべからず。大敵を前にひかへ乍ら戦ふことを差置きて、まだ取りもせぬ分取の割前に就て争論する如き

者は、言語に絶えたる者なり。斯る情態にては、敵に勝たんとは固より出来ざるなり。是れ即ち余が羅馬字者流に速に團結せられんことを望む所以なり。是れ即ち余が假名者流と羅馬字者流と同心協力して漢字を攻撃せられんことを望む所以なり。是れ即ち余が假名の會の會員たるに拘らず、羅馬字の會を興さん事に一臂の力を盡さんとする所以なり。と獅子吼された。間もなくローマ字會といふ大きな團體の運動が起つて、ローマ字國字主義を我が國に鼓吹し、しかも「かなのくわい」の大衝突を免れ得たのは、實に博士の如き、正大にして熱誠磊落にして又用心深い人が、その中心に居られたからである。

つぎに博士は新體詩の一大開山である。博士は「拔刀隊」來れ

や來れ<sup>レ</sup>などを創作し、明治十五年五月を以て同志と共に新體詩鈔の初編を公にし、山仙史<sup>（ちゆせん）</sup>の雅號を用ゐて自ら序文を書かれた。博士らの新體詩は、これまでの詩歌の作風の外に立ち、現代の詞で現代の思想を歌はねばならぬと云ふ意氣込を以て、西洋の詩風に倣つて日本の歌の一新紀元を開くためである事は、新體詩と云ふ名稱が直ちに之を表現してゐる。博士の作には、拔刀隊、豊太閤、我が海軍、佐久間玄蕃、忘れがたみ、畫題、我が喇叭手なり、輸卒、可兒大尉などが能く知られてゐる。「朝日に輝く日の丸の旗、ひらめく皇國の軍艦共よ、の如き、戦へば勝ち攻むれば取る、僅に數年天下を一統、の如き、全國の青年や少年が勇んで歌つたものである。殊に明治廿七八年の役などに豫て博士らの、作つて置かれた軍歌が大いに士氣を勵ました事は、博士の甚だ満足

された所であると聞く。

そのつぎは博士のエロキーションにおける功勞である。かの新體詩も、朗讀體もしくは口演體と名づけて、その自作「畫題」可兒大尉「我は喇叭手なり」などを公開の席で朗讀された。安政の江戸大地震の思ひ出を歌つた「忘れがたみ」廿四年の作は東京音樂學校卒業式の場合に朗讀され、日高眞實氏を哀惜した「弔詞」廿七年の作は葬儀の場合に朗讀されたのである。この未發達で而も發達させねばならぬ朗讀を率先して試みられた熱心だけでも賞讃すべきである。さらに博士の演説における雄辯に至つては名高いものであつた。「かなのくわい」の大寄合における漢字を廢すべし」と題する演説の如きは、普通文の筆記を通して之を窺へるのである。日本語の速記術が漸く進んでからは、速記によつて

博士の雄辯が寫されてある。諸縣の教育會や帝國議會などにおける演説が、山存稿の中に載せてある。その演説の大概は教育を中心としてのもので、教育界は博士によつて大いなる一代表者を得たのである。さて速記録の演説は、朗々たる音吐と堂々たる態度とに結びつかねば、能く博士の雄辯を窺ふことが出来ない。私は、明治卅二年に不幸の最期を遂げられた矢田部博士の追悼會における博士の演説を聴くとを得た。矢田部博士は、外山博士の友垣で、ローマ字會の女房役を勤め、大和魂、勸學の歌などの作家として新體詩の同志であつた。斯の友によつて追悼演説を手向けられた矢田部博士は、さぞ満足されただらうと思つた。なほ、明治時代からの吉例である三聲のバンザイの唱へ方は、博士の發議により、憲法發布について帝國大學の祝

賀の誠意を表し奉るため斯様に決したのに起ると云ふ。

惜しいかな、博士は五十三歳を一期として明治三十三年三月八日薨去された。實に我が國特に教育界の大いなる損失であつた。しかし博士の事業と精神とは永遠に生きてゐる。博士の記念として、山存稿が出版された。その出版になる前に、「雷音集」といふ題號で出るかも知れぬと聞いてゐた。「雷音集」に結構と思つた。或は同音で「獅子集」とも感ぜられた。しかし、それも誠に結構と思つた。何となれば尨大なる二冊の遺稿は一代の獅子吼集であるからである。

## 五〇 那珂博士

明治四十一年三月二日、東洋學者殊に蒙古研究の大家たる那

珂博士が亡くなられた。博士は東洋歴史の學者として餘り名高かつたので、國語の方面における嘗ての活動は忘れられた程である。けれども明治十年代に、或は文法會の會員として、或は千葉縣師範學校長當時の其の附屬小學校における發音的假名遣の實驗者として、或は、かなのくわいの幹部として、わが國語に新しい思潮を導かれたのは、忘れられない事である。その後、博士は、我が國の上世紀年考の考證者として、支那通史の著者として、崔氏考信錄の紹介者として、成吉思汗實錄の翻譯者として、歴史の方面に大いに貢獻された。また三十四年から凡そ二年間、國語調査委員に任せられたこともある。さうして博士の國語學における貢獻に特筆せねばならぬ事は、成吉思汗實錄の翻譯である。實に蒙古語は我が國語の同族語として、ウラル・アルタ



イ語族に列せられて居る言語である。成吉思汗實錄は七百年前の記録で、蒙古の古事記と云ふべきものである。この譯書を讀めば、直ちに我が古事記の口調を聯想する。或者はその文體が如何はしいと云ふ。博士自身も「世界無類の拙文」だと云はれたさうである。しかし文字通りに「拙文」とは思はれない所か、非常な能文である。博士は忠實に原文の語脈をたどり、わざと之を直譯して原文の面影を寫すことに努められた。そこに妙味も價值もあるので、同族語たる我が國語の古文體を以てこそ、能くその面影が寫し得られたのである。その譯文及び譯者の序文は、我が國語の比較言語學的研究に貴い光明を與へた。なほ博士は蒙古文典を組立てる志であつたが、惜しい事にはまだ纔かに手始であつたと白鳥博士が語られた。この外博士の未發

表の著作に「外交釋史」その他少からず有つて、歿後に「那珂通世遺書」の中に編入して出版された。天が五十八歳の博士にもう五年か十年の月日を假さなかつたのは、誠に残念な事であつた。

## 五一 雅 號

雅號は、いろいろの縁りてつけるものである。頼襄は安藝の人で山陽のと號し、祇園瑜は紀伊の人で南海のと號し、陸實は津輕の人で羯南のと號した。大槻玄澤父子は奥州磐井川の畔に住んだので磐水及び磐溪と號し、佐久間修理は象山の麓の松代藩に育つて象山と號し、大久保利通公は鹿兒島市内、甲突川の東に生れて甲東と號した。谷口信章は蕪の名産地である攝州天王寺村に棲んで蕪村と號し、梁川孟緯は、美濃の金生山明星輪寺の

居宅又は嗜好

規箴又は  
抱負又は  
緣故

ある巖山の東方に生れて星巖之に異説も有るとと號した。

中江藤樹は、故郷の軒端に藤の垂れた家で里人を教へ、松尾芭蕉は、江戸の深川の草庵に芭蕉を植ゑて正風の俳諧を鼓吹した。賀茂眞淵は、庭を田居のさまに作つて縣居と號し、本居宣長は鈴を書齋の中に懸けて鈴の屋と號した。

貝原篤信は易經の「滿招損謙受益」の語から取つて益軒とも損軒とも號した。山崎闇齋及び門弟の三宅尙齋と淺見綱齋との號は、中庸の「衣錦尙絢、惡其文之著也。故君子之道、闇然而日章」の語に基づいてゐる。菊地容齋は、狹量を誡められ、横井小楠は、小楠公の心意氣に感じて、それ／＼その號とした。式亭三馬は、唐來三和の文才を慕ひ、烏亭焉馬の友情に懷き、各々の一字を取つて其の號とし、高山樗牛は、莊子と惠子との問答の中の大樗と

思ひ出

齧牛<sup>リキウ</sup>とを取つて其の號とした。

伊藤博文公は少壯時代の名が俊輔で有つたので、漢字音を取つて春畝と號し、正岡常規は血を吐いて益々文藝にはげみ、血に啼くほとゝぎすの意を以て子規と號し、長谷川辰之助は早くから文藝を好み、嚴父からクタバッテシメイと叱られて、二葉亭四迷と號したと云ふ。

そのほか

それから四方山人、太田南畝は、その狂名の草書を讀み誤られたまゝ、蜀山人と號し、外山博士は、その氏の字に因んで、山と號し、福澤翁は、その實名諱、吉にあやかつて雪池と號し、吉田松陰は、その氏の字畫を取合はせて二十一回猛士とも號した。なほ色々の類例も有るが、つまり雅號は、その雅懷、その人品の如何を表はすものと云つて宜し。

## 五二 人名の讀み

その一

鳥居強右  
衛門

鳥居強右衛門の強の字に振假名が無ければどう讀むことかとまごつく者があらう。ひかし上方の或藩士がこれをトリイゴ<sup>○</sup>エモンとよんだので、權現様の御武運の開けはじめである長篠の戦の烈士トリイス<sup>○</sup>ネエモンを知らぬか。武邊にうといやつぢや。とて追出されたと云ふ。今の世に國語を云々する人の中にも、本居宣長をモトオリ<sup>○</sup>ノブナガとよむ人が無いとも限らぬ。それを心配してか、玉勝間<sup>たまがつか</sup>に自らの<sup>○</sup>まじり長と假名まじりに記された所がある。

その二

本居宣長

## 三善清行

名高い日本人で、その名の讀みの確かでない人が随分ある。

## 石田三成

「三善清行」の如きは、キヨユキともキヨヤスともキヨツラなどとも讀んでゐるが、しかし唐風に「善居逸」とも書いてあるから、キヨユキと讀んだのであらう。「石田三成」の如きは、大日本人名辭書にミツナリとカズシゲと兩様に擧げてある。貴婦人の名の如きは、後世から讀みかねて、多くは漢字音の讀みにしてゐる。たまたま假名がきを見つけて、さてはと思はれることがある。これらは昔の事であるが、近く御一新後の歴々の人で、今でさへ曖昧に讀まれてゐる人がある位であるから、後世においては猶更當惑する事であらう。その中にも末松子爵の名の如きは最も複雑な謂はれがある。「かなのてかゞみ」第二十三號によるに、子爵は初めは通稱を謙一郎とよび、名乗を房澄といつたが、後に兩

方を併せて謙澄と名づけ、之をノリズミとよみ、更にカネズミと改められたと云ふ。しかし之を字音でよむ人が多く、現今人名辭典にケンチャヨ、"Who's Who in Orient"にも Kenchō と記してある。

その三

まへかた前島男爵に「御名前のよみ方は」と尋ねたら、訓でヒツカとよむが、しかしミツといふ音よみで通つて居る。之について思ひ出す事がある。明治九年の一月御政事始に參列した時に「太政大臣三條實美、内務卿大久保利通」などと字音よみにして居られるのを聞いた。その頃は名を音よみにするのが正式であるかのやうに思つた」と語られた。

その四

上田萬年

「國語は皇室の藩屏、國民の慈母」といふ新しい標語を我が國語界に唱へられた上田博士の實名をば何と云ふので有らうか。

南條文雄

小西信八

通例「萬年」と讀んでゐるが、實はマンネンとよむのは號で、カズトシとよむのが實名であると云ふ。南條博士は名前の「文雄」を訓に讀む人があり、イギリス留學中に「F.Nang」あての爲替を送られて困つたことがあると話された。また東京聾啞學校長小西信八氏も、洋行の時に、「S. Konishi」と書いた爲替がアメリカへ來たので、自分の漢字はノ。プ。ハチとも。ン。バチとも讀む、旅行券には「N. Konishi」とあるが、「S. Konishi」でも通用するから渡してくれと頼んでも、容易に聞き入れてくれないので、やう／＼其の處で信用のある日本人に保證して貰つて受取ることが出來たと話された。



## その五

明治三十八年のころ、山縣有朋公へイギリスから勳章を贈られたころの思ひ出を林董伯爵が斯う話された。「私がロンドンの日本大使館にゐた時に、勳章を山縣公爵へ贈られるについて、イギリスの政府から公爵の御名前を何とよむのかと云ふ至急の問合せが來た。私はアリトモとよむ様に思つて居たが、館員の一人は、これをアリヨシだと思ふと云ふ。すると又一人は、論語の「有朋自遠方來、不亦樂乎」といふ文句を引いて、アリトモ説に理窟をつけた。しかしアリヨシ説の方では、論より證據、何々の書物を見るがよい、それに出てる」と云ふから、それを見ると、アリヨシと讀んで有つた。とにかく甚だ不安心であるので、とりあへず、山縣元帥即ち Marshal Yamagata としたら宜からうと

答したと覺えてゐる。後に御本人に會つた時に、これを尋ねたら、アリトモだと云はれた。外國にまで知られてゐる元勳の名前の文字を讀みかねて、不安心な返答をせねばならなかつたとは、如何にもなさげ無い事と思つた。

### 五三 「八月一日」さん

八月一日

日本人の姓氏も、やはり名前のやうに讀みにくいのが少くない。これは何處にも有る事である。前に飛驒へ行つた時に斯う云ふ話を聞いた。彼の地に「八月一日」さんと云ふ人がある。文字を見ては、日付のやうである。日付でないしと心得た所で、「八月」が姓で、「一日」が名だと誤り、ハチガツ、ツイタチさんと讀む人もある。しかし此は四字の姓でホヅミと讀むのだと云ふ。つい

讀みにく  
い姓

でに讀みにくい姓を若干あげて見よう。その中には、地名から出たものが多い。

- 京かなじり 目ま 籬かたに 間はさま 端はた 塙はなは
- 秋鹿あきか 阿閑あびら 饗庭あはば 石谷いそがや 生方なまかた 大佛おほらざ 及川おびがわ 鉦鹿かねか 葛くわ
- 飾しほ 纈きく 纈とち 纈「はなぶさし」 私市きりいち 功木くみぎ 來海くるみ 久我くが 木檜こくれ 來こ
- 臨ろう 三枝さいし 彭城さかき 向坂むぎさか 雀部さくべ 設樂しだら 委文しどり 村主むらぬり 陶山たうやま
- 十河とちがわ 伊達いたて 問叶とかなふ 福當ふくとんだ 井石いし 名越なごえ 沼垂ぬたひ 芳野ほうの 塙はな
- 和わ 仁杉ひとすぎ 日置ひき 糺村とほむら 逸見えんみ 魚井まなみ 八道はちだう 毛受めんじよう 萬代まんたい
- 物集ものあつ 安福やすふく 妙見たみ 丁野ちやの 麻殖あし
- 粟飯原あひはら 飛鳥井あすかみ 吾孫子あひひこ 下米宮あめのみや 五十嵐いごらし 一宮善いげぜん 一いち
- 風泊かぜどまり 五百籠いほろひ 善知鳥よとらう 海老名えびな 十二神じふにがみ 正親町ただちか 十七かぢ
- 夜神よかみ 三郡さんぐん 喜連川きづがは 祈答院いのたふらん 樂樂熊らくらくくま 周參見すまみ 陶器所たうきじよ

東海林 忽滑谷 子子子 波々泊 馬喰田 曲直瀬 八

國生 四十住 十八女 小鳥遊

○七寸五分 勅使河原 萬里小路 四月一日

○釋迦牟尼佛

「子子子」などは、一字では平易な文字であるが、斯うならべて見ると、宇治拾遺物語に片假名の「子」文字を十二かゝせて給はりて、讀めと仰せられければ、ねこここねこししこししと讀みたり」と云ふ類ひの謎で、甚だむづかしい。また前かた、私は「合田」と書いた姓の家を尋ね、近所でアイタさんはどちらですかと聞いても、中々わからなかつた。そのうち漸く文字を心得た人から、ああゴータさんでせう、つひも隣ですよと教へられたことが有つた。さう云はれて見れば何でも無い様であつた。なほ、江戸

時代に其の筋へ上申したと云ふ讀みにくい姓名の數多ある中に「谷谷谷谷」などの例が見える。

#### 五四 姓名の文字

取合はせ

伊藤博文公や山縣有朋公や大山巖公や大隈重信伯などの文字は、如何にも取合はせが好い。と頻りに感心して居る人があつた。所で或人が「そりや、その筈だ。論語の「君子博學於文」や「有朋自遠方來」や、そのほか御當人の氣に入つた文字を取つて改名したのであらうもの。しかし桂太郎公や山本權兵衛伯などは、どうだい。」と聞くと、「ウム、太郎や權兵衛も、他の姓には兎も角もあれ、桂や山本といふ姓には持つて來いの好い文字だ」と。そこで或人が「文字の恰好ばかりよくても讀み様がちがへば駄目でな

讀み様

ふさふ、  
ふさはぬ

國語の法

生半可

いか。同じ「秀吉」と書いても、「ヒデヨシ」といへば英雄のやうだし、「ヒデキチ」といへば藝者のやうでもある。」といふと「さう讀んでも、やはり姓の文字との取合せ次第だと主張した。」それでは同じ字の姓名で讀み様も同じでも、身の上が貴賤、貧富、幸不幸とまぢまちなのは、どう云ふものか。」と突込むと、「そりや、一方は姓名がふさひ、一方はふさはないのだ。」と方角をかへてしまつた。

## 五五 姓名の順

西洋人は名を前にし、日本人や支那人は名を後にするのが、その國語の法である。明治五年のころ岩倉大使の「*イ*」が西洋を廻られた時の記事に、吉田彦麿氏の如きは「Yoshida H. Komaro」と書いてある。向軍治氏の話に、日本人が生半可に西洋人の眞似を

支那人の  
姓名

たひねが  
はくは

イリノイ  
ス

して名を前に書くのが悪い。こちらから Mike (ミ)と書いてやれば、西洋人からも Mike G.と書いてくるとの事である。ローマ字の名刺などを作るときに氣をつけねばならぬ。支那人の姓名は、西洋人が書いても、一般に Li Hung-Chang (李鴻章) Yan Sie-kai (袁世凱)と支那語の通りにしてゐるでは無いか。

## 五六 龍祥院

毎度「翼」の讀みを忘れた書生が、師匠から「鯉願はくは」と覺えて居よと教へられると、今度は「鯛願はくは」と讀んだといふ漢學塾での話があつた。七歳の子が袈裟御前をアサゴハン(朝御飯)と誤つた例もある。「御早う」をオハイオ州の名と聯想して置いた米國人が、イリノイス近オハイオ州の名と言つたとは、毎度聞かされ

龍祥院

る話である。また英語の Language を郷里山口の「蓮華寺」と聯想して置いた人が、も一つ近所の寺と取違へて「龍祥院」と言つたと云ふ話もある。

## 五七 外國語の早合點

和田守式の記憶法といふのは、英語の水即ち Water を「魚多」と記憶する様に態と聯想させるものであるが、それはさておき、人は自分の國語が先入主と爲つて居るから、外國語を早合點することが折々ある。特にこれは無學の者に多い。

○メノシタさん

或旅館の雇人が「公使」を英語では Minister と云ふと教へられて、それから公使を「メノシタさん」と云つてゐたと。これは「井上さ

旅館の雇人

先入主となる



ん「木下さんのなみに、「目の下さん」と合點したものらしい。

○シチロペー

米國へ渡航した或勞働者が、草蓐スワローベイトをシチロペーと云つて居たと云ふ。「七郎兵衛」と云ふ様に思つたので有らう。

○八重洲河岸ハチヅウカシ

宮城前の外濠に八重洲河岸といふ所がある。文字通りに解すると、たゞ江戸の開けぬ前の名残かと思はれるが、實はさうで無い。「紫の一本」に「昔ヤヨウスと云ふ異國人に、此處にて屋敷を賜はりしよりの名なり。」といひ、甲子夜話にも「是もと諳厄利亞人ヤンヨウスと云ひし者の僑寓せしより地の字となり、類音にて取りなし八重洲と書く。」とある。ヤヨウスは家康公の顧問であつた。

裏白と釣堀と三三九度と

○三三九度ン

浦鹽斯徳をウラジロストック(裏白斯徳)といふ者があつた。斯様な例が幾らもある。[<sup>ナトブ</sup>Filbury Dock<sup>ドック</sup>]をツリポリドック(釣堀船渠)と云ひ、<sup>サウザンプトン</sup>Southampton をサンサンクドン(三三九度ン)といふ者もあつた。

○範多丈治

「範多丈治」といふ人名があつて、苗字が珍らしいが、若しや「半田丈治」の書き間違では無からうかと思つて、聞いて見ると、George Hunter といふ歸化人であつたさうだ。

○難波さん

汽船で火夫長の居る所をナンバーワン (Number One) などと呼ぶ。それをポトイなどに、ナンバサン(難波さん)と云ふ者があ

歸化人

汽船のポトイ

ると。序ながら思ひ出すのは、長い覺えにくいロジエストウエンスキ（Rozhdstevsky）といふ露國の提督の苗字をイギリス人に Rotten-dhese-sky と呼ぶ者があつたと云ふ。よく外國人を引合ひに出したがる人に、ジョン・オムレット（John Omlette）は何處の人かと尋ねたと云ふ話もある。

○洋 犬

清少納言が記した犬の名は翁丸おきなまる、里見八犬傳の犬の名は八房やっぼう、犬の名も少くは無い。さて洋犬をカメといふ起りは、飼主が英語で「Comel」カメ（來）と呼んだのを「龜」といふ名であると、日本人が取違へたものだといふ。

○灰 殻

近來の流行語「高襟ハイカラー」を「灰殻」と書くこともあるのは、「吹けば飛ぶ」

當て字

即ち輕薄の意味で當て字をしたものであらう。或老人はハイガラと言つて居た。

○萬まん棒ぼう

マレー語

横濱などで竹の棒の數取を「萬棒」と云ふ。これは元、シンガポールあたりからの傳來で、バンブー竹の語の轉訛であると。

○半ドン

老爺さん  
の輕智

老爺おやいさんが、子供に土曜日を半ドン(半日曜)と云ふわけを説明して、「半日お稽古をして午砲どんが鳴ると休みになるからの事よ。」と云ふと、子供は矢つぎ早やに、日曜日をドンタクと云ふわけを聞く。老爺さんは直ぐに又尤もらしく、「さうさ、日曜日にはドンを宅に居て聽くからの事よ。」

○ハンモッコ

出入の職人

子供がハンモックに乗つて遊んで居た。出入の職人の一人が、あれは何かと聞くと、他の一人が「あれは半舂はんちゆうと云ふのだ。見ねい、あの舂には二隅にしか綱が無いよ。」

○栗 芋

田舎の客が、西洋菓子に這入つたクリームを見て、何かと聞くと、新參の女中は「クリイモで御座います。」「クリイモか。なるほど、栗と芋とを練り合はせた物らしい。」

○ステンシヨ

子供が首をかたげて「ステンシヨのシヨは郡役所の所を書くのですか、警察署の署を書くのですか。」と問ふ。「いや、それはステーションといふ英語の訛りだよ。當て字をすれば停車場ていしやばと書く。」と答へると、「ああ、それではカンコーバ（勸工場）も英語の訛

英語の訛

新參の女中

りですか。」

○船底徳利

徳利のすわる部分が船底の様になつて居るから、船底徳利といふのかと想へば、實はフラスコの轉訛であると。

○早水仙

早水仙  
名風振子

また早水仙といふのは、水仙に似た草花で而も早く咲くから名づけたのでは無く、*Hyacinth* の轉訛であるさうだ。この草は「風振子」とも音譯してある。

アスバラ  
ゴス

外來語を何時の間にか自分の國の言語に轉訛させてしまつた例は幾らもある。英語の *sparrow-grass* (和名松葉獨活が、*aspa-*  
*ragos* とらふギリシア語の轉訛であるなども其の一例。序に、

○「あぶなす」

といふ事で面白い話がある。隣の西洋人の子供が怪我を仕掛けたので、こちらの女中が「あぶない」と叫んで之を助けた。その子供の母親は、大喜びに喜んだばかりか、あの女中さんは能く英語が出来ると褒めて居た。「あぶな<sup>ス</sup>を、<sup>ハヴ</sup>“Have an eye!”と聞いたので。

## ○「しぶわさ」男爵

先年實業團に加はつて米國觀光から歸られた神田男爵の土産話に、「どういふものか、澁澤男爵を方々でシブワサと言つて居た。」との事。これは、有り勝ちな發音の錯誤ではあるが、又かのロングフェローの詩題の人物、アメリカ印度人の <sup>ヒヤウ</sup>Hiawatha と <sup>ス</sup>スふ名が先入主と爲つて居て、それに引きつけられたのでは無からうか。

日本語の  
電報

支那語の  
電報

電編各字  
號碼

## 五八 漢字の電報

我が日本語の電報は、假名と數字との符號で打ち、西洋語の電報は、アルファベットと數字との符號で打つのが通例である。尤も明治三十三年に遞信省令第四十六號の電報規則で、ローマ字を以て日本語を事も定めら許された。然るに表音文字で無い數多の漢字を用ゐて居る支那語の電報を打つには、如何にも困つた揚句の智慧をしぼり出して、代用番號即ち號碼を用ゐる事となつて居る。「號碼」の全數は九八〇〇ほどである。「寄報章程」に「凡欲檢大<sup>○</sup>字號碼、只須按書尋部、便知大<sup>○</sup>字是<sup>二九</sup>碼、餘均倣之」とある。それで電話の番號でも見る様に、二百十四部首の電編各字號碼を見て、例へば「東京」と打電するのには、<sup>三六</sup><sub>〇〇</sub><sup>九九</sup>といふ號碼を以てし、先



方ではこの號碼に據つて復文するのである。その面倒臭さが思ひ遣られる。もしも日本人の打電に數多の漢字と假名との符號を使用するとしたなら、恐らく支那のと同様の方法を用ゐるより仕方が無からう。我等は我が簡便を喜ぶとともに、彼の繁雜に鑑みる所がなければならぬ。

## 五九 萬國字

前かた伍廷芳氏が米國駐劄の清國公使であつた頃の話である。同氏は、漢字は目に訴へるもので、國々によつて言語がちがはうが、時代によつて語音がかはらうが、其の字體は不變で、何れの言語にも適する可能性を持つて居るから、實に萬國語に共用し得る文字であると語られたと云ふ。如何さま、もし世界の諸

不可能

萬葉集の  
書き方

一二四

國語が皆支那語の如き單音語であるなら、漢字は實に萬國字となるべき希望があるであらう。單音語でない日本語や朝鮮語に、假名や諺文の出來たといふ事實は、伍氏の説を不可能の事たらしめる一つの證明となる。しかし單音語たる支那語の諸方言の間には、漢字は標準文字となつて、支那には最も多く漢字の恩恵があるであらう。

## 六〇 萬葉假名

支那語より外の言語において、不便な漢字を色々の方法で使つたものは、實に我が日本人である。その事は、萬葉假名の名の通り萬葉集において之を見られる。かの山部赤人が富士の山を詠んだ歌の如きは、

天地あめつちの之の 分わか時れし從ま 神かむ左さ備び而て 高たか貴くた寸とさ 駿する河が有なる 布ふ士じ能の高たか嶺か  
 乎を 天あま原のぼら 振あ放き見み者れ 度わた日るひ之の 陰かげ毛も隱かく比らひ 照てる月つき之の 光ひかり毛も不みえ  
 見み 白しろ雲くも母も 伊い去き波は伐は加か利り 時とき自じ久く會ご 雪ゆき者は落ふり家け留る 語かたり告つぎ  
 言いひ繼つぎ將ゆか往かひ 不な盡げ能の高たか嶺か者は

といふ工合に書いて、巧に字音と字訓とを交へ用ゐてある。中には遣之萬々、花爾有猿尾、今會水葱少熱などの萬葉假名が有つて、最も讀みにくいのである。しかし萬葉集にも大伴卿の宴會天平二年正月十三日正における梅花三十二首例へば、  
 烏梅うめ能の波な奈な 佐企さき豆ま知ち理り奈な婆ば 佐久さく良ら婆は那な 都つ伎ぎ豆ま佐さ久く倍ばい  
 久く 奈利なり爾に豆ま阿良あ受う也や

の如く、字體さへ變れば後の假名がさと同じいものが、既に多く出來てゐたのである。

古事記を上る表に、「已因訓述者詞不逮心、全以音連者、事趣更長」とあるのは、一應尤もの様であるが、もし、字音だけで無くても、赤人の富士の山の歌ぐらゐに書いて有つたなら、「惜舊辭之誤忤」とある其の舊辭が能く傳はつたで有らうに。古訓古事記なども、つまりは推讀に過ぎない。さうして此の後に其の古訓に不服な人が別の読み方をした所で、やはり推讀に過ぎないのである。惜しむべきは古事記の書き方である。

## 六一 假名の發達

名稱の舊  
説

「かなは、かひな又は、かんなとも記してあり、漢字では「假名」とも「假字」とも書く。この名稱の起原について舊來の説は、漢字を「眞名」とも「眞字」又は本字ともいふのに對するものとする。即ち、倭片假

名反切義解に「假字對眞字權也、字名義卽物名也。」如古事記萬葉集、兼用眞字假字、以義與音相雜筆之。」とみえ、玉勝間に「もと、かりななれば、そのりを音便に、んといひて、かんなとはいふ。」と見え、言海に「假名ノ略、眞名ニ對シテイフ。」元ト漢字ノ音ヲ假リテ日本語ヲ寫ス字トセシモノナリ。」と見えてゐるが如きである。

新説は、末松博士の日本文章論に「梵語の『から』の轉訛かも知るべからず。」例へば *A-Kara* は *ア* 音の字」とみえ、上田博士の「國語のため」に梵語のカラナにもとづく表音文字の意義であらうと見えてゐるが如きである。名稱の語原はともあれ假名の實質は、漢字を變じて日本流の表音文字としたものである。

假名の字原及び發達については、和字正濫抄や同文通考や假名考や假字本末や文藝類纂などに説いてはあるが、まだ未定説

が残つてゐる。ところで、國語調査委員會において大矢透氏が之を取調べて、これまでの謬説を正し、大いに發見される所があつた。例へば「へ」の字は、或は「邊」、或は「反」、或は「皿」などから出たと説いてゐたのを、大矢氏は「部」から出たことを明かにされた。その詳な事は、「假名遣及假名字體沿革史料」、「假名源流考」、「假名源流考證寫真」について見るがよい。

### 假名の恩惠

我が國に若し假名が作り出されなかつたなら、我が國文の發達はどれほど停滯したであらう、又教育の進歩はどれほど妨げられたであらう。近く現代の國民教育の跡を観ると、教育の進歩と假名の利用とは相並んで今日に至つたのである。今後も現在の國字が存続する限りは、國民教育及び國民生活において、假名の利用は一日も怠るべからざるものである。さうして此

の利用をするのに二つの方法がある。其の一つは、字體の種類を淘汰し整理する事、又一つは、読み書きに苦しみ又は不安心な漢字に成るべく假名を代用する事である。

我が國民が漢字から假名を作り出したのは、恰もラエニア人がエジプトの古文字からアルファベットを作り出したのと同じく、我が文明史の上に燦然たる光を放つてゐる。假名の製作について云ふべきは、先づ字體の進化である。漢字の發達を尋ねるに、古文に始り、周に籀文即ち大篆となり、秦に小篆となり、更に隸書となり、漢以後に隸書からして楷行草の三體が興つた。さうして六朝及び唐に至つて發達の極點に達し、永く固定の有様となつて今日に至つた。然るに我が國では之を六朝の頃に傳へ、さうして傳へたばかりでなく、楷書の漢字から片假名を作り、

## 性質の進化

草書の漢字から平假名を作つた。即ち片假名は楷書の漢字を省略し、平假名は草書の漢字を簡單にし、漢字の字體を特に進化させたものである。次には其の性質の進化である。いはゆる六書の性質を吟味してみるに、象形と指事と會意とは皆意標で、諧聲とても半ばは意標で半ばは音標たるに過ぎない。轉注は此の四種の何れにもある。假借は即ち音標であるけれども、それとても猶専らなる音標では無い。然るに假名は全く六書の桎梏を脱して、すべて純粹なる音標たるべく進化させたものである。

## 改良又改良

さても假名の文字の今日あるのは、一朝一夕の事ではない。改良を好み進歩を愛する我が國民が行つた改良又改良、淘汰又淘汰の結果である。片假名にも元は一音に幾種かの字體が有つ



たのであるが、漸次淘汰してきて、今日では殆ど一音一種のものとなつた。平假名の別體も、元は今日に残つて居る變體假名ぐらゐの少數では無く、一音に十數種のあるものさへ有つたのである。けれども我が國民は、既に之を淘汰してきて、この後は現在の平假名の別體をも更に淘汰して行くべき道中にあるのである。

## 六一 名前の假名

明治三十三年に文部省が國民教育に於ける假名の字體を整理した事は、國民教育に大きな便益を與へたのみならず、廣く世に影響し、とりわけて種々の活版事業の上に多くの便利を生じたのである。斯様に有り難い改良事業が行はれたに拘らず、今

假名の舊態

女子の名前の文字

以て假名の舊態を残してゐる治外法権がある。それは女子の名前の假名である。嘗て試みに、東京で四十四名の女兒について其の名前の文字を調べて見たれば、左の如く種々雑多なもので有つた。

○假名十九名

- 平假名 十一名
- 平假名變體假名併用 四名
- 片假名 三名
- 變體假名 一名

○漢字廿五名

- 訓よみ 十七名
- 音よみ 四名
- 音訓併用 四名

そこで今某女子の名前を書かうとすれば、如何なる文字かともごつかねばならぬ。之を本人に尋ねると、私のは平生平假名

漢字以上の  
大不便

法令の力

出生届の  
心がけ

で書いて居ますなどと云ふ。さうかと思へば、豈圖らんや、戸籍の文字とは違つてゐる事がある。簡便主義で出来た假名でありながら、却て漢字以上の大不便を感じせさせてゐるのは、女子の名前の假名である。しかも此の大不便が救済されないでゐる。之を救済する有力の方法としては、先づ名前の假名は文部省整理の平假名に限る事を法令で定めてほしい。しかし法令の力に依る外に仕方が無いかと云ふに、決してさうでは無い。假名の種類に制限が無いからには、國民自らが出生届をする時に、名前の假名に文部省整理のものを用ゐる様に心がけるなら、それだけ國民の不便が救はれる事になるでは無いか。

### 六三 假名の利用

もし現今の國文から振假名だけでも取去るとしたなら新聞や雜誌や小説本や、其のほか少年、青年又は婦人の讀物などがどうなるであらう。國民の不便不利は如何程であるであらう。かの「日本新聞」も、ずっと前から總振假名にしてしまつた。つまり現今の我が國字は、振假名などのおかげで、やう／＼凌ぎをつけて居るのである。

立札や看板

立札や看板を見ても、停車場の「よこはま」なごや、「かうべ」など、動物園の「鷺」（さぎ）、「鸚鵡」（あうひ）、「袋鼠」（カンガルー）など、そのほか「かみゆひ」、「わたしば」、「ピイヤホール」などは、わかり易い。商店の「生蕎麥」、「吳服太物」、「麴菓」子品々、「鯉節砂糖海苔鶏卵」などは讀みにくい。明治三十五年に日光の神橋も、あし流されたほど荒れに荒れた大風雨の後に足尾銅山をたづねた道で、あそろしい谷間の假橋の畔に、橋上は一

輛つゝ徐行すべし」と書いてある立札をみた。この立札は、危険を警めるためのもので有つたが、人夫に對する注意書きとしては、「そろそろ一くるづつはしをわたれ」とありたいと思つた。

また明治卅七八年の役に旅順攻圍の苦戰の中で、わが忠勇なる軍人は、假名書きのために、よく彼の地名を讀み得たので作戦に甚だ都合がよかつたとは、志賀重昂氏の從軍談である。そのころ新聞の號外で、「赤坂山」「熊岳城」「大石橋」などの遼東の地名に振假名がつけて無いと、可なり漢字を知つてゐる人までが、アカサカヤマとかクマガタケジヤウとかオホイシバシなどと讀むのを聽いた。振假名は、實に大切な杖である。難讀や誤讀を避けるためになるだけ假名書きや振假名を利用したい。東京市の電車に「電氣鐵道取締規則摘要」が掲げてあるのを見ると、

「第四十條 左ニ掲グル者ハ乗車スベカラズ

酩酊シタル者

同乗者ニ厭棄ノ感ヲ起サシムベキ疾病アル者

同乗者ニ不快ノ感ヲ起サシムベキ不潔ノ容裝ヲナシタル者」

などと書いてある。原文は如何にあらうとも、摘要であるなれば、誰にも能くわかる様に書き改めて欲しいと思つた。

## 六四 國字

我等は、國民一般に用ゐる文字を國字とよぶ。しかし龜田鵬齋の「國字攷」や高橋殘夢の「國字定源」の如きは假名〇の文字をさして「國字」と云ひ、貝原益軒の文訓の如きも、假名の文字をさして「國字」と云つてある。また新井白石の同文通考の如く、「辻・込・」などの日本製の漢字即ち和字〇を「國字」とも云ふことがある。前島氏の

假名

和字

上書に用ゐられた「國字」の意味は、今我等が呼んで居るのと同じで、御一新の後、國字國字と呼ぶことが段々やかましくなつた。我が國の國字改良説に漢字節用説と假名専用説とローマ字説と新字説とある。これに就いては、拙著「現代の國語」の中に説いて置いた。

## 六五 國語

我等は常に他國語に對して自國語を國語といふ。その字面からいへば、古く支那に「國語」といふ書が出来たが、それは春秋列國の史籍の名である。しかし後世では、例へば蒙古人が支那語に對して蒙古語をさす場合などに「國語」と云つてある。我が國で我が國語をさし、普通に「國語」と呼ぶのは、近世の事である。

## 國語科

徳川時代に殘夢の「國語本義」某氏の「國語言靈辨明」などといふ著書があり、慶應二年前島氏の上書にも、明治二年南部氏の建白書にも、明治六年西氏の論説にも、「國語」といふ語を用ゐてある。學事法令を見るに、明治五年學制頒布の時、中學校教科に「國語學」が置かれ、同十九年師範學校令や中學校令の公布の時、どれにも「國語」といふ學科が置かれた。また同三十三年の改正小學校令には、從來の「讀書作文習字」を合せて「國語」の一科目とされた。同三十年代から、何々「國語讀本」と呼ぶものが多く出た。

## 六六 國文

國文の意  
味

國文とは自國の文章のことで、廣い意味では散文のみならず韻文をも含む。國歌に對する「國文」は單に散文をさす。明治三



十三年帝國教育會から帝國議會への請願書に「國語國文」と云つてあるが如きは、我が國の言語と文章とを並べて呼んだのである。伴蒿蹊の「國つ文世々の跡」の「國つ文」は、國の文即ち國文である。國文を「和文」とも云ひ、また「邦文」ともいふのは、漢文や洋文に對する氣味がある。書名には、稻垣千穎氏の「和文讀本」明治十五年發行、里見義氏の「和文軌範」同十六年發行、權田直助氏の「國文讀考」同二十年發行、落合直文氏の「國文軌範」同二十五年發行、「中等國文讀本」同二十九年發行、三士忠造氏の「中等國文典」同卅一年發行、「國文學雜誌社」の「國文學」同三十二年から發行、などの例があり、その後の書名などに「國文」の語を用ゐることが多い。

## 六七 文 體

文體といふ語は色々に用ゐられてゐる。(一)時代の上から上古文體、中古文體、近古文體、近世文體など。(二)現行文の中でも語法の上から雅文體と俗文體、または普通文體と候文體と口語文體など。(三)事柄の上から記事文體と敍事文體と議論文體など。(四)作家の上から福翁の文體、蘇峯の文體、樗牛の文體など。(五)著作の上から源氏物語の文體と枕の草紙の文體、謡曲の文體と狂言の文體など。(六)外國文の影響の如何により和文體、漢文直譯體、和漢混淆體、歐文直譯體など。(七)修辭法の上から散文體と韻文體、または乾燥體と華麗體、簡約體と蔓衍體など。

## 六八 益軒と福翁

貝原益軒の著書には、平易な文字と言葉で書いた文章が多い。

益軒は徳育の恩人であると共に國文の恩人である。その「文訓」のうち、

「わが輩の作り出せるつたなきふみは、漢字も國字もあさはかなれば、人の見るめも恥かしけれど、もとより、天地の御めぐみ、殊にふかくかうぶりぬれば、其の萬一をむくい奉らんとするも、おほけなくて、そらおそろしけれど、字をしらぬ人と、小兒のともがらのために、かゝるよしなしごとをかきつゞけ侍り。」と謙遜にのべ、また次のやうに述べてある。

「われ文字しりたりとて、しらぬ人に對せるふみに、ことやうに、むつかしくふるびたる、からの文字をこのんでかくは、わが才藝あるをあらはさんとにや、其の心おしはかられて、いとみぐるし。唯、其の人のよく心得べき文字を、さすがつたなから

ず書きたらんこそ、目やすかるべけれ。」

福澤翁もまた益軒と相似た所がある。福澤全集の緒言のうち、

「自分の文章は最初より世俗と決心し世俗通用の俗文を以て世俗を文明に導くこと恰も真宗の開祖親鸞上人が自から肉食して肉食の男女を教化したるの鑿に倣ひ何處までも世俗平易の文章法を押し通し世俗と共に文明の佳境に達せんとするの本願にして曾て初一念を變じたるなし」

と述べ、「三十一谷人」といふ印章を刻したこともあると説き、また私淑した文體については、

「江戸に來り洋書の翻譯を試るときに至りて前年の事（家兄が蓮如上人の御文章は名）を思出し右御文章（かふかさま）の合本一冊を買求

俗文主義  
の本願

蓮如上人  
の御文章

めて之を見れば如何にも平易なる假名交りの文章にして甚だ讀易し是れは面白しとて幾度も通覽熟讀して一時は諳記したるものもあり之が爲めに佛法の信心發起は疑はしけれども多少にても假名文章の風を學び得たるは蓮如上人の功德なるべし」

と云つてある。福翁の普通文は誠に平易明快であるが、口語文體まで進まれなかつたのは、まだ時節がそこまで來なかつたらで有らう。但し、福翁自傳は立派な口語文體を以て記されてある。

## 六九 前島男爵

前島男爵が、幕末に「漢字御廢止之議」を將軍慶喜公へ上られた

事、御維新の後には郵便制度の創業などに功績の有つた事は、我が國民の永く記憶すべき事である。明治三十六年に小石川の男爵邸を訪ねて聞いた直話は斯うである。

「私は天保六年一月に越後の中頸城郡池部村で生れた。本姓は上野で、幼名は房五郎、後に程子の「卷之則退藏於密」の語を取つて退藏と改め、幕臣前島氏に養はれてから、更に來輔と改め、明治二年に百官名の輔を避けて又今の名即ち密と改めた。十三歳で江戸に出て醫學を修めた。その後郷里へ遊びに行つた時に、兄の子(五歳)に、昔噺の假名書き本や例の漢文の三字經などを江戸みやげに遣つた。甥は喜んで習ひ讀まうとするに、假名書きの桃太郎などは、容易く面白く覺えたが、「性相近、習相遠」などある三字經の方は、餘程苦んでも覺えられなかつた。これを見

て私は、平易な假名文で普通教育を施し、一般人民も假名文を用ゐるやうにしたら、甚だ便利であらうと、つくづく思つた。

十九歳の時に、黒船が浦賀に来て、我等に太平の眠りをさませせた。さうして國字改良について私の信念を更に深からしめたのは、その後長崎で米國の宣教師ジョー、ウィリヤムス氏の話聞いた事である。この人は新教の監督教會の宣教師で、布教のために支那へ渡り、咸豐の末まで支那語を學び、支那人が古文體と時文體とを用ゐて居る事を如何にも不便利に感じた。それから日本に来て神道を研究するために、古事記その外の書物から日本に來て、所が、日本文は漢字を音と訓と様々に用ゐ、支那文を學ぶよりも困難であるとなげいて居た。この人に日本文を教へてゐた友人の引合せで、私はこの人に面會し、後に慶喜公への上

書の中に御参考として認められた所の話を聞いたのである。その時は文久の頃で、この人は六十歳ほどに見えた。折を得たら大君（くん）將軍様に、日本人を文明にするには、先づ國字を改めねばならぬと申上げるやうにしたいと話してくれたと。

なほ男爵は、明治三十二年小西信八氏が編纂された前島密君國字國文改良建議書（非賣品）に自ら印刷の正誤を書き加へられたものを贈られた。この書物に收めてあるものは左の通り、

○漢字御廢止之議（慶應二年開成所頭取松本壽太夫氏願つて徳川慶喜公に上つたもの）

○國文教育之儀ニ付建議（明治二年遠州中泉に居て集議院へ建議したもの） ○國文教育施行ノ方法（上の建議に添へたもの）

○興國文廢漢字議（明治六年政府へ建議しようとしたが都合で見合はせられたもの） ○漢字ノ弊害ヲ論ズ（上の建議案に添へたもの） ○國文ノ便利ヲ論ズ（同上） ○興國文着



ローマ字  
を採用す  
る建白

生立

手ノ順序同上

○學制御施行ニ先ダチ國字改良相成度卑見内申書明治六年  
岩倉右大  
臣同上のたもの

## 七〇 南部義籌氏

明治二年にローマ字を用ゐて國語を修める論を其の筋へ建  
白された南部義籌よしちゆう氏の經歷と建白の由來とについて知りたい  
と、豫てから思つてゐたが、幸ひにして明治四十年の秋高知から  
上京された時に、同氏は旅館で斯う話してくれられた。

「私は天保十一年十一月九日土佐の香我美かがみを今は我郡立田村で  
生れた。岡田重義の次男であり、兄を重規と申した。十一歳で  
高知の中新町、故南部七藏の後を相續した。通稱は初は孫四郎

と呼び、南部へ來た時に幸馬ゆきまと改め、十五歳の頃また彦藏ひこざうと改め、名乗を義籌よしかずと申した。その際に細川元春先生潤次郎の父が、義籌字叔添ちくぞん、取海屋添籌之字、城東立田人、仍號東田とうだと書いて下さつた。七歳から同郡田村の西村氏へ手習に通ひ、西村氏の歿後に同村の入交柳藏氏いりまじりへ轉學した。高知へ來てからは、島田定吉氏へ手習に行き、細川元春通稱氏延平と徳永達助氏との兩家へ讀書、四書五經の素讀を習ひに行つた。少年の時は餘り讀書が好きでなく、一時は文學を止めて武藝ばかり習つた。安政二年十五歳の時に、大地震で高知の家が潰れて焼けたので、二年ほど實家に住んで居た。

## 養家

さて養家は高知藩の二千石の家老山内殿の家來であつた。家老の家來には、騎馬、騎馬格、近習、歩行者、黨、足輕、小者といふ階級

があつた。養祖父忠藏は手柄により騎馬に進んだ。その養子の七藏は騎馬格に下つた。七藏の死後、養子某は騎馬格のつもりで來たのに、近習に下つたので不平になり、不埒といふので家祿を召上げられ、故七藏の妻ひさは里方へ歸つた。所で私共の實母は男兒三人と女兒一人を遺して亡くなり、その繼母に此の「ひさ」といふ人が來てくれた。その縁で私は南部家を相續した。主家(山内左織殿)では、七藏の家を絶やすのは不憫であるから取立てるとあつて、歩行の身分にして下さつた。私はかの大地震の後は、實家から三里の所を高知へ通つて居たが、十七歳の時、高知に家を再築して歸つた。十九歳の頃心外になつて來たのは、陪臣の身で、親類へも肩身がせまい事であり、或時孟子の「有天爵者、有人爵者」の語を讀んで、天爵を以て世に立たうと思ひ、學問を

勵む氣になつた。

それから學問が稍進み、主人から蘭學の修業を命ぜられて、本町四丁目の蘭醫谷純正氏に就いて蘭學をした。そこまで吾が家から二十町餘もあり、それに傍ら習ふことゆゑ進みかねるから、専ら蘭學を致したいと願つたが、専らにする事は許されなないので、蘭學の辭退を申し上げた。二十二歳の頃、藏役を命ぜられて日勤となり、學問を止めねばならぬ様になつた。そのうちに時勢は變り、文久三年に主人左織殿は亡くなられて、その子壹岐殿(十五歳)が相續され、その翌年江戸へ學問に出なさる事になつた。壹岐殿は容堂侯の妹様の御子であり、御忍びで江戸に出られ、深尾勝之助と名乗られ、内部では主従なれど、外部では従者九人と同輩の様になさつた。その従者の一人が私であつた。

主人は松代藩士蟻川<sup>いよそ</sup>功<sup>こう</sup>氏の所(幸田家の中屋敷で只今は内閣總理大臣官邸のある所)へ砲術を習ひに行かれ、私も參つた。さうして私は時々開成所へ蘭學を習ひに行つた。その時蟻川氏の塾頭に石井邦猷<sup>くにみち</sup>と云ふ人があつた。この人は豊後の木下家の藩士であつたが、脱藩して來たので、山川<sup>せきめ</sup>一と變名して居た。この人が蘭學をやめた時嘗て蘭學の助けとして持つて居た、大庭雪齋の著書、和蘭文語を私にくれた。この書物は片假名交り文に横文字が這入り、二冊本であつた。私は之を讀んで大いに感ずる所があり、遂にローマ字採用を主張するやうになつた。その頃は世の中が騒がしく、長州征伐があり、將軍様は大阪へ御出になつた。主人も一年ほど江戸に居られて歸國の都合となり、私も御供して歸つた。その後御一新となり、私は志す所が

有つて明治二年の初に廿九歳で大學に入つた。その時の大學は文部省の如き事務をも執り、又皇學及び漢學をも授けて居た。なほ別に大學南校では洋學を授け、大學東校では醫學を授けて居た。時の大學別當は山内容堂侯、大學大監は秋月種樹氏、大學小監は仙石重固氏、判學事は松岡時敏氏であり、そのほか大博士や中博士の先生方があつて、舎長今で云へば舎監は遠藤溫氏であつた。大學で私の修めたのは漢學であるが、以前から感ずる所があり、漢文を以て「修國語論」を書き、二年五月に別紙之通……御採用相成度……と認められた建白文と共に之を判學事松岡氏へ差出すと、書記などは行はれぬ無駄事を出した者だと言つて居たが、判學事は之を受付けられたのである。翌年私は土佐に歸つて、四年八月文部省へ同じ趣旨で「文字ヲ改換スルノ議」を建白した」と。

その建白文は雑誌「洋々社談」に載せてある。なほ其の建白の後の事情については、同氏が配布された「文字改換ノ義ニ付演説草案」〔非賣品〕に記してある。それについて一二を云へば、南部氏が「ローマ」字を用ゐて國語を修める論を高崎正風氏に見せられると、高崎氏は、之を大いに聽くべき説とし、森有禮氏が米國から歸つたら、之を見せるが宜い、森氏が國語を英語に一變するといふ説に對しては、死を以て争はねばならぬと云はれたさうである。南部氏は、五色の中の「赤」を詠まれた「あかねさす日の御旗こそ國民のこゝろの色」のしるしなりけれ」の一首を記念として、眼病を忍んで書いてくれた。

## 七一 漢字と文章

徳富氏の  
説

初等教育の児童や中等教育の初學年生徒に向つて、作文や試験の答案などに漢字について多きを望んではいけない。嘗て徳富猪一郎氏は、

「日本の文學史を見れば、言語文字が何處までも著き纏つて、文學の妨げとなつて居る様に思はれる。即ち日本人は如何なる事を書くべきかと考へるより、寧ろ如何にして書かうかと考へたのは、今更珍らしいことでない。遠く一千年の昔三善清行が封事を奉つた時も、近くは井上毅、元田永孚の諸君が教育勅語を草した場合も、より多く頭腦を悩ました問題は是れであつた。」(國語改良異見に據る)

と述べられた。普通教育において、この妨げは最も著しい。我が少年らは、漢字交り文を綴らうとすると、一句を書いては首を

漢字の妨  
げ



かたげ、一語につき當つては思案にくれ、「トブ」といふ字は、どう書きますか。「トヨトミ」とは、どう書きますか。「ルス」といふ字を教へて下さい。」などと云ふ。その煩悶の結果、一時間に二三行以上は書けない者がある。けれども漢字を知らない所は、假名で書けと注意すれば、書くこと、書くこと、一時間に十行野紙の幾枚かを書く小學生もある。嘗て岡田正美氏が、

「兒童の未だその實質を學ぶに至らずして、ただ文字の外形にのみ孜孜として徒らに歲月を費すもの幾何ぞや。又相當の思想はありながら、漢字漢語を知らざるが爲に、之を表はすに苦むもの幾何ぞや。」(帝國文學第一卷第十二號)

と説かれたこと、至極同感である。國語科では、一概に云はれないが、地理や歴史や理科などで、思想の實質を試みる場合には、知

福地氏の  
説

つてゐましたけれども、字を知らなかつたから、それが書けませんでした。」とか「みな知つて居ましたけれども、文句が能く書けなかつたから、半分もできませんでした。」とか、こぼす者があるから、漢字や漢語に拘泥しない様に注意してやらねばならぬ。なほ、前かた福地源一郎氏は、現代の文章について、

「文章上に關しては、政府が定めたる教育の方針と政府が實行する公用の文書とが、常に背馳すること、即ち是れなり。是れを説明せば、政府は文學の教育に於ては、平易なる日本文を以て其基礎に置かんと望みながら、其平常の公用の文章は、頻に漢文體を以て自ら得意とせらるゝこと、即ち是れなり。」

(國民之友第二〇八號)

と説かれた。我等は、公用の文章が國民教育の方針に適應する

教育の方  
針と公用  
の文章

海外の日本少年と母國語

印度人と日本人

ことを厚く望むものである。

## 七二 海外における日本文

アメリカなどに居る日本の少年は、とかく母國の今の國字がむづかしいので、母國語を學ぶことまで嫌ふ風があり、却て二十六文字綴りの他國語を好むやうな體たらくである。それをなげいて、母國語の讀本を二十六文字に綴りかへて教へたれば喜んで能く母國語を學ぶやうになつたとは、てるる照井亮次郎りやうじちろう氏や、かまを英雄氏のみやげ話である。

また日印協會の役員から聞いた話に「印度の留學生らが日本語を習ふことは困難で無いが、漢字交りの日本文に通じることには非常に困難で、殆ど絶望とも謂ふべきである。例へば「御」の一

字でも「統御」<sup>トウゴ</sup>、「御親切」<sup>ゴシツケン</sup>、「御代」<sup>ゴダイ</sup>、「御手紙」<sup>ゴテガミ</sup>、「御事」<sup>ゴコト</sup>などと種々雑多に讀む。苦しんで一々漢字を學んだ所で、文章の中では全く謎のやうで、何と讀んで宜いか、さつぱり分らぬ。しかし日本に居る間は、口で日本語が話せるけれども、印度へ歸つて行けば、漢字交りの日本文とは縁が切れるやうになる」と。

國語の發  
展の妨げ

これらは、あなたがち珍らしい事實と云ふではないが、如何に今の國字が國語の發展を妨げてゐるかを明かにするものである。

### 七三 日本新聞

林伯爵の  
語

日本の新聞紙について林(董)伯爵が斯う云ふ話をされた事がある。「私がイギリスにゐた時、日本がロシアに勝つたに就いて、日本の新聞や雑誌を見せてくれと云ふことが、度々あつた。そ

こで新聞を見せる。大方、横に取つて見る。『大きな字の上へ小さい字を書いたのは何だ。』と聞くから、『大きな字の発音だ。』と答へる。『発音といふと、日本では新聞に節ノットをつけて、それを謠ふのか。』さうで無い。『それでは何が書いてあるのか。』それはイギリスでのアラビア文字Arabicのやうなもので、それに one, two, three とローマ字を附けると云つた風なものだ。』といふと、『それは學校の子供などに教へるには宜からうが、新聞や雑誌や小説などにも、なぜ一々附けてあるのか。』それは、イギリスのは、廿六文字おぼえれば宜いが、日本のは、さう行かない。支那文字を使ひ、少くも四五千字は入用だ。學校で教へたばかりでは讀めない。多くは、上の假名はよめるが、下の支那文字はよめなから。』と苦しい返事をする。『それなら、なぜ上のばかりにしないか。』

「なぜといふ事はないが、さうしなければ面白くない。『面白くないとは、どう云ふわけか。』面白くないとは、一つの趣味がない。』  
 『その趣味といふは、どう云ふものか。』趣味……いや、それは、あな  
 たが、ちと日本語を習つて見なくちや分らない。』といふと、『私は  
 そんな面倒臭いものを習つて、どんな趣味であるかを知る樂し  
 みを受けるプロバピリチーを犠牲にしても、寧ろそんな面倒臭  
 いものを習はない方が宜い。』と逃げてしまつた」と。

## 七四 日本言葉の會

會の目的

日本言葉の會は、明治四十三年十一月に、我が國の言葉と文章  
 とは日本言葉を基とすることを廣く世にすゝめるために起つ  
 た學會である。ローマ字ひろめ會の有力者たる藤岡博士、向軍

發起につ  
いて

習はない  
方が宜い

治氏、平井金三氏、後藤牧太氏、小西信八氏、大藏陸軍中將らが、この會について唱へ出された、さうして發會の際には、ローマ字ひろめ會副會頭たる林伯爵や、御歌所長たる高崎男爵や、帝國教育會長たる辻男爵や、井上頼圀、上田萬年、大槻文彦、芳賀矢一、山口銳之助の諸博士らが、大いに賛助されたと覺えてゐる。

日本語の會は、ローマ字ひろめ會と共通の目的をもつべき因縁があるが、しかしローマ字説の人でなくても、苟も國語を愛する人々は必ず喜んで同志となるべき學會である。それでローマ字ひろめ會員でない人々も大いに賛成され、殊に文士たる人々が數多加はられた。

日本語の會で時々寄合つた會員の間に取換された話を、思ひ出すまゝ少し記して見よう。

○その頃、書店の廣告に「此度の提供は云々とあつた。」「その提供は何といふ事だらう。」「それは法律語で差出して見せることである。一寸言ひかへにくいが、『此度の賣出し』と云へば意は通じよう。」

○「目次はみだし」と云へば分りよい。」「一覽表も、『一目千本』の例があるから、ひとめと云へば宜い場合がある。」

○「帝國劇場などは、言ひにくい漢語だ。」「日比谷座とかみくに座とか八洲座とか何とか名づけ様が有つたのに。」「國技館も。」「遊就館も。」

○「石鹼は洋語のまゝ、シヤボンと云へば宜いのに、漢字にひかれてセキケンと讀む者が多いやうだ。」「しかし洋燈や隣寸などは、漢字で書いて有つても、さすがにランブ、マツチと讀んで居る。」



○「年始狀に、昔は『新年之御慶千里同風日出度申納候』云々と書き、西洋では『御幸福なる新年を祝ふ。』とか『新年に當つて御幸福を祈る。』とか述べるが、我が現代文では何と書くべきか。『新玉の年の始の御壽を申し上げます。』では少し古いか。『新年の御祝を申し上げます。』が宜からう。『新年は年の始と云はれる。』祝は凶しきを吉きに轉ずる意であるから、年の始にはよろこびと云ふが好い。『それでは、年の始の御よろこびを申し上げます。』とするかな。『また『明けまして御めでたう。』『新年おめでたうございます。』でも宜からう。』

○「何分にも日本言葉の『利權回收』をせねばならぬ。』「國民に日本言葉を尊ぶ心を起させる事が最もかなめである。』

なほ、ローマ字ひろめ會の寄合の時であつたと思ふ、林董伯爵

天照皇太  
神

一六四

春日大明  
神

が「長くも我が皇祖アマテラスオホミカミを天照皇太神と漢字に書くので、テンセウクワウダイジンと申しても、少しも怪しまず、當り前の様になつてしまつた。このまゝ棄ておけば、後には春日大明神などもシユンジツダイミヤウジンと讀むのが通例となるかも知れない。」となげかれた。

## 七五　ローマ字ひろめ會

ローマ字ひろめ會が創立されたのは明治三十八年十月で、第一次西園寺内閣が組織されたのは翌年一月であつた。そのころ、或國體論者があつて、「皇國の大臣ともある人が、ローマ字ひろめ會の會頭や副會頭となつて居るとは不都合ぢや。神代このかたの國體を如何する。」と憤つた。そこで會頭の西園寺侯爵

國體論者

西園寺侯  
の曰く

は、安心されよ。我等は、神代このかたの皇國の言葉を外つ國の人々にも能くわかるやうに書ける文字をひろめる者である。」と挨拶されたと云ふ。その國體論者の憤りも、固より愛國心から起つたのであらう。しかし惜しい事には、その愛國心は鎖國的の愛國心で、しかも同會の精神を知らなかつたのである。上田(萬年)博士は、ローマ字を國字とする主張の精神を發揮して、同會發行の國字問題論集に左の如く説かれた。

「祖先以來、くゞしい漢字に満足せず、片假名や平假名を作り漸次音字を採用して來た日本人が、簡單なる、平易なる、音字としては假名以上の便利ある、此のローマ字を採用し、漢字の跋扈を防ぎ、純粹の日本語を正當なる位置に復し、五千萬の國民の口にする言語を國語の正體と立て、さうして日本語を世

界的の言語とし、日本文を世界的の文學としようと決心したのは、これは全く千數百年前の純粹の日本魂が、茲に再び發現して、漢字といふ阿片の魔酔にかゝつた人々のねむりを覺ますのだと云つてよからう。三千年來國民の一致を有つて居る大和言葉は、ローマ字によつて、世界の各國民に紹介され、さうして未來永劫不變の文壇に登録されるのである。

## 七六　ヘボン氏の辭書

ヘボン氏 (J. C. Hepburn) は、西曆一八一五年三月十三日に米國のペンシルバニア州のミルトンで生れた。同氏が横濱の米國領事館附の醫師となつて初めて日本に來たのは、一八五八年即ち安政五年であり、それから神奈川の成佛寺の内に假住ひをし

て熱心に日本語の研究を進めた。かの名高い「和英語林集成」の第一版は、一八六七年即ち慶應三年に上海で出版になり、その第二版は一八七二年即ち明治五年に横濱で出版になつた。前には日本では活版印刷が出来なかつたからである。その辭書のローマ字綴りは、前からの例を整理して、凡そ父音字を英語風母音字をイタリア語風にし、更に第二版には第一版の綴りを訂正してある。明治十八年にローマ字會式の綴りが定められた時に、従來の綴りが少からず改良されて、その式が、我が國を始として西洋諸國にも弘まつた。その翌年出版のヘボン氏の辭書の第三版には、その綴りがローマ字會式に改められたのである。その辭書が日本語及び英語の研究者に與へた利益は多大である。この人は明治四十年九月廿一日に米國で歿くなつた。

未曾有の  
大辭書

編纂の苦  
心説

## 七七 大日本國語辭典

我が國未曾有の大辭書である上田松井兩博士共編の大日本國語辭典が、大正十年に完成された。前かた、その第一巻出版の時、この辭書の編纂について松井博士は、出版廣告には苦心十五年とあるが、實際に設計の出來たのは二十年前で、日清戦争が平和になつた頃の事である。先づ考へて見たに、たゞ言葉をならべて説明しただけでは興味が無い、實例について語彙の變化や應用を示さねば生きぬと思つたので、有らん限りの材料により言葉の出典を調べて一つ一つ索引を作つた。それを作るのに五年間を費した。その當時は古本屋を漁つて古今の和漢文書を買ひ求めて言葉を集め、現今の實用語や流行語などは、斷えず

新聞雑誌の類から拾ひ集めた。かやうにして集めた索引の語數は實に四十萬に上つた。それについて困つたのは、言葉の訓み方、漢音と吳音との區別の困難で有つた。さうして唐音などは丸で據り所が無く、一々の言葉を品詞別にする事は頗る面倒。學術語や外國語の譯語が一定して居ないのにも随分苦しんだ。何分にも上田博士は忙しい人、私も公職が有つたので、夜分などは更かした。二十年餘の間書見と執筆と校正とに努めたので、視力が衰へた。しかし苦勞ばかりの様に想像すべきもので無く、恰も子供を育てると同じで、随分楽しみなもので有つた。育てあげた所で、意に満たない子供もあるが、しかし子供はかほゆいものである。なほ手落や誤りの所は増訂して完全にしたいと思ふ。語原と方言とは、その研究や材料が最も困難であるの

で、後日に譲つた。」と語られた。兩先生が和漢洋の學に達し、學者にして常識に長け、辭書を編纂するに至極堪能の人であられることは喋々と申すに及ばない。

大日本國語辭典は、その分量から云ふも、その内容から云ふも、實に我が國空前の大辭書である。その精神的勞力の莫大な事は云はずもがな、その物質的費用も夥しい事で有つたらう。然るに情けないかな、我が國の出版物の内外國に及ぶる實行は、總じて歐米の大國の其れに比べては甚だ少いのである。この状態は、我が國の出版物が將來も永く免れられない運命として諦めねばならぬで有らうか。これには大いに改良を要する事が無いだらうか。我等は、如何にしても免れられない運命として之を諦めることが出來ない。



## 七八 發音の遊戯

いづれの國にも發音の練習のため昔から行はれて居る言葉の遊戯がある。我が國では之を「早言」または「呂律まはし」などと云ひ、英語では之を *fast saying* (早言) または *oral gymnastics* (口の體操) などと云ふ。これは語路が面白く、殆ど無害な意味の文句で、言語の發音に熟練させる利目のあるものである。國語教授において、適當に之を利用することは、興味があり且つ有効である。但し、過度に之を行はせることは慎むべきである。

「呂律まはし」は、同音または類音などを、語句の中に繰返し又は錯雜にして置いて、言はせるもので、誤つても面白く、誤なく満足に言へれば結構と云ふ次第である。「呂律まはし」には、次に擧げ

る様なものが多い。その短いものは幾度も唱へるのである。

○備後合羽く。

○文福茶釜く。

○生卵長袴く。

○生鱈生魚生鰓。

○長持の上に生米七粒。

○この釣瓶つぶれた釣瓶。

○御前の前髪さげ前髪。

○唐人が提灯を十つけて通る。

○有馬玄蕃さんの玄關番の番合羽。

○ローマの兵隊、ラツバを吹いて驢馬に乗る。

○神田鍛冶町の角の乾物屋で、勝栗買つたら、堅くて噛めない。

○山王の御猿が三萬三千三百三十三匹。

○京の三十三間堂の佛の數を數へて見れば、三萬三千三百三十三體御座るとの。

○粉米の生米、コロン粉米のコン生米。

○盆米五合、盆豆五合、盆牛蒡五本。

○向ふの垣に鷹が卵を澤山産んだ。

○向ふの古桃の木に古ぼろが下つた。

○向ふの田圃のたんぼの花に蜻蛉が留つて直ぐ飛んだ。

○生壁になぜ竹立てかけたか。立てたかつたで竹立てかけた。

○備後の貧乏な御坊さんが、豊後へ行つて豊後の屏風に備後の貧乏な御坊さんの畫をかいた。

○歌うたひの前で歌うたふ様な歌うたひなら、歌うたひの前で歌うたふけれども、歌うたひの前で歌うたふ様な歌うたひで無いから、歌うたひの前で歌うたふ事が出来ぬ歌うたひ。

○赤卷紙あかまきか、青卷紙あおまきか、黄卷紙わうまきか、ハイ黄卷紙はいわうまき

○生杉葉なますぎ、生杉葉なますぎ、二つ合はせて二生杉葉。

○蛙かへるビヨコく、三ビヨコく、合はせてビヨコく六ビヨコく。

○御盆ごぼんの上に團子だんごがコロく、(以上三回三つ合はせて、三盆さんぼんの上に三團子さんだんごが三コロく)。

○柿かき一口に餅もち一口、柿かき二口に餅もち二口、柿かき三口に餅もち三口(十口まで)  
○手鹽てしほ一枚、木皿きざら一枚、木皿きざら二枚、手鹽てしほ二枚、手鹽てしほ三枚、木皿きざら三枚、木

注意

皿四枚、手鹽四枚（連鎖にして十枚まで）

かの咄家の話す「壽限無」の如きも一種の「呂律まはし」である。此に注意すべきは、下品な語句または變に聞える語句のものを避けることである。例へば「この客は能く柿を食ふ客」の如き、「扇に玉」の如きもの。

## 七九 漢語と諧調

漢語の  
趣味

漢字が表意文字であると云ふ所から、漢字で書いた漢語の學習が、字形や字義の穿鑿に墮ちて、字音に含む趣味を閑却されることがある。その趣味について、馬氏文通に説いてある所により、聊か略述して見よう。

○雙聲（同じ父音を並べること）

雙聲

猶豫 *yūyo*

顛倒 *tentō*

瀟灑 *shōsha*

躊躇 *chūchū*

踟躕 *chichū*

褒貶 *kōhen*

滑稽 *kokkei*

黽勉 *binben*

邂逅 *kaikō*

切磋 *sessha*

周章 *shūshō*

恬淡 *tentan*

累卵 *ruiran*

○疊韻 (同じ韻を重ねること)

輿亡 *kōbō*

蹉跎 *sata*

窮通 *kyūtsū*

支離 *shiri*

滅裂 *metsuretsu*

逡巡 *shunjun*

纏綿 *tennen*

栽培 *saihai*

彷徨 *hōkō*

亡羊 *bōyō*

經營 *keiei*

遲疑 *chigi*

辟易 *heiki*

沐浴 *mokuyoku*

○重言 (同じ語音を重ねること)

助辭添加

些々 sasa

縷々 ruru

微々 bibi

默々 mokumoku

鬱々 utsuutsu

碌々 rokuroku

喋々 chōchō

累々 ruirui

懇々 konkon

拳々 kenken

侃々 kankan

諤々 gakugaku

○助辭添加 (然「如」焉「爾」乎等の助辭を添へること)

斷然 danzen

勃然 botsuzen

偶然 gūzen

突如 totsujō

躍如 yakujō

忽焉 kotsuen

炳焉 heien

莞爾 kanji

率爾 sotsuji

確乎 kakko

斷乎 danko

斷々乎 dandanko

言語教授  
と音聲

ちよそ言語があつて、その後文字が出來たのであるから、言語が本で、文字は末である。さうして言語は音聲を以て組織されて居るから、言語教授においては音聲の事をなほざりしては

ならぬ。我が國の言語教授は、もつと耳をはたらかせる様にして行きたる。

## 八〇 音韻變化

音韻變化を五十音圖によつて「音通韻通、延音約音略呼」などと、或程度まで説けぬことは無いが、これを五十音圖の全體に自在に適用し得る定則とは出来ない。「時雨」は「しばらくくらの通略で、雪」は「やすくきゆる」の通略であると云ふやうな、勝手な説明は、受けとられない。この様な説明が勝手に出来るものなら、つばくらの通略は「たか」となり得る筈である。

音韻組織を母音と父音とに分析し、音圖の父音排列を明かにする事や、音韻變化を「音通」「韻通」などと機械的に説明しないで音



聲學的に説明する事や、語根と語尾とを確實に分ける事や、語尾の變化を簡明に説き明す事などは、ロIマ字の適當する所で、假名の及ばない所である。國語を假名で解説する方法とロIマ字で解説する方法とは自ら變つてくる。

## 八一 語 族

同じ家の内に住まふ者が、必ずしも皆同じ親族であるとは云はれない。或は雇人も居ることがあり、書生も居ることがある。又同じ家に住まはなくても、元は同じ家から兄弟が分家したのももある。その間柄を知るのには、能く筋目を調べて見なければならぬ。もし無暗と、少し何處か似てゐる人達を見つけて、同じ親族であると云ふならば、誤りとなるであらう。語族の事

も同様である。

一八〇

語族の關係は、永く承け傳へられる言語發音と語法の特質によつて認められる。單語の如きは、他國語が入り易いものであるから、そればかりでは必ずしも當て事にならない。例へばイギリス語には、外來のラテン系の單語が固有のゲルマン系の單語より多く、日本語には、外來の支那語系の單語即ち漢語が固有の和語より多いのである。しかし比較的、外來語に侵され難い日用の家庭言葉などは、おもに其の國語の固有語を用ゐてゐる。ラテン系の兄弟語たるイタリア語とフランス語とイスパニア語とポルトガル語の如きは、多くの特質において近親の間柄であることが知られてゐる。また日本語と朝鮮語とは、單語においては、何れも澤山の漢語が入り込んでゐるが、語法などの特

質において同族語たる關係が認められてゐるのである。上古史又は太古史を研究するには、言語の比較研究が大切な一要件、或場合には殆ど唯一の要件となるであらう。しかし似たやうな諸方の言葉を無暗と拾ひ集めて見た獨斷を妄に信用するわけには行かない。

## 八二 南蠻缺舌

それ／＼の國語は音韻組織までちがふ。他國語をきゝ慣れねば、それが變にきこえて、とかく我が語音ほど正しくはないと思はれ易い。特に未開人の語音に對して、さうである。孟子に「南蠻缺舌之人」とある。缺舌とは「もず」といふ鳥の惡しき聲をいふ。後漢書の南蠻傳にも「語言侏離」とある。侏離とは、聲の正し

くない形容である。我が國でも、萬葉集などに「言左徹久百濟」言佐徹久幸（さへぐと）などとある。さへぐとは、さへづること、たゞさわがしく意味のわからないのを云ふ。我が國語の本來の音は雅正で、外國語の音は凡て濁つてゐると云ふ「漢字三音考」の誤は「國語のため」に正されてある。

### 八三 字 音

明治三十七年のころ、清國の四川省の少年が日本の學校に來てゐた。その少年は漢字を國元の發音で讀むのが例で、或時「暴風」を「バウフング」(baufung)と讀んだ。之を聞いた我が國の少年は、「ポーフー」といふ語を彼の少年が讀みなまつて、一概に不正な發音をしたものと思つた。これは無理もない事である。字音

と字訓との別を知り、字音は支那語音に基づいてゐることを心得てゐる者の心で、我が少年をせめてはならぬ。なぜかと云ふに、我が少年は、ガッコーといひ、センセーといひ、ポーフィーなどと云ふ言葉を、日本固有の言葉と共に全く日本語として覺えたからである。さてポーフィーと發音するのを唯一の正常なものと思つた我が少年は、バウフングと發音してはいけないことを咎めた。そこで「我々がポーフィーといふ言葉は、むかし支那から來たもので、バウフングといふ支那語音と、もとが同じである。しかし、わが國でも、昔はバウフウと發音したが、だんく變つてきて、ポーフィーと發音する様になつた。けれども、どちらも、いけなない發音ではない。支那の四川省などではバウフング、日本の現代ではポーフィーと發音する様になつてきたのだから、その國そ

の國の習慣に従つて發音すればよい。」と言ひきかせた。

## 八四 江北の枳

晏子春秋に曰く、橘生淮南則爲橘、生淮北則爲枳かちんちと。言葉にも  
いても其のやうな事がある。

### ○ぬばたま

「ぬばたまは烏扇からすあふぎの實で、それが黒いから、ぬばたまの黒といひ  
そのほか黒色にゆかりのある事物の枕詞となつたのだと冠辭  
考に説いてある。さて古事記や萬葉集には凡て、ぬばたま奴婆  
多麻たまなどとあり、たゞ下總國の防人さきもりの歌に、むらたま牟浪他麻と  
あるのは、ぬばたまのなまりである。後世に、むばたま又はうば  
たまといふのは、ぬの父音が變り又は落ちたのである。

餘の木と  
榎の木

斧と雪

○「よ」の木

慶長九年に一里塚の上に木をうゑるとき、掛り役が「松の木をうゑませうか」と伺ひ出ると、將軍様には「餘の木をうゑよ。」との御意であつたのを、掛り役が聞き違へて「榎の木をうゑてしまつたと云ふ。三河あたりの人は「え」の木を「よ」の木」と訛るから間違つたのである。しかしこの話は好事家が作つたのだとも云ふ。

○「ヨ」キが降つた

或朝の事、同窓の友が早く起きて、「ヨキが降つた。」と喜んで呼んだ。まさか斧が降つたのでも無からうと思つて、起きて見ると、雪が降つたのであつた。越後の人はユをヨと訛ることがある。

○兄か姉か

關東や東北地方の人は、イとエとを混同するのが通例である。ニ・サンかネ・サンか聞きわけられぬ事が屢々ある。これは、女中奉公に來る位の者ばかりで無く、相當の教育を受けた人にも、「與ひて」祝へて「淵源」いんげん「隱元豆」えんげんまめなどの假名違ひを見ることがある。

## ○「ジンダ」

シとス

東北地方の人が、用事の濟んだことを電報で、「ジンダ」と知らせると、受信人の方では「死んだ」と思つて、大騒ぎをしたと云ふ話がある。あちらの人はスとシとの區別が正しく無くて、却てあべこべに云ふことがあり、文字も矢張間違ふのである。

## ○「チン急動議」

青森縣選出の衆議院議員で有つた故工藤行幹氏の「チン急動



一種のキ

議は名高い話である。しかし工藤氏は「緊の音をチンと誤つたのでは無く、やはり「キン急動議」と言つたつもりで有つたさうだ。あちらの人には、キの發音に一種の訛りはあるが、しかし之をチと聽き取る方も間違つて居ると云ふ。

○「エイ」と「エイ」

名古屋の人、東京の人が「エイ」といふのを怪しんで、先生に向つて「エイとエイとどちらがエイでせうか」と尋ねると、先生これを兩成敗にして曰く「ヨイ」といふのが「ヨイ」。

○「ゼシ」

玉川上水で産湯を使つたと云ふ人達は、意氣に「ゼシ來たまへ」などと言ふ。さうしてあべこべに「大久保のキリヒマ(切島つゝじ)を見に行かう」などと言ふことがある。「なんぼ東京でも是非

兩成敗の  
ヨイ

シとヒ

はゼヒ切島はキリシマといふのが本當であませう。」と上方の人が云つて居た。ホヤ／＼の東京人の中に、東京兒と言はぬばかりに、しかし不意氣にゼシなどと言ふ人がある。

○、ウ、ロン屋

ラ行音とダ行音との混同は、日本の西部において特に多い。例へば「ちどろく」を「オロク」、「いへども」を「イエロモ」、「元來」を「ガンダ」といふ類ひである。東京で育つた子供が福岡へ轉居し、新しい友達から「ウドン屋ぢや無い、ウロン屋ぢや。」と冷笑されたと云ふ胡亂ろえんな話もある。香川縣で「タロツノカロナウロンヤ」多度津の角の饅頭屋といふ言ひ草もある。之とあべこべにラ行音をダ行音に訛る例は、ランプをダンプ、禮をデーと云ふ類ひである。かの薩摩の西郷從道侯の名も、實は「隆道」の音の訛りに従は

れたのだと云ふ。

## 八五 茶釜

茶釜を知らぬ日本人はあるまい。文福茶釜の御伽噺もある。さうしてそれをチャマガといふのは、諸方にあることである。茶を煮るまがでない事は、誰も能く承知してゐながら、しらずく轉換させるのである。さて茶釜について、明治卅九年に飛驒三郡の學校教師の方々に調べて貰つた所によると、面白い現象がある。即ち、

飛驒の茶釜

チャマガ

益田郡

- 朝日村チャマガ
- 小坂町チャマガ(大方)
- 萩原町チャマガ(大方)
- 馬瀬村チャマガ
- 川西村チャマガ
- またはチャアマ
- その他大方チャマガ

大野郡

- 清見村(檜谷、大原)チャマガ、チャアマ
- 久々野村チャアマ
- 宮村

チャアマ ○大名田村チャアマ ○丹生川村チャアマ ○大八賀村チャアマ ○高山町チャアマ(七八割) ○上校村チャアマ ○清見村(牧洞・福寄・夏旣)チャアマ ○莊川村チャアマ(七割) ○白川村チャアマ ○その他大方チャアマ

吉城郡

○河合村チャアマ ○阪上村チャアマ ○細江村チャアマ(大方) ○袖川村チャアマ、チャマガ ○船津町チャマガ ○阿曾布村チャマガ ○上賣村チャマガ、チャアマ、チャマ ○その他大方チャアマ またはチャマガ

チャアマは、チャガマのガの父音が落ちたのである。更にチャマはその母音までが落ちたのである。右の記載を綜合すれば、益田郡は凡そチャマガで、美濃の方と同じである。大野郡は凡そチャアマである。こゝに注意すべきは、飛驒の中部を横ぎる大分水嶺は、凡そ益田郡と大野郡との境を分けて居ることである。吉城郡はチャアマとチャマガと相半ばし、山脈に遮られぬ所は大野郡の方と同じである。さうして越中の方では、神通川の流域は凡

そチャマガで、黒部川の流域にはチャアマと云ふ所があると聞く。

## 八六　すがゝさ日記

ぬぐも惜し吉野のはなの下風に

吹かれきにけるすげの小笠は

と書きをさめてある「すがゝさ日記」を讀んで、鈴の屋翁の古典趣味の深いことや考證のゆきとゞいた事を感じた。吉野の「水分神」が訛つて「みこもりのかみ」と訛り、それに「御子守神」の當て字をしたのを略して「子守神」と稱へてゐると云ふ説明などは、甚だ面白かつた。また同じ吉野の「せいめい」の瀧は「晴明」とか「蜻蛉」とかの字音であると云つてゐたのを、この瀧の俗名としてゐた「澤の瀧」の「ぜみ」の訛りであらうと云ふ説も面白かつた。「一目千本」と

水分神

澤の瀧

一目千本

藤原寺

じんにく

二歳  
三歳  
の  
言  
葉

いふ名は、ひどく翁の氣にさはつてたれてふをこ者が、かゝるいやしげなる名をつけけん」と叱られた。翁は「うなぎ」「たうげ」などの言葉を避けて、「ひなぎ」「たひげ」などといふ古語を用ゐて居られる。「藤原寺」をトウゲンジ、「大御輪寺」をダイゴリンジと呼んでゐるなどが、翁の氣に入らなかつたのは尤もである。かの三瀬村の「じんにくんが」この東なる山の塚穴は、聖徳太子の御時に弘法大師のつくらせ給ふ……深さは限りも侍らず、奈良の寒さの池まで通りては侍れ」などと答へたあたりは、随分まじめな滑稽が書けてゐる。

## 八七 幼児の言葉

幼児の言葉は面白い。嘗て各地方の二三歳の児童の言葉を

集めて見たことがある。その言葉は、地方により、社會により、家庭により、又は心意の發達程度などによつて異同がある。ちよそ之を分けて見れば、

一 生物の鳴聲をまねて言ふもの。例へば犬をワンワン、猫をニャーニャー、牛をモーモー、馬をヒンヒン、鳥をカーカー、雛をピョピョ、など。

二 生物の動作を以て言ふもの。例へば、兎をビョンビョン、馬をバツカバツカ、魚をビンビン、など。

三 無生物の有様を以て言ふもの。例へば衣服をアッバイ、燈火をノンノン、など。

四 無生物の作用又は音聲を以て言ふもの。例へば、焚火をポツポ、車をクルクル、太鼓をドンドン、雷をゴロゴロ、など。

- 五 その物に對する人の呼聲を以て言ふもの。例へば馬をハイハイ、牛をドード、など。
- 六 その物に對する人の所作を以て言ふもの。例へば水をブーまたはブーブ、火をフーまたはフーフ、など。
- 七 その物に對する人の感じを以て言ふもの。例へば火をアチチ、食物をウマウマなど。
- 八 類推を以て言ふもの。例へば燈火をノンノンと言ふので、神佛または月星をもノンノンといふ類。
- 九 普通語の如く云ふもの。例へば、目をメ、手をテ、火をヒ、乳をチチ、馬をウマ、など。
- 十 普通語を訛つて言ふもの。例へば、水をミンジ、猫をニャコ、牛をウチ、乳をチーチー、など。



十一 普通語を略して言ふもの。例へば父をト、母をカ、兄をニ、姉をネ、頭をアタ、俯向うつむきをウツ、など。

十二 普通語を重ねて言ふもの。例へば手をテテ、目をメメ、厭をイヤイヤ、など。

十三 以上の諸種の中の或言葉に接頭辭又は接尾辭などを附加へたもの。例へば手をオテテ、犬をワンコ、火をフーヤなど。

この外にまだ種類が挙げられよう。幼児の言葉に重ね言葉の多い事は最も著しい。我が國語の副詞や形容詞や複數名詞などには、重ね言葉で成立つものが少くない。

## 八八 雜題

大臣の副  
書でなけ  
れば書か  
ない

○ 読み書き算盤

一九六

「読み書き算盤」と云つて、この三つは、昔から教育の上の大切な  
學科とされてゐる。かの「三 R」と呼ぶものも、之と同じである。  
「三 R」とは 'READING, WRITING & ARITHMETIC' を云ふ。

○ 早稻田侯の直筆

早稻田侯が言論著作において世の中に與へられた感化は偉  
いものである。しかし不思議ともいふべきは、侯の直筆が殆ど  
見當らぬ事である。侯は自ら大臣の副書でなければ書かない  
と云はれたと聞く。如何にも、もし侯が揮毫を始められたもの  
なら、これ日も足らずで、侯は一人の書家となりはてられたかも  
知れない。

○ 鈴の屋

或夜杉山流の按摩の岡澤といふ人に、常に心を書見などに用ゐて居る者が、頭腦をさわやかにし精神を養ふための娛樂として、何が宜しいか。」と尋ねた。その答に「快い音を聽いて耳を樂しませるが宜しい。」とあつた。その時忽ち思ひ出したのは、三十六の鈴を書齋に懸け、倦んで來れば紐を引き鈴を鳴らしたと云ふ鈴の屋大人の事のであつた。

○寢謠ねうたひ

或會の餘興に「寢謠ひ」の狂言があつた。伊澤樂石らくせき社長が之を見て、あれは狂言作者の作り事ではない、甚だしい吃りは、先づ寢させてなほすと工合がよいと語られた。

○東北の發音

山形縣新莊中學校發行の「誤り易き發音及假名」の編纂者近藤

困つた電  
報

光次氏の著書「東北發音備考」は、小冊子の中に其の要領を示してある。その引例に、或中學生へ「ヒツヨスエカエシゴコエ」といふ電報が來たが、之を讀んで、本人も分らず、教師も分らず、休憩時間に二十名ほどの教師が總がかりで、やうく「非常水害直ぐ來い」との事と判じたと言ふ實話が見える。

### ○喜福寺

本郷の赤門前の大通りに喜福寺といふ禪寺がある。さうして近所に永福寺といふ寺もある。そこで、その邊の子守などには、かの禪寺をキーフクジと呼ぶ者があるさうだ。

### ○げすの言葉

「げすの言葉には必ず文字あまりしたり」と清少納言が云つてゐる。しかし文字足らずも有つて、トンチンカンである。ある

永福寺

文字あま  
り文字  
足らず

戯歌ざいらかに、

ダイコン(大根)と云ふべきンは云ひもせで

いらぬゴンボ(午莠)にチャンブクロ(茶袋)

○「場」の字

我等は「場」の字を「役場」「馬場」「本場」「獵場」「臺場」「御殿場」などと言ひ慣れてゐるから、その類推で以て「工場」「運動場」「停車場」「開港場」などと云ふのは、自然の事である。「ば」といふのは下品で、「ちやう」といふのは上品だと思ひ込んでゐるならぬ。

○郵便はがき

「郵便はがき」「郵便切手」「郵便爲替」などと云ふのは、通俗で誠に好い。「はがき」と假名書きにしたのは、なほ好い。「爲替」などといふ文字も假名書きにして欲しかつた。或名士が「爲替」をばタメ

ウベとチャ

タメカハ

カへと讀んだと云ふ話もある。

○術語

術語の辭書といへば、とかく漢語の行列のやうに思はれるが、それも物事によりけりで、我等は偏屈に流れぬ限りは、なるだけ祖國固有語を用ゐたいものである。柔道の術語は、ちよそ「膝車」ひざぐるま、「隅返」すみがへし、「掬投」すくひなげ、「谷落」たにおとし、「横掛」よこがけなどと云ひ、わづかに漢語をまぜても「袈裟固」けあさかた、「片十字絞」かたじふじめの如く、よく日本化したものばかりである。相撲の術語の如きも甚だ宜い。

○技師の言葉

前かた或所で農業の道の技師が、通俗の言葉をそちのけにして、頻に漢語を使つて農民に説明をしてゐたから、後で或人が之を注意すると、かの人は、通俗の言葉では安つぽくて疎かに聞か

心得違ひ

れるからだと言ひわけをしたとか。以ての外の心得違ひである。

### ○喜見城

蜃氣樓

越中の魚津から出た六十許りの人に、「魚津の蜃氣樓しんきろうは度々見られただらう」と問ふと、その人は暫く考へて「ああ、キケンジャウですか。度々見た。春か秋の暖かで極靜かな日の午後三時頃に、海の上に城構へのやうなものが見えた。」と語つた。蜃氣樓を帝釋たいしやくの居所になぞらへて「喜見城」と名づけたのであらう。思へば、越中あたりは佛教の盛な所である。

### ○快廻機

明治四十年の頃、淺草公園の「ルナパーク」に乗廻りの木馬仕掛  
の「Merry-go-round」を「快廻機」と譯して有つた。それよりは「乗廻り」

或は「廻り木馬」とでも云つたが宜いと思つた。

○モンキ

神戸港や長崎港では、猿猴を多くは「モンキ」(monkey)と呼び「ちる」といふ方は却て少いやうで有ると。是、一つには外國人居留の影響で、今一つには商人らは「去る」と同じ音の語を忌むからであらう。美濃の商人に、猿猴を常に漢語で「エンコ」と云ふ者が有つた。

○商標

商標などには、後になつて意味の分り難いものが有る。内國通運會社の商標<sup>E</sup>通<sup>E</sup>の如きは、その一つである。櫻井鷗村氏は曰く、その<sup>E</sup>は「Express」(運送の意)の中の母音字二つを取つて略號としたのだらうと。



○エビスビール

惠比須

「エビスビール」と云ふ名は、七福神の一人の名を麥酒の名としたものである。それなればエビスビールと書かねばならぬ。しかし「エビス」と書くのは漢字で「惠比須」と書くからの事であらう。また「エビスビール」をローマ字綴りで「Yebisu Beer」と書く。

頭文字

我が國語音にはヤ行の四段目の發音はア行のエと同じで、假名まで同じであるから「Yebisu」と書くのは當らない。しかし、これは假名で「エビス」と書くから「Ebisu」と書くのも物足りないし、「江戸」蝦夷エゾを古くは「Jedo, Jezo」と綴つた例もあるから「頭文字を目立たせて綴りを賑かにしたいと思つて、斯う「Yebisu Beer」としたので有らう。

## 八九 流行語

明治三十年代に、東京で學生の間にテニスの競技が流行しはじめた頃、應援者の中に大聲でまぜかやしをする者があつた。

野次る

それを野次馬さわざを、するといふ意味で「野次る」「良行四段の動

詞」と誰かが云ひ出した。それが流行語となり、その後「皮肉をいふ」「駄句を吐く」「愚痴をこぼす」「ハイカル」「ハイ

駄句る

カラめく」などといふ言葉まで出來た。「駄句る」は、角田竹冷氏が

ハイカル

衆議院議員の間に俳句風を吹かせて後、しきりに駄句を吐く人達が出來てからの冷かし言葉である。「ハイカル」は確かに英語の日本化した名詞の、「ハイカラ」を更に動詞としたものである。

明治三十七八年の役のころ、海外で「I will logo it」などと云ふ英語

東郷

無理からぬ

美濃の北山谷

の流行した所があつたと聞く。これは連戦連勝の大將「東郷」を「Got」といふやうな動詞に代用したのである。

なほ「善からぬ」「悪からぬ」といふ類推が踏出して「無○理○から○ぬ」といふ様に漢語が形容詞風の熟語に化したのもある。

## 九〇 言語の變遷

美濃揖斐川の上流北山谷には、兩岸の凡そ一里ごとに村落がある。北山谷の言葉は、その發音や單語や語法が、下流の平原地方のと著しくちがふ。さうしてその村毎にも言葉が多少ちがつて居る。しかし御一新後は政治状態も一變し、道路も改修されて馬や車まで往來するやうになり、久瀬くせと阪内さかうちと徳山とくのやまとの三つの聯合村と成り、來住人も移轉者も多く、そのうへ家業のひま

に、男は東海道あたりへ出稼ぎに行き、女は都會の紡績工場などへ行く者があり、そのほか小學校の教師や派出所の巡査などが平原地方から入り込み、北山谷の言葉は、凡そは下流の平原地方の言葉に化しつゝある。しかし今でも、對稱の代名詞 目下に對ひ又 は親しい者に「ヒナタ」そなた、其方の訛りか「オンシ」わが、吾主の訛りをも用ゐ、高山の頂を「ダッケ」なげ、嶽の訛りと云ひ、衣服や道具なども置き、親子の寝る部屋を「ナンド」なほ、納戸と云ひ、「御前」ごまへ、コッしてくれタレ係、結の残つた特例、誰がしてくれるものか。などと云ふ。元來、北山谷の大部分の言葉は、下流の平原地方の言葉よりは寧ろ狂言または京都地方の言葉に似寄つてゐる様に思ふ。さうして老人ほど昔の言葉をより多く話すのであるが、年々歳々老人の亡くなるに随つて、耳立つ昔の言葉が追々滅びて行く。

かやうに北山谷は山間の地方である所へ、政治上及び交通上の急變をうけたから、言語の變遷の著しい事が明かに分る。しかし、其の言語の著しく變つてきたのは單語つぎに語法で、發音はそれほど變らない。即ち、下流の平原地方の言葉は語調が速いのに、北山谷のは緩い。又、その平原地方では「手」「目」「齒」「毛」「火」「木」「田」「戸」などの單音語を短く言ふのに、北山谷では、その單音語に附くテニヲハを省く場合にも、省かぬ場合にも、その單音語を長音に言ふ。またその平原地方のアクセントでは、ハシ(箸)、ハシ(橋)、クモ(雲)、クモ(蜘蛛)、ツル(鶴)、ツル(蔓)などと言ふのに、北山谷ではそのアクセントが大方反對である。なほ、各地方の人々が、御一新このかた世の中の急變に伴ふ言語の有様を調べて置かれる事を望む。

## 九一 現代語の調査

音韻並に  
口語法の  
取調

國語調査委員會は、明治三十六年八月、音韻、口語法、取調ニ關スル事項と題する一冊の印刷物を發行し、音韻取調に關する事項二十九箇條と國語法取調に關する事項三十八箇條とを擧げ翌月九日これを各府縣へ發送し、各地方の音韻並に口語法の取調報告を委囑した。各府縣では、大概は管内の學校又は教育會に之を囑託して報告させた。その報告書は翌年四月上旬までに夫々到着した。そこで國語調査委員會では手分をして之を調査し、音韻調査の方は同年六月までに、口語法調査の方は三十九年九月までに、それ〴〵、調査報告書及び附圖を編纂した。

調査の擔  
任

音韻調査報告書の整理及び音韻分布圖の調製は、主査委員上

田博士監督の下に補助委員新村出、調査事務囑託龜田次郎の二氏が之を擔任し、報告書本文の整理は、調査事務囑託榊原叔雄、龜田次郎の二氏が之に當つた。また口語法調査報告書の整理及び口語法分布圖の調製は、補助委員岡田正美、保科孝一、新村出、調査事務囑託龜田次郎の四氏が之を擔任し、報告書本文の整理は、調査事務囑託龜田次郎、神田城太郎、榊原叔雄の三氏が之に當つた。

現代語の調査は、(一)標準語法の制定、假名遣の改正等について、(二)我が國の言語區域を定めるについて、(三)國語教授の方針を確定し、或は改良するについて、(四)古音保存及び音韻轉化の範圍を示し、口語法の異同及び其の變遷の異同を知るについて、何れにも必要な事である。十分の事を望めば、斯道の人を派遣し、同一の標準によつて、精確に各地方の音韻並に口語法を調査するの

が最も適當であるけれども、まだ其の時期に達しなかつたので、先づ第一期の調査として右の調査が行はれたのである。

## 九二 平家物語

國書の中で平家物語ほど異本の多いものは無い。之については、國語調査委員會で主査委員上田博士監督の下に補助委員山田孝雄氏の取調に係る「平家物語」についての研究「三冊」に詳である。この研究においては、平家物語の異本三十種七十藏本を左の三門十七類に分けてある。

第一門 灌頂卷を立てたるもの（十類二十種四十九本）

第一類 一方檢校本の類（五種十一本）

第二類 嵯峨本の類（二種三本）



第三類 一方譜本(二種四本)

第四類 鏡卷を加へたる諸本(三種八本)

第五類 劔鏡二卷を加へたる諸本(一種一本)

第六類 劔鏡宗論を加へたる諸本(一種三本)

第七類 覺一本の類(三種九本)

第八類 四部合戦狀本(一種四本)

第九類 長門本(一種一本)

第十類 源平盛衰記(一種五本)

第二門 灌頂卷を立てざるもの(五類八種十九本)

第十一類 八坂本の類(二種七本)

第十二類 如白本の類(二種三本)

第十三類 鎌倉本の類(二種五本)

第十四類 南都本(一種一本)

第十五類 延慶本(一種三本)

第三門 零本にして性質明らかならぬもの(二類二種二本)

第十六類 南都異本(一種一本)

第十七類 源平闘諍録(一種一本)

延慶本

この書における平家物語異本研究の結果、延慶本を以て平家物語の語法の標準としてある。また平家物語は源平盛衰記の節略といふ説と、源平盛衰記は平家物語の敷衍と云ふ説とに對しては、平家物語が本で源平盛衰記は後のものであると斷じてある。

源平盛衰  
記

この書は、前篇の「平家物語考」一冊と後篇の「平家物語の語法」二冊とに分けてある。さうして鎌倉時代以後の國語史料研究の

目的として、この書の緒言の中に左の如く説いてある。

方今諸學校ニ於テ教授スル文法ハ江戸幕府時代ニ於ケル古  
文研究ニヨリテ定メタルモノニシテ、殆ンド全ク鎌倉幕府時  
代以後ノ國語ノ發達ヲ度外ニ措ケルノ感ナキ能ハズ。然レ  
ドモ將來ノ語法ノ標準ハコヽニ止マルヲ許サザルモノ有ル  
ベシ。コノ故ニ本會マタソレヲ語法變遷ノ實況ヲ明ラカニ  
スルヲ必要トシ、コレガ調査ニ着手シ、コレヲ國語史料ト題シ、  
成ルニ隨ツテ世ニ公ニセントス。

なほ新村博士が紹介された文祿舊譯平家物語西曆一五九二年の天草版本  
は、四卷六十三章から成る省略物で、我が國語のローマ字本の先  
駆をしたものである。その原本は今、大英博物館にそなへてあ  
る。

### 九三 東歌の國々

あづまにて養はれたる人の子

舌だみてこそ物はいひけれ (拾遺集)

信濃の西ざかひに、連なり聳えて「日本アルプス」と呼ばれてゐる山脈は、我が國語の方言區域に西部と東部との大別が出来た障壁である。この山脈の北の方は越後と越中との境に連なり、その南の方は遠江と三河との境に延びてゐる。尤も南の方は大きい障壁となるほどで無く、海道筋の事ゆゑ、方言の境目も信濃や越後の西ざかひほど著しくは無く、或方言は遠江より東にもひろがり、或方言はそれより西にもひろがつてゐる。この事は國語調査委員會編纂の口語法分布圖に明細である。萬葉集

に擧げてある東歌あづまうたの國々、即ち信濃・遠江・駿河・伊豆・相模・武藏・上野・下野・上總・下總・常陸・陸奥は、みな右の東部方言區域に這入つてゐる。また古今集に見えてゐる東歌の國々は陸奥・常陸・相模・甲斐・伊勢である。しかし伊勢のを東歌に入れてゐるのは、どう云ふわけか。賀茂眞淵の講説(打聽)によれば伊勢歌に詠んだ「あふの浦」は分らぬ地名であるが、志摩國の英虞あづまの浦をとなへ誤つたのかも知れぬ、この歌は志摩國が伊勢國から分れて一國とならぬ前に詠んだものゆゑ、伊勢歌としたものかと疑つてある。英虞の浦は今の鳥羽の港であると云ふ。古の伊勢の僻地の歌であるから、古今集には之をおぼよそに東歌に入れたのであらう。

#### 九四 薩摩と仙臺

謡曲の詞  
で對話

徳川時代には、正月三日の謡初式うたはじまを始として、謡曲は幕府及び諸藩の重い式樂となり、武家の嗜むべき一藝となつてゐた。曾て、薩摩様と仙臺様と縁組があつた時に、兩藩士の應對に互に言葉が通じ難かつたので、謡曲の詞で對話をしたことが有ると聞く。

發音

薩摩と仙臺との間の言葉が如何に異なつてゐるかは、國語調査委員會における音韻並に口語法の調査に據つて略知られる。まづ發音の一斑を云へば、仙臺にはガ行の鼻音があるが、薩摩にはそれが無い。之に反して薩摩にはクワとカとの別があるが、仙臺にはそれが無い。また薩摩にはジとヂ、ズとヅとの別があるが、仙臺にはそれが無い。

口語法境  
界線

つぎに語法が兩方の間に幾重か隔たつてゐる事は、左の口語

法境界線によつて大略が分る。尤も一方の境界内に他方の語法が行はれる例外地方も有る

○九州には舊下二段活用が存在し、九州から海を隔て、東には舊下二段活用が存在しない。

○中國九州及び高知縣西半では、上一段及び舊上二段活用動詞の未來を「見<sup>ミ</sup>」の例に云ひ、その東では「見<sup>ミ</sup>ヨ」の例に云ふ。

○福井縣京都府西半・兵庫縣和歌山縣及びその西では、舊下二段活用動詞の未來を「受<sup>ウ</sup>キ」の例に云ひ、その東では「受<sup>ウ</sup>ケヨ」の例に云ふ。

○富山・岐阜・愛知の諸縣及びその西三重縣や奈良では「爲<sup>ス</sup>ル」行變格の未來を「爲<sup>シ</sup>」と云ひ、その東では「爲<sup>シ</sup>ヨ」と云ふ。

○富山・石川・福井・滋賀・三重の諸縣及びその西では、舊波行四段活用動詞に「買<sup>カ</sup>」テ「買<sup>カ</sup>」タの例に云ふのを、その東では「買<sup>カ</sup>」

テ「買ッ」タの例に云ふ。

○富山・岐阜・三重の諸縣及びその西では「何ジャ」の例に云ひ、その東では「何ダ」の例に云ふ。

○富山縣・岐阜縣・尾張及びその西では、形容詞の副詞形を「早」の例に云ひ、その東では「早ク」の例に云ふ。

○富山・岐阜・愛知の諸縣及びその西では、動詞の打消を「來ン」の例に云ひ、その東では「來ナイ」の例に云ふ。

○山形西部・新潟西部・富山・岐阜・愛知の諸縣及びその西では「來ル」加行變格活の未來を「來」と云ひ、その東では「來ヨ」と云ふ。

○富山縣・岐阜縣・愛知縣・遠江及びその西では、命令を「見ヨ」また「見イ」の例に云ひ、その東では「見ロ」の例に云ふ。

○富山・長野北東部を除く・山梨・静岡の諸縣及びその西では、舊佐行四



段活用動詞に「出イテ」の例に云ふのを、その東では「出シテ」の例に云ふ。

○山形<sub>西</sub>・新潟<sub>西</sub>・長野<sub>西</sub>・山梨<sub>西</sub>・静岡<sub>富士川</sub>から西の諸縣及びその西には、

「ベーベ」言葉が無く、その東には「ベーベ」言葉がある。

發音の一斑と語法の大略との違ひを見ても、斯の如くである。況や單語の違ひも澤山あるのだから、薩摩と仙臺との言葉が通じ難いはずである。之を通じるためには、必ず標準語が要る。前の話の場合においては、謠曲の詞を以て臨時の標準語としたのである。

## 九五 國がへ

同じ地方の言葉でも、純粹の地方語と移住者特に團體移住者

の言葉とは、能く區別して見ねばならぬ。封建時代における諸侯の國がへの如きは、團體移住の著しいものである。例へば武藏の忍みしの松平藩は、寶永七年備後の福山から伊勢の桑名へ移り、百十四年の間も居續いて、文政六年に忍へ移つたのであるから、その藩の言葉は西部方言に慣らされて居たので、忍の在郷言葉とは著しくちがつて居た。そこで、斯う云ふ狂歌が取換された。

關東のペイ。ペイ言葉がやむならば

借りても三百(文)つんだすペイ (忍藩士)

桑名のナア、ナアナア言葉がやむならナア

借りても三百(文)つんだすナア (忍の在郷者)

ペイはベシの音韻が變化した助動詞で、ナアはネイに當る感動詞である。團體移住者の言葉は、中々その地方語と一つにな

るものでない。例へば美濃の大垣の戸田藩は、元和二年近江の膳所から攝津の尼ヶ崎に移り、十八年を経て寛永十一年大垣に移つてから明治元年までが二百三十六年の間である。けれども今でも其の士族言葉には「何々して下し<sup>○</sup>か<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>下<sup>○</sup>さい<sup>○</sup>」の意味などといふ特徴が残つてある。

## 九六 方言の數々

### ○ オッコチル

東京で「オッコチル」といふ方言がある。これを水戸では「ツッコチル」、仙臺では「タタキオチル」、美濃では「ブチオチル」、熊本では「ツッコケル」、鹿兒島では「ホタイオツル」といふ。

### ○ 借ッダ

借りると  
買ふと

將爲と仕  
様

カラとサ  
カイ

京都あたりから東京へ來立ての人に、「これは何處で買ったのですか。」と問ふと、「いゝえ、借ッタンで有りまへん、買ウタんどす。」と答へた。東京などで「買ッタ」といふのを、あちらでは「買ウタ」といひ、「借リタ」といふのを「借ッタ」といふからである。

○セウ(シヨ)とシヨウ(シヨ)

上方の言葉では、古語の「何せむ」を音便で「何セウ」と言ふ。これを東京の言葉では、「何シヨウ」といふ。この「しよう」を「仕様がない」の「しやう」と混同するのは誤である。

○サカイ

東京で接續の言葉にカラと云ふのを、上方の言葉ではサカイと云ふ。浮世風呂に上方者が「物の限る所が境ぢやによつて、さうぢやサカイに、かうしたサカイと云ふのぢや。」と言ひわけし

てゐる所がある。

○長崎バッテン

「君を尋ねたバッテン留守ぢやつた。」などといふ長崎言葉のバッテンは「けれども」といふ意味の接續詞である。これはオランダ語の *butten* の轉訛であると云ふ。

○スナハチ

肥前あたりの人は「即すなはち」といふ言葉を假名の通りに「スナハチ」と読み且つ話す。

○出る、暮る

九州に残つて居る動詞の二段活用にも、所によつて多少のちがひがある。例へば、肥前邊では「出ヅル」「暮クル」といひ、豊後邊では之を「イヅル」「ククル」といふ。

元の語音  
に近い

○ハーキ

因幡や伯耆の方言の中には、却て元の語音に近いものがある  
と聞く。例へば、和語では「ハーキ」は「はき」「ヤーヤー」「やうやく」「イカ  
ー」「行かむ」「カータ」「買ひたり」漢語では「ハー」「方」「ターキミ」「唐黍唐が」  
ンダー」「面倒」「サーネ」「性根」など。

○シナとシイナ

神戸市などの言葉で「爲ナ」「来ナ」は指圖となり「爲イナ」「来イナ」  
は差止となると。

○ナイ〜

彦根や佐賀で物を買ひに行くとき、商人が「ナイ〜」と返辭をす  
る。他所の者には、それが無いといふことと誤解される。しか  
し其の「ナイ〜」は、「ハイ〜」と同じく、受け答へる言葉である。

指圖と差  
止

妙な返辭

一種の形  
容詞

熊本では、これを「ネー〜」と云ふ。

○四角イ

木曾川平原などの言葉には、東京語で「四角な盆」、この盆は四角だといふのを「四角イ盆」、この盆は四角イともいふ。「横着イ」なども同様である。

○サイガ

美濃や尾張などで「暑いサイガ汗が出る」などといふ。その「サイガ」は、「と」に等しい前後接續の言葉である。伊勢の北部では之を「サイゴ」といふ。「サイガ」は「最後」といふ漢語の轉訛であらう。

○誰ガリ

古語に「誰ガリ行く」といふことが見える。しかし今でも三河の八名郡や幡豆郡では、そのやうに言ひ、碧海郡では「誰ガレ行く」

古語の殘  
り

漢語の轉  
訛

などと言ひ、名古屋あたりでは、「誰ガエ行ク」、「おらガエ湯にこい」などといふ。

○デルとデキル

あべこべ

甲斐の人には、デルとデキルとをあべこべに云ふ例がある。

さう思つて聞けば、「家がデタ」、「家をデキル」などの意味が分る。或人は、それは昔の軍用語の残りではないかと云つた。

○絲と井戸

清音と濁音

下野には、清音をむやみに用ゐる所と濁音をむやみに用ゐる所とがある。どちらにしても、絲と井戸、莖と釘などの區別が立たない。

○關東ベ

ベの變態

關東ベは著しい方言であるが、それにも變態がある。「ヨカ



長く延く

方向をさ  
す助詞

ンベ<sup>レ</sup>「善からうの意」ソ<sup>レ</sup>ダンベ<sup>レ</sup>「さうだらうの意」を、ヨカッペ  
<sup>レ</sup>「ソ<sup>レ</sup>ダッペ<sup>レ</sup>」(房州の内)とも、ヨカンビヤ<sup>レ</sup>「ソ<sup>レ</sup>ダンビヤ<sup>レ</sup>」(下野の内)とも、  
云ふと。但し「ビヤ」は元「ベ<sup>レ</sup>ヤ」の約つたのである。序に云ふ埼  
玉のインベ<sup>レ</sup>「行かうの意」は「往ぬべし」の訛りである。

○チヂ<sup>レ</sup>、ババ<sup>レ</sup>

關東邊の言葉では「チヂ<sup>レ</sup>」(祖父も老爺も)「ババ<sup>レ</sup>」(祖母も老婆も)、  
「カカ<sup>レ</sup>」(妻)と長く延く。

○何處サ

秋田や水戸の言葉で「東京サ行つた」と言ふ。この「サ」は方向を  
さす助詞で「へ」に同じである。佐賀の言葉では「東京サン行つた」  
と言ふと。

○盃 コ

面白い接  
尾語

青森縣あたりには、小さい物や、優美な物や、親しいものや、憫れなものに、「コ」といふ接尾語をつける。例へば「盃サカヅキコ」「針ハリコ」「絲イトコ」「人形ギョウワコ」「球マコ」「筆フデコ」「乳母ウバコ」「姉アネコ」「弟オトコ」「馬ウマコ」「乞食ホイドコ」「蟲ムシコ」など。

## 九七 力ある方言

廣い方言

狭い區域の方言は、それと知りわけ易いが、廣い區域の方言となると、さうは行かない。その區域より外の人と交つて、はじめ、これは方言だと氣づくことがある。例へば美濃や尾張あたりの人が他所に出て、「水をこぼラカス」などと云ふ言葉が通じかねる所から、ラカスと云ふのは方言だと知るが如きである。この方言一種助動詞のはサ行四段活用で、「筆をちとラカス」「水をこぼラカス」の如く、他動詞の語根につながる例である。但し、着物をぬラ

ラカス

カス」雨をもラカス」の如き他動詞之に對する自動詞がラ行活用のものの場合には、その自動詞の語根につながる例である。この方言は、通例は事物における動作が、當人の意志に因るので無いこと、即ち當人の過失、または他に餘儀なくされることの意味をあらはす。それで此の方言は、責任の有無、輕重、人間行爲の善惡を判決するのに効力をもつ。例へば「石をちとラカシて人に怪我をさせました」といひ、加害者がわざと石を落したのでなければ、過失罪となる。「地震の時に御預りの花瓶をわラカシました」といひ、天災地變のわざであれば、預り人の責任でない事となる。この方言は、行はれる區域が廣く、且つ道德關係の深い言葉となつてゐるから、容易く之を取除くことは出来ないだらう。東京語では、この方言に等しい言葉がないから、着物をぬらす。「水をこぼす」。「石を

落して人に怪我をさせました」。地震の時に御預りの花瓶をこはしました。などと云ふのである。尤も美濃や尾張あたりでも東京語のやうにも言ふけれども、自分の意志の如何を明かにするためには、ラカスといふ言葉を用ゐるのである。

## 九八 方言と標準語

方言と云つても、明かに古語にゆかりの有る言葉、例へば日向の「アキツぼとん」九州の「ミユル見え」「キコユル聞え」三河の「誰ガリ誰」などの如きは、一つは古を尙ぶ心と、一つは郷を愛する心とからして、ともすれば正しい言葉として之を保存しようとする。また「關東ベ」などと賤しまれると、一つは反抗の心からして、「ダラウ古のナラム」の音韻變化が正しいなれば、「ベ」古のベシの音韻

變化も正しい筈だ。」と言ひたいで有らう。しかし現代の日本語を統一して國民的活動を盛にするためには、方言の系圖自慢は止めて標準語を大切に、する心掛を持たねばならぬ。

玉勝間の「ゐなかにいにしへの雅言ミヤゴトののこれる事の條に、いづれの國にても、しづ山がつのいふ言は、よこなまりながらも、おほくひかしの言をいひつたへたるを、人しげくにぎははしき里などは、他國コト人も入まじり、都の人なども、ことにふれて來かよひなどするほどに、おのづからこゝかしこの詞をきゝならひては、おのれもことえりして、なまざかしき今やうにうつりやすく、昔ざまにとほく、中々にいやしくなんなりもてゆくめる。」と説いてあるのは、古の雅言を尙ぶ心から云へば、云はれる事である。しかし標準語を立て、現代語を統一するためから云へば、古の雅

言でも割愛せねばならぬ場合があるのである。

今も書翰文につかふ候言葉は、謠曲などの詞で、是は三保の松原に、はくれうと申す漁夫にて候」といふ様な文句を聞くと、如何さまと思はれ、特に八丈島にソロといふ敬語動詞の口語が残つて居ると聞くと、昔の言葉つきが想はれる。「鳥も通はぬ」と形容された離れ島に、長く昔の言葉が生き残つてゐるのは、尤なことである。

嘗てオックスフォード大學のスウィート博士の名著「言語の歴史」(History of Language)を讀んだ。その中に標準語と方言との關係について斯う説いてある。「文明が中央集權の必要を生ずる時には、國內一般の交通の手段として、特別の一方言を用ゐる必要が出来る。諸方言中の或方言が相互に通じ難くなつた場合

には、特にさうである。中央集權が十分長く續けば、その共通即ち標準の言語は多少は諸方言の影響を受けた後に、その諸方言に取替り行くのである。その取替りは、先づ教育された者の言葉に始り、次第に下層の階級に及ぶのである。斯様にして終に元の方言は、唯其の或言葉や調子の特有のものだけが、最も長く生き残る。とある。方言は使用地域が廣いほど生存力が強い。例へば上方言葉の如きである。それがために或人は、日本の標準語を東京語と京阪語との二つにしては如何かと云ふ説を爲したが、しかし、一つの日本語に二つの標準語を立てることは、國家の統一のため、賛成すべからざる事である。どうしても東京語をひろめて國語の統一をせねばならぬ。

## 九 九 言葉の島

言葉の島

ここに「言葉の島」と云ふのは、自然地理でいふ島をさすのではなく、地續きの所の部分に或種の言葉が行はれて居る區域を云ふのである。例へば封建時代に國がへが有つた結果、伊勢の桑名の言葉が武藏の忍しのに移つて、其處に一つの言葉の島が出来たと云ふが如きである。昔の江戸即ち今の東京の言葉の如きは、言葉の島の好い例で、江戸三百年及び明治維新後半世紀の間に、現代の日本語の標準語の基とされて居る立派な言葉が、武藏野の一角に出来たのである。この東京言葉は關東のベイベイ言葉とは趣を異にして居る。

東京語



## 一〇〇 飛驒の白川

神の代の目無堅間の小舟すら

水なき空をわたりやはせし (本居大平)

籠の渡の歌枕

白川村の置城

かの「籠の渡」の歌枕の白川は、美濃ざかひから出て、西の方は白山山脈と、東の方は飛驒を縦断する龍峯山脈との谷間を北へ流れて、越中の射水川となる。白川の沿岸にある四十餘りの小村を昔は白川郷と稱へたが、明治八年から上の白川の十八の小村を莊川村とし、下の白川の二十三の小村を白川村としたのである。白川村は、白山の東にあたる尾神から越中ざかひの小白川まで南北十里程の間を三部とし、村の南部を中切中部を大郷北部を山家と呼ぶのである。世に聞えた大家族制度の行はれて

居る所は中切地方である。白川村は東は高山町地方と、北は越中の城端町<sup>じやうたん</sup>地方と、南は美濃の八幡町<sup>はつぱん</sup>地方と交通して居る。もと籠の渡<sup>み</sup> 今は長さ三十六間の木橋がかゝつてゐるの有つた鳩谷<sup>とむがや</sup> 大郷の内から岐阜市まで三十三里餘。その道筋を云へば、鳩谷<sup>とむがや</sup> 城端町の内から御母衣<sup>みぼろ</sup> 中切のまで三里餘、それから牧戸<sup>まきど</sup> 莊川村の内から高山町へ十一里、こゝまで四里餘、それから美濃さかひの高鷲山を越えて郡上郡に入り、上保村<sup>かみのほ</sup>を經て八幡町に至る間が十一里、それから岐阜市まで十五里ある。

白川村の  
探究

白川村については、明治二十九年八月に、鐵脚坊吞雲坊の紀行「飛驒の桃源白川村」が讀賣新聞に載せられ、三十二年八月には、高木正義氏が白川郷の探究に行かれて、後に「飛驒の白川村」といふ論文を「社會」第壹卷第九號に載せられ、その翌年八月には、新村出<sup>しんむつで</sup>八杉貞利の兩氏が白川村の方言採集に行かれ、三十五年の夏に

は徳川伯爵の一行が白川村の探究に行かれたのである。自分は卅九年八月飛驒に行つた時に、さしつかへて白川村へは行かれなかつたが、幸に白川村大字平瀬の宮丸みやまる牙氏さゆりから精しい話を聞き、且つ同氏に頼んで國語調査委員會編纂の「方言採集簿」註に白川村の方言を書き入れて貰つた。さうして宮丸氏の記入本と新村博士から借用した「白川方言採集本」とを照し合せて見た。しかし新村博士も語られたやうに、大體から云へば、白川方言は格別珍しい方言では無いのである。宮丸氏が記入本の末に示された注意書きは、方言しらべに心得べき事であるから、左に記して置く。

「明治三十五年大野郡方言集の中の白川村の分は、他郡より來りし某前訓導の調査にて、白川村の事情に通ぜず、僅に學校

兒童に就て調べたる結果なり。未だ發音の正しからざる兒童に言はしめ、且つ日々教授中、兒童の言ひ誤りし點等を採集したるのみにて、村民(大人ら)の言語を調べずして爲したるものなれば、大いに真相を間違へたり。云々。

さて白川村は「日本アルプス」の西方にあるから、白川方言が日本語の西部方言の一つであるのは、大體當りのつく事である。實際においてその西派に入る特徴は、左のとほり明かである。

(平假名交りの方は東京語  
で片假名の方は白川語)

- 能く見る || ヨーミル
- 重くて || オモイテ
- 涼しく吹く || スズシユ
- 来よう || コズ または コー
- 爲よう || セズ または ショー
- 起きよう || オキズ または オキョー
- 来ない || コン
- 爲ない || セン
- 起きない || オキン
- 来なかつた || コナシ
- いやだ || イヤジャ
- 本だ || ボンジャ

いま白川地方の方言のうち、古語に關係あるものや稍珍らしいものを片假名書きにして少し拔出して見よう。(一語の中又は末のガ行音は鼻音をおど)

- 大晦日オードシ(大年) ○朝アサザリ(ヨサリに對する) ○流星ヨ  
 バイボシまたはホシヨバイ ○今夕コイベ(此夕) ○暴風雨アメ  
 コチ ○葡萄イビ(えびかづらの略) ○鼯鼠トバ ○夫婦メット  
 (めをと) ○女ニョーボ(女房) ○女兒ニョーボノコ ○頭コーベ  
 ○佛間ナイジン(内陣) ○女寢室チョーダ(帳臺の略音か) ○長持  
 カラト(唐櫃) ○茶碗テンモコ(天目) ○汁椀ゴキ(御器) ○簀バン  
 ドリ ○朝食アサイ(朝飯) ○夕食ヨハン(夕飯) ヌーダイ(夕臺か) ○  
 佛壇ズシ(厨子) 里開チョーハイ(朝拜か) ○人形ボボ ○雛人形ヒ  
 ナボボ ○養蠶コガエ ○田植女ットメ(早乙女) ○今度イマタベ

○古フルシイまたはフルイ ○新アラシイまたはアタラシイ ○

大便するクソチヒル ○小便するションベンチマル

また普通な言葉の訛りの一斑を挙げると、犬イニ、雪イキ、鹽シホ、朝飯アサミシ、

球マル、百合花ヨリ、水ビズ、謝禮デー、小刀コガタラ、身體カダラ、鷲トンベ、猿サル、廻マガシ、膝ヘザ、踵キビソ、などで

ある。なほ飛驒あたり一帯に行はれるので、所の人が方言と氣づきかねる例は、イカズ(行かう)アツカラズ(暑からう)などと云ふ助動詞のズである。この語は、「行カントス」「行カンズ」「行カアズ」「行カズ」の例に變化したもので、美濃そのほかでも此の助動詞を用ゐるのである。

なほ親族の間の稱呼を記すに先だち、宮丸氏が示された明治三十九年四月末調査の中切六大字の戸數と人口とを記せば、左の通りである。

大家族制  
度

人口	戸數		福島	牧	御母衣長	瀬木	谷平	瀬合	計	平均
	女	男								
一九	二一	三								
一二	二六	二								
五〇	四五	四								
一〇六	一四五	一〇								
八八	八七	七								
七二	八八	七								
三四七	四一二	三三								
一〇・五	一二・五									

實に一戸の平均人口が二十三人となるのである。同氏は右三十三戸の中の大家族として長瀬の大塚安太郎(代々の通り名は次郎兵衛)方四十二人、御母衣の遠山喜代松(同前伊助)方三十六人、平瀬の坂本松之助(同前善兵衛)方三十五人、長瀬の山下良助(同前助六)方三十五人、木谷の東屋莊松(同前與平)方三十人を挙げ、同年四月の中切分校本校は大郷の鳩谷(はとがや)の學齡兒童(滿六年から滿十四年まで)は百二十六人であると云はれた。さうして、これまで其の親族の間の稱呼(片假名がき)は、中流以上で凡そ次の如くであつたと。

呼親族の稱

曾祖父

近來の實例は無い  
同様に云へば宜い

曾祖母

近來の實例は無い  
同様に云へば宜い

祖父

サハシヤ  
サハシヤ

祖母

オハシヤ  
オハシヤ

(父系も母系も)  
從祖父

(父系も母系も)  
伯叔父

父  
オヤ  
オヤ

母  
カカ  
カカ

(父系も母系も)  
從祖母

(父系も母系も)  
伯叔母

三男

以下は名  
の呼び名  
オサとも

次男

オトト  
オトト

長男

アニヤ  
アニヤ

長男婦

傍系親族から  
特にお父  
にオハシヤ  
と云ふ  
父や親や  
祖から  
は名の呼  
びずて

長孫

オハシヤ  
オハシヤ

長孫女

オハシヤ  
オハシヤ

次女

イモト

長女

アネ

次孫女

以下名の  
呼び名

三女

以下名の  
呼び名



但し親族の間の稱呼は、家によつて多少はちがふのである。

こゝに最も注意すべきは、嫡系の長男は十五歳頃となれば、アニキまたはアンサ(兄様)と云ふ尊稱を以て特別に待遇されることである。一家の權力の中心は嫡系の祖父と父とで、大事は其の相談で取極める。家長夫婦に次いで權力をもつ者に、鍛頭(くわがしら)即ち農事監督(なご)と銅頭(どうがしら)即ち炊事監督(くわがしら)といふのがある。

また宮丸氏は、白川言葉の變化してきた重要な事情について次のやうに答へられた。

一、前には他所から盛に僧侶が説教に來て、他所の言葉を持つて來たが、今は、大方土着の僧侶が説教するから、その影響は前よりは大いに少い。

二、前から村の若い者らが、冬の頃近所近國へ出稼むに行き、他

所の言葉を覚えて歸る。

三、近來は村の女子が高山町などへ女中奉公や製絲場の工女に行き、他所の言葉を覚えて歸る。

四、近來は村の男子が同縣内の鑛山へ働きに出て、方々の人の言葉を覚えて歸り、あちこちの言葉が入りこむ。

五、村への道路が改修されて、他所の人の出入が年と共に増加し、その言葉が入りこむ。

六、壯丁が軍隊教育を受けて歸り、その言葉がまねられる。

七、最も大きな影響を與へたものは、小學校の教育である。殊に明治三十七年以後の讀本には、口語文が澤山になつたから、尋常小學校卒業者は能く東京語を聽き取り、且つ話すことも出来る。

更に同氏は、我が白川村の老人らが、村の言葉や風俗が昔とは大いに變つたと云ふが、今後は益々變つて行くに違ひないと語られた。白川村の由來及び習慣などに就いては、こゝに之を記さない。

つまり、白川村の大家族制度の甚だ珍らしいのに較べると、方は案外珍らしくない。今では、その教育と交通とが發達してゐるから、言語も益々平凡となるのである。餘談ながら、幕末の頃の力士白眞弓肥太右衛門は木谷の新谷治郎右衛門方の生れで有つたと云ふ。

## 一〇一 田中大秀

田中大秀は飛驒の高山町の名高い國學者であつた。私は明

## 荏名翁

治卅九年の夏、この學者の舊棲を訪ひ、墳墓に詣で、遺稿などを見ることを得た。その舊棲は、町の東郊の荏名神社の境内にある。この社は、大秀が式内社が久しく荒廢して居たのを慨いて文化年中に再興し、その傍に閑居した所である。大秀は湯津香木園と號したが、後に荏名翁と稱へたのは、之に由るのである。

## 物語の註釋

## 荏名冊子

## 飛驒樂

## 大秀流

大秀は鈴屋翁に國學を學んだ。その著作は、平安朝の物語の註釋などが重なるものである。即ち竹取物語解や土佐日記解や落窪物語解などがある。その著作は未完全のものが多い。なほ荏名冊子と云ふ隨筆がある。大秀のあまな事業は國學であるが、趣味に富み、多藝の人で、音楽や畫道や書道にも通じて居た。大秀が古來の雅樂の譜をなほしたのを飛驒樂と云ふさうだ。晝は松に富士が得意で有つたと云ふ。書は大秀流と云ふ一風

子孫中門  
弟

足立稻直

を成して居た。好く自作の歌を書いて人に與へたと。なほ、その作に係る盆踊や三味線の歌詞が、今に残つて居ると聞く。斐太中學に在職中、あたり早死した椎野誠一氏の太秀翁傳記に、その事蹟が詳かである。

大秀の先代は高山町で、賣藥商を營んだ。その人は同町の内山氏から養子に行き、子の太秀の代に飛驒の名譽を揚げるに至つた。大秀の子を壽豊と云ひ、孫を年彦と云つた。年彦は東京へ移轉した。大秀には富田禮彦や井出曙覽や山崎弘泰らの門人があつた。特に足立稻直は、門下で最も有望な秀才で有つたが、惜しい事に廿三歳で亡くなつた。その遺著の紫式部日記解は國文註釋全書に收められてある。大秀の遺稿や遺書は多少散逸したが、しかし同町の上木氏の家に可なり多く保存され、今

は高山町役場の所藏となつてゐる。

大秀<sup>ウシ</sup>大人は地方文化のオーナメントであり、一國文化の貢獻者であつた。江戸時代の文化は、少からず、斯様な人の恩恵を受けた。今後はますます、斯様な人が出てほしい。

## 一〇二 飛驒の桃太郎

明治卅九年に荏名神社へ參つた時に、その近所で、高山小學校の尋常科四年生の男兒(その父母も教師も高山町の人)から、桃太郎の話聞いた。その話で面白く思つたのは、桃太郎が海の中の鬼が島へ行かないで、山の中の鬼の窟(いほ)へ行つた事である。これは、海の無い飛驒に出來た一種の桃太郎として尤な事である。荏名神社からの歸りに、城山や錦山に登つて、四方の高い山々

をながめ特に氣高い乗鞍嶽などを見やつて、あの兒童の話した桃太郎はこの深山あたりへ征伐に行つたのかと想つた。後に垣内松三氏に聞けば、丹羽川村の鬼の窟の話も残つてゐると。

### 一〇三 三井寺の鐘

京都あたりの寺めぐりをして興味を感ずる事の一つは、寶物拜見の時に聽く説明である。華頂山知恩院の鶯張りの縁側を傳ひ、あの簡潔にして流暢な説明を聽くなどは、感興の深いものである。そのほか、粟田の聖蓮院なり、北山の金閣寺なり、紫野の大徳寺なり、嵯峨の大覺寺なりに於いて、夫々感興を催するのである。しかし私が聽いた中で特に面白く感じたのは、三井寺の古鐘、即ち俗に云ふ「辨慶の引きずり鐘」の説明である。

私は大津へ行くと、三井寺の観音堂の前から湖水を眺め、更に奥ゆかしい境内に參つて古鐘の話を聴くのを樂しみにして居る。その話は可なり長いものであるが、日々幾遍となく繰返された熟練を以て、至極流暢に僅か四分間位に美しく上方言葉で語られるのである。その話を世に傳へたいからと言つて、説明者宮川督次郎氏に頼んで書き留めたのが、次の如くである。

「この鐘は朱雀天皇さんの承平年間しやうへいに田原藤太秀郷たはらとうだひせきとちう御方かたがこゝへ寄附くだされたのでござります。秀郷がどうして此の鐘をおもとめやしたかと云ふ事は、御伽噺の様にござりますけれど、口碑に傳へた事だすさかひ、御話申し上げます。秀郷が承平元年から五年までの頃大津にすまひしておいでやした時に、一日草津いちぢうへ行かうとして瀬田の橋をお通りや



したら、目をひいて、角をはやして、こはい顔して、大きな蛇がゐ  
ました。それを秀郷がこはがらずに跨またげて、さつさと東の方  
へいらつしやつた。さうしたら、向ふの方におぢいさんがヒ  
ヨイと立つて、われは此の橋下はししたにすむこと數十年になりま  
すけれど、未だ曾いまてあなただのやうな度胸どぶちのすわつた御方を知り  
ません。どうか一つ頼みを聞いて下されませんかと云はれ  
ました。秀郷は何か御尋ねを聞いて上げようと云ははつた  
ら、龍殿りゅうてんととなへる、水の中の結構な所へ案内して、酒や肴を出  
だし、大層ねぎらうて、夜半よはんの頃になりましたら、今あだが來きま  
したから、どうぞあのあだを討つて下されと云うて頼まれま  
した。

秀郷は何かと思つて見やはりましたら、向ふの方に大きい

百足ひかてが居りました。秀郷は常に弓や箭やぶを携へてござる御方と見えまして、すぐに箭を二本はなたれました。二本ともあたつても通りませなんだ。おぢいさんが云はれますのに、かれはつばをさらふものでござりますと申されました。

秀郷は三本目の箭につばをつけて射られましたら、左の目の眉の間にあたりまして、一本の箭で大きい百足がたふれました。その禮に十種寶物じゅうしゆたからものを貰はれました。その中の一つを三井寺へ寄附下されたのが、この鐘でござります。水の中の蛇が陸の百足をなぜさらうたかと云ひますと、蛇の子に乙姫さんといふ、ねいさんがありました。そのねいさんをつかみに來ますので、それがこはさに、おぢいさんになつて、頼まはつたのでござります。蛇がこはがる位の百足でござりますか

ら、どんな百足かと云ひますと、近江富士を七卷半まいて瀬田の橋まで頭を出しました。七卷半の百足を引き延ばしますと、延長十里ほどにもなりますのでござります。そんな百足が出て居りますのに、七卷半まいてゐるやら、八卷まゐてるやら、誰もこはうて敷へるものがござりませんやらう。あなたさん方でも頭へ手拭を一つまいて何とおつしやいます。一つまいて鉢(八)卷とおつしやいますやらう。一つ巻くのにチエート(少し)足らずに瀬田の橋まで頭を出したのかも知れません。それを引き延ばしても、五里ほど無けにや足りませせんよほど大きい百足であつたものでござります。

これは承平元年から五年までの事でもござりまして、承平五年には秀郷は武藏守に任ぜられ鎮守府將軍となり、天慶三年

二月十四日に平將門を下總の猿島で討たれたのでござります。

## 辨慶

その寄附下された鐘をこゝに三百年程つって、撞いて居りましたが、辨慶と云へる人は、紀州熊野の權現さんをもりする別當べつたうの辨海べんかいのむすこで、播州の書寫山しよしやまで修行し、比叡山ひえいざんの西塔谷さいたふたにの武藏坊むせうぼうといふ寺に居られました。當時比叡山には僧侶三千人居やりますし、三井寺には八百五十名より居やりますませんでした。それに同じ天台の本山同志でござりますから、座主ざすの争が起り、辨慶が隊長になつて攻めて来て、そこいらを焼いたり、くだいたりして、この鐘を分取つていやはつたのでござります。その時、山坂三里半ひつぱられましたので、この様にいぼがちびりましたのでござります。比叡山で撞

## 鐘の分取

いて見やほりましたら、鐘の音ねが出ませずに、イノい（往いなう）と響ひびきました。比叡山で往いなうと響ひびいたら、三井寺へ歸りたい鐘かねやと云いうて、辨慶はんけいが怒いかつて谷間へ投げすてました。その時こちらの方が、ずつとひひり入いりました。その後のちに和陸わりくをして貫ぬうて歸かへりましたが、ひひり入いつてますので、撞つくことが出来こせんから、この臺の上へのせました。

それから後に、一人氣ひとちがひ見みたよな女にょが女人にょじん禁制きんせいの山へ這入こつて來きて、この鐘は結構けいこうな鐘かねや、鐘かねと云いふものには鏡かがみの質しつが入いつてあるものや、どうか此この鐘かねで鏡かがみだけが戴はかして欲ほしいと云いうて、一心いっしんに念ねんじて鐘かねのぐるりを撫なでまはりやしたら、正面せいめんのいぼいぼの中に鏡かがみのかたちだけ、ホカホカット取とれました。その取とれましたのが、天文十八年七月、太閤たかさんの十四じゅうしの歳の盆ぼん

の十五日でござりました。その翌年から毎年七月十五日には女人禁制がゆるされて、御女中方ごよめちゆうがたにこれを見て懺悔ざんげをしてもらふ事になりましたのでござります。

なほ説明者の餘談に、「どうも此の話を御聴きになる人が色々々々だすさかひ、どなたにも分る様面白う申したいと考へました。何時ぞやも中學の生徒さん達が見えて、何ぢや、辨慶なんか嘘うその人間ぢやと、頭から冷かしなされたので、困りました。そこで、先づ暫く御聴きなされと申して御話すると、あゝ面白かつたと云つてお歸りやした。又心ある御方は、何時も話す通り話せと仰せられますから、えらい御方に向うても同じ事を申上げて居ます」と云ふ事であつた。

## 一〇四 八景

宋廸工畫、尤善平遠山水。其得意者、有平沙落雁、遠浦歸帆、山  
市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁村夕照、謂之  
八景。好事者多傳之。（夢溪筆談）

近江八景は、室町時代の末に瀟湘八景に倣つて見立てられた  
ものである。で、唐めいた風雅は感ぜられるが、

さとなみや志賀の都はあれにしを

昔ながらの山櫻かな  
（平忠度）

といふやうな日本趣味は無い。それからして伏見八景、嵯峨八  
景、南都八景、明石八景、金澤八景、松島八景などが見立てられた。  
けれども殆ど摸倣であり、まあ南都八景ぐらゐが、やゝ特色のあ

近江八景  
の由来

諸所の模  
擬八景

るものである。

南圓堂の藤。佐保川の螢。猿澤池の月。春日野の鹿。  
三笠山の雪。雲井坂の雨。東大寺の鐘。轟橋の行人。  
しかし、藤はあつても櫻が無い。これから後に風景を見立て  
る人は、心してくれたまへ。

## 一〇五 櫻

世の中にたえて櫻のなかりせば

春の心はのどけからまし

業平朝臣

と業平朝臣が詠んだのは、餘りに櫻を愛賞した上の事である。  
當り前を云へば、

うらくとどけき春の心より



にほひ出でたる山櫻かな

と縣居翁あかたが詠んだ通りである。もし櫻が咲かなかつたら、日本の春の心持がしないであらう。「花」と云へば櫻櫻と云へば「國の花」、同時に大和心、今の言葉で云へば日本の國民性と、斯う極つて居る。官營煙草の名の敷島「大和」「朝日」「山櫻」が鈴屋翁の歌から出て居るのは、云ふまでも無い。櫻の名は我が國民に餘程氣に入つて居るもので、地名や人名や事物名にも、

櫻田 櫻井 櫻山 櫻川 櫻島 櫻宮 櫻町中納言 櫻姬

櫻正宗 櫻ビール 櫻丸 櫻セメント會社 櫻草 櫻貝

櫻魚 櫻蝦 櫻鯛 櫻飯 櫻味噌 櫻餅 櫻漬 櫻煮

櫻紙 櫻石 櫻鹿子 櫻色 櫻會

などと付けてある。勅撰集を開いて見ても、春の部の大半は櫻

## 芳野三絶

の歌である。櫻の詩も中々多い。芳野三絶と云はれて居るのにも、「南朝天子御魂香」と云ひ、「滿身花影夢南朝」と云ひ、「落花深處」説「南朝」と云ひ、みな櫻を背景として有る。俳句にも「花」花の雲「花見」花曇「花の雨」花吹雪などの季題がにぎやかである。

## 季題

天地者、萬物之逆旅、光陰者、百代之過客。而浮生若夢。爲懼幾何。古人秉燭夜遊、良有以也。況陽春召我、以煙景、大塊假我以文章。

## 夜櫻

と宋の李泰伯が「春夜宴桃李園序」に書いたのは、日本で夜櫻の賞観と云ふ事を思ひ當らせる。現に祇園ぎんの夜櫻は、京洛の人を酔はせてゐる。その近所の西行庵を訪へば、

佛には櫻の花をたてまつれ

わが後の世を人とぶらは

と詠んだ風流佛が思ひしたはれる。

## 一〇六 杜鵑研究

川口稜山

杜鵑研究

法學士川口稜山氏の杜鵑研究は天下一品である。聞けば、君が特に杜鵑に縁を持つたのは、紀州の故郷に居た幼少の頃に、或朝の事、一羽の杜鵑が土蔵の白壁の下に斃れて居たのを見たのに始まると云ふ。君は後に幾年か京都に居て、杜鵑研究の便利を得、非常な熱心を此の鳥のためにさゝげ、夜通し叡山などで研究した事も有つたと。君の「杜鵑研究」は、杜鵑文學にも及んで、どこまでが事實か、どこまでが詩人文人の空想であるかを示した。杜鵑の最も普通な和名はホトトギスで、この名がその鳴聲から起つた事は疑ない。君は杜鵑の異名についても種々しらべ

て見た。ホトトギスは西洋でも「詩人の鳥」と稱へるもので有るが、我が國民は特に深い趣味を持つて居る。近い例を云へば、俳諧雜誌に子規の創めた「ホトトギス」が有り、小説に蘆花の「不如歸」が有る。之に君の「杜鵑研究」を加へて丁度三幅對になる。

君は、飛驒では公務の餘暇に、その鳥類などをしらべ、雷鳥研究のためには、乗鞍嶽の頂に登つて大正六年七月廿八日から十日間の山上生活をした。「乗鞍嶽上十日記」も亦珍しい御みやげである。「雷鳥を殺すと暴風雨が起る」といふ俗信を、雷鳥の敵の鷹は暴風雨を豫知して他へ避けるので、雷鳥が安心して出遊ぶ所を心無い人に時々殺されるのだと逆説した所など、甚だ面白い。

或時の事、秋風を金風と云ふのは、秋は稻田が黄金色に熟して居るので、風が黄金の波をただよはせて吹く様であるからでは、無いか。と聞かれたことがある。面白い思ひつきでは有るが、しかし金風の語の起りは五行説から來て居る。

漢の代に五行説が盛行にはれた頃に、支那人が物事を五行即ち木火土金水に配り當てゝ見た。五色に就いて云へば、青は木、赤は火、黄は土、白は金、黒は水。方角に就いて云へば、東は木、南は火、西は金、北は水。今一つの遣り場を見立てゝ中を土とする。四季を云へば、春に木、夏に火、秋に金、冬に水、さうして一年の眞中に土を當てる。それから蒼龍、朱雀、白虎、玄武と云ふ様な名稱も出來、金風、颯々と云ふ様な修辭も出來たのである。だから、金風は黄金色の風では無くて、白い風である。斯う云ふ様に見て、

石山の石より白し秋の風

と芭蕉が加賀の那谷で吟じた句や、また

水草の花まだ白し秋の風

と子規が道後公園で吟じた句や、また

さわくとわが釣りあげし小鱸こずりの

白きあぎとに秋の風吹く

と萩の家の詠じた歌など、中々面白い。吾人は五行説の信者では無いけれども、少くとも文學上における五行説の影響を認めぬわけには行かない。

## 一〇八 國母陛下

「國母」とは、我が舊來の例では、皇國の元首の御母君即ち皇太后

陛下を申すのである。國文において「國母」を漢音で「クモ」とも「クモ」とも読み、拾芥抄に皇太后を「國母仙院」と申すともある。それで、大正の御代の初め御在世中の昭憲皇太后の如き御方に「國母陛下」と申すべきである。近來は新聞や雜誌などの中に、皇后陛下の御事に「國母陛下の御誕辰」と申すことを屢々見受ける。これは兩陛下を兩親に、國民を子供に譬へて申す事支那でも後漢書などに、その例があり、その心情、誠に良い事と思ふ。後者の意味は、「義ハ君臣ニシテ情ハ父子」と仰せられた聖旨と合する所がある。

## 一〇九 春畝公と陶庵公

嘗て早稻田侯が春畝公と陶庵公とを比べて、伊藤は詩の人、西

周公

園寺は俗語の人、それで、その政友に對して、伊藤は「肝膽相照」の語を用ゐ、西園寺は「情意投合」の語を用ゐた謂はれが知れるだらうと語られた。また「周公と其時代」の著者林博士に、周公のえらい所はその「吐哺握髮」にあると語られたと。

## 一〇〇 外交

第一義と  
第二義

「外交」の語の第一義は、外國との交際又は交渉 (foreign intercourse) であり、その手段、策略及び御機嫌取の如き (diplomacy) は第二義以下に降るのである。それについて、早稻田侯は「外交」と云へば、第二義に取られ勝の様だが、外交の本義はさうでは無い、外交の第二義に落ちない様にするには、言葉の見解をも正さねばならぬと語られた。



## 一一一 新日本

新日本と云へば、近來出來た言葉のやうに思はれるが、實はさうでない。今から百二十五年前に、本多利明といふ人が西域物語を著して、その中に「日本を天下第一の最良國とすべき法」を論じて、鎖國退嬰の日本を「古日本」と呼び、開國進取の日本を「新日本」と呼び、西洋人の大業を興せし手段により國業を興すにおいては、永く不動の大國とならん。然る時は英雄も豪傑も國中より躍り出で、國家の御用に立つべし。」と説き立てゝゐる。

## 一一二 舶來語

鎖國以前に入りこんだホルトガル語やイスパニア語が、今に

蘭學解禁

開國進取

和語との  
調和

少からず残つてゐるのを見ても、當時その文化吸收の盛であつたことが想像される。蘭學解禁以後にはオランダ語が多く入りこんだ。開國進取の明治以後に、西洋諸國語を始としてその他の諸國語が盛に入りこんでゐるのは當然である。それらが俳句や和歌にも用ゐられて、好く和語と調和してゐる。

春寒のビールの泡や薄き聲

五丈原

ベコニヤの嫁秋海棠の姑と合はず

和風

サフランの花淡紅く冬日かな

知十

トンネルに飽きし眼をやる薄紅葉

虚子

後の月ジャバスマトラも見えんとす

小波

日數つもればはてもなき、シペリヤの野も行きすぎて、  
ウラジラストックとくとくも、そこの浦をば船出せり。

(「騎馬旅行」の中より)

萩の家

徒にクリストをよび釋迦をよぶ

三千年はつひにかへらず

翠溪

### 一一三 壽限無

ロシア皇帝の稱號

或人が「ロシアの皇帝の稱號は長々しいものだつた。『全ロシア獨裁主及び皇帝、兼モスクワ帝、キエフスキ、ウラヂミルスキ、カザンスキ』から終りまで稱へると、随分長くかゝる。シアの皇帝の稱號なども、頗る長いものだ。日本の『法性寺、入道前、關白太政大臣』などは、傍へも寄れないぞ」と云ふと、又一人が云つた、「さうとも限らない。壽限無じゆげんむを稱へて見たまへ。『壽限無、壽限無』から始まつて、『長久命の長助』までは、可なり長いぞ」と。

壽限無

江戸時代の  
奇名

明治時代の  
奇名

鱈の名が  
はり

安達常正氏の「漢字の研究」には、享保二十年江戸幕府から諸侯に申報させた珍奇な氏名の中に、

大岡新助之丞九郎左衛門

勅使河原四郎九郎十三郎兵衛

などがあることを掲げ、また明治四十二年頃宮崎縣に、

高倉田子ハ浦ヨリ打出デテ見レバ白砂

といふ氏名の男子が有つたさうだと記してある。

## 一一四 名がはり

人の名に、幼名は何、長じては何と稱し、後には何と改めたと云ふ例が幾らもある。此は人の名ばかりの事で無い。東京の或魚屋の話に、鱈たぐの小さい時をオボコと呼び、それから次次にイナ

鱒の名が  
はり

ボラと呼び、メナダと呼ぶのはボラの大きなもので、トドと呼ぶのは其の最も大きなものです。鱒トラの小さい時をワカシと呼び、それから次々にイナダ、ワラサ、ブリと呼びます。オボコやワカシは夏の物で、ボラやブリは冬がうまいですと。

## 一一五 落し噺

頓智の好い噺上手の老人から、幼い時に斯う云ふ話を聞かされた事がある。

鮎アユと鯛タイと  
の争

「秋になつて鮎アユが川を下つて海に行きますと、鯛タイが大きな顔をして云ふには、貴様のやうに、時候の好い時を見て一年中の半分餘も川遊びしては歸つて来る奴は、今後この海へ歸ることは相成らぬと。そこで鮎は、これは我が身に始めた事では無い、先祖

鯨の裁判

から代々の仕來りであるから、他から彼此言はれる筋で無い、自分らの勝手に御座ると申しました。その争ひが中々片づかぬので、双方が其處の戸長の鯨こじの所へ申し出ると、さすがの鯨も、この争ひにはコチ(此方)も困つたから、どうぞアイ(相)タイ(對)づくで濟ましてくれよと云ひましたとさ。

俗間では、斯う云ふ擬人法や寓言法や重義法を用ゐた落し噺が、随分と行はれて居る。

## 一一六 天河屋

天河屋の  
義平

義商天野  
屋利兵衛

「天河屋の義平は男でござる」は、忠臣藏十段目の好い臺詞である。忠臣藏には之を泉州堺の商人に擬してあるが、實録では、大阪の俠客で天野屋利兵衛と云つて、やはり義士復讐の際に一切

の兵器を調達した男である。芝の泉岳寺の四十七士の墓の入口にも「義商」として天野屋利兵衛の石碑が建ててある。

さて天河屋は天野屋の作り換へであるが、しかし大空の「天河」から思ひ着いたのでもなく、神代の古事の「天の安河」からでも無く、早くから我が國の商人が貿易して居た南支那の廣東省の阿媽港アマカウから思ひついたのだ。それをば漢字の訓を借りて「天河」と書いたのである。「天河」は今の澳門即ち Macao である。珊瑚の一種にアマカンと呼ぶのがあるが、それも阿媽港と貿易した時に之を輸入したに由つての名残である。昔の堺は今の神戸港の如くに貿易港であつたから、天河屋と云ふ屋號は、單に戯曲作者の作り事では無いと思はれる。

元祿八年即ち義士復讐に先だつ八年前に出版の和漢名數の

中に、阿媽港アマカの名も見えて居る。それは、西曆一五八二年即ち我が天正十年信長遭難の年に、ホルトガルが海賊を防ぎ且つ年額五百兩を支那政府に納める事を約束して、此の港を租借地とし、その後盛に東洋貿易を營んで居た所である。

## 一一七 ナンヂャモンヂャ

小石川の植物園にナンヂャモンヂャといふ奇木がある。風變りの木であるから、斯う名づけたので有らう。萩之家遺稿の中の香取詣にも、源太河原を過ぎて半里も行くに、右の岸にうるはしき森あり。式内の神社のある所なり。そこにナンヂャモンヂャといふ木あるよし、乗合の人、物語れり。いかなる木なるかと云ひしに、そのさま普通の木の類にあらず、その名もわからぬ

ナンヂャ  
モンヂャ

萩之家遺  
稿



ア  
ク  
タ  
モ  
ク  
タ

キ  
メ  
ウ  
キ  
テ  
レ  
ツ

余  
田

ば、昔よりナンヂャモンヂャといひしなりといふ。」と記してある。蓋し、ナンヂャモンヂャは「何と云ふ物だ」の音韻變化で、しかも、ヂャが一對になつたのは、ちやうど「あくたもくづ」が「あくたもくた」ともなり、又「あくぞもくぞ」ともなつたのに似てゐる。即ち脚韻をふんだのである。「奇妙奇天烈は頭韻を合はせた造語で、「奇天烈」にさほどの意味は無い。

## 一一八 先斗町

美濃の大垣市の在方に「余田」と書いてハグリと讀ませる地名がある。その起りは、江戸幕府の始に田地調べがあつた時、役人が忙しかつたと見えて、帳面をはぐり、此所を見落したのでハグリと讀むのだとも、又は、ぐれ落ちた田の意だとも云ふ。

さて京都の四條の「先斗町」は、どう云ふわけだらうか。この邊は、天正年中に南蠻寺の在つた所だと云ふ。この町名を「先斗」と書くのは、鴨川に臨んで裏は河原であるから、先斗さきばかりと書くのだとも云ふが、しかし先斗を「ポイント」と讀む説明にはならぬ。三、水、扇に「義」と書いた字を「油」の誤書と判定した塙檢校でも之を説かれるか。高楠博士は「先」は二字の平假名書きから變じたのだらうと云はれたと。或は洋語にもとづくか。

我等は斯様に難讀の漢字を讀まされて居るので、時時わざとむづかしく見當ちがひの讀み方をするところがある。誰やらが「廣告の「最上醬油」をモガミシヤウユと讀んだ。」

國語統一のために標準語をひろめて、なるだけ方言の減少する事を努めるのは、國民教育に大切な事である。が、國語研究上から云へば、方言の取調、方言の記録と云ふ事が大切である。特に、珍しい方言、特徴の多い方言ほど、國語研究に好い資料を供へることになる。とにかく各地方において方言の取調、方言の記録の行はれる事が望ましい。

痘痕あざの方言の如きも、過去半世紀における種痘せうとの勵行によつて痘痕が稀になると共に、追々衰微するで有らうから、今の中に記録して置きたいとの考で、各地方の人々に聞いて置いた。それについて参考として琉球語や朝鮮語やアイヌ語における痘痕の土語をも、友人に頼んで調べて貰つた。そのアイヌ語については、土井壯良ついで氏から北海道の人に頼んでアイヌの部落の多

い所で調べて貰つた報知に、次の如く述べてある。

「先般御間の事取調候處士人の青年は知らず依て老人に就きて取糾し候處左記の通りに候此土語は日高の沙流郡平取と二風谷の二箇村の者にして他村に少し相違ありと申候も判明せず尙取調可致候當地方の學校の先生方は小生に問はれて始めて始めて氣付候ものには有之候學校生徒は何れの校にても知らざるものに有之候(下略)

この報知を得て益々言語の記録の必要を感じたのである。なほ其の報知に、痘痕を土語にエルムタンブと云ひ、さうして白痘痕にはレタルを添へ、黒痘痕にはコンネを添へ、種痘するのをウオケ、オッケと云ひ、ポトルケと云ふのは黒子はぐろで有つて、痘痕では無いと記してある。

## 一一〇 語原と字原

語原と字原

近來我が國において語原や字原の研究が盛になつたことは、喜ぶべきである。我が國語の語原の研究の如きは幼稚なもので、これから専門學者が深く研究をせねばならぬ所である。漢字の字原の如きは既に支那の學者が研究を積み重ねた所であるけれども、まだ明かでないものがある。

専門學と普通學

とにかく語原や字原の研究は、専門學として或は道樂として結構な事であるけれども、小學校や中學校の國語教授に之を生なま半可はんかに持ち込んで得意がる様な事は、不必要といふよりも寧ろ不都合と謂はねばならぬ。漢字の起原をなまかじりして「波」は「水の皮」、「滑」は「水の骨」と曲解するが如きは、普通學において無益

有害の事である。また、日本語は印度歐羅巴語族に縁があると云ふ假説から割出して、中學の英語教授において、bone(骨)と「ほね」、king(王)と「きみ」などの關係をつけるとして、何等の必要があるか。曲解の癖をつける事になるではないか。

本居宣長も物まなびする輩、古言のしか云ふ本の意を知らまほしくて、人にも先づ問ふこと常なり。これも學びの一つにて、さも有るべき事にはあれども、さしあたりて、むねとすべきわざにはあらず。大かた古の言は、しか云ふ本の意を知らむよりは、古人の用ひたる意をよく明らめ知るべきなり。用ひたる意をだによく明らめなば、云ふ本の意は知らでもあるべきなり。(玉勝間)と説き、且つ言葉の本の意と後世に用ひた意とは、多くは同じで無いことを、例を擧げて説いて置かれた。

## 一一一 日鮮同系

音韻通略  
延約説の  
附會

金澤博士  
の研究

日鮮同係

音韻通略延約説で附會した語原研究は、餘り當てにならない。  
シ<sup>○</sup>グ<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>はシ<sup>○</sup>バ<sup>○</sup>ラ<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>ク<sup>○</sup>ラ<sup>○</sup>キ<sup>○</sup>の意であると云ふのなどは、あまり感  
服されさうに無いが、ナ<sup>○</sup>ミ<sup>○</sup>ダ<sup>○</sup>はナ<sup>○</sup>キ<sup>○</sup>ミ<sup>○</sup>ヅ<sup>○</sup>タ<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>の意であると云  
ふのなどは、ちよつと尤もらしくも聞える。が、金澤博士の研究  
の如く、朝鮮語で涙をヌ<sup>○</sup>ン(目)ム<sup>○</sup>ル(水)と云ふのと比較すると、ナ<sup>○</sup>ミ  
ダは朝鮮語と同じ祖先語の音韻變化であると見るのが正しか  
らう。日鮮兩語の比較研究は、段々と進められてゐる。

或日本人が或朝鮮人に向つて、朝鮮と内地とは人も言葉も同  
系だと思ふが、君が氣のついた同系の言葉を話して貰ひたいと  
頼むと、さやう、先づ日本へ來て見て氣のついたのは、ランブにマ

ツチにカタバンに……全く同じだと出られたのには、閉口したと。つまり、つひ近頃行つた新日本語を逆戻しにされたのだ。

## 一一一一 朝鮮語や琉球語

朝鮮や琉球

朝鮮や琉球は、昔は支那の屬國又は半屬國の姿で有つたこともあるが、それは政治外交の上の事であり、民族言語の上では、我が日本内地の民族言語と親密な關係のある事は疑無い。琉球語については、チャムブレン (Chamberlain) 氏や伊波氏や東恩納氏らの日本語との比較研究が出て、朝鮮語については、アストン (Aston) 氏や金澤博士らの日本語との比較研究が出て居る。琉球語と朝鮮語と日本語との關係は、凡そ左の如くであらう。

日本語との關係

### 一 上世日本語



祖語

太古日本語

— 上世琉球語

太古朝鮮語 — 上世朝鮮語

民族言語の間柄から見れば、琉球や朝鮮が大日本帝國に併合になつた事は、王政復古が更に復古した觀がある。沖繩縣人や朝鮮人が日本語を學び易いと云ふ事も、當然である。

一一三三 滿洲語や蒙古語

中華民國の前に支那を統治して居た清朝の皇帝は滿洲人から出て、その前の前に支那を統治して居た元朝の皇帝は蒙古人から出た。その滿洲語や蒙古語が、日本語や朝鮮語と同族の間柄であると云ふことは、學者の認めて居る所である。蒙古の古

事記とも云ふべき成吉思汗實錄を、五箇年の苦心を以て譯された那珂博士は、その序論の中に左の如く述べられた。

「蒙古語は、阿勒泰語族に屬して、我が國語と文法甚だ近く、殊にその措辭法は殆ど同じければ、語ごとに適當の譯語を當て、名詞代名詞の格動詞の言方などを誤らざれば、自ら我が文章となる。譯讀するにも、漢文・歐文を讀むが如く飛返り跳返る必用なし」。

また人類學者鳥居博士の研究に據ると、滿洲の中で人家の門に日本の神社に建てゝある鳥居に似た形の門があると云ふことも、甚だ意味深く感ぜられるでは無いか。

鴉鳥の一名「鳳五郎」は、オランダ語の *struis-hoger.* の略「ホイゲル」の擬人的當字である。

明治五年頃に田中芳男氏や津田仙氏が「行路樹」(道並木)の必要を東京府知事に建議して、その結果、丸の内の濠端にアケシアや *caoba* などか植ゑられた。そのアケシアに「明石屋樹」の漢字を當てたのは津田氏であるさうだ。

さて猛禽類の一種である大鳥のコンドル (*condor*) は原名の音譯であるが、それを或漢學者流が妙な聯想をしてコンドリと云つて居たさうだ。その謂はれは、莊子の語にあやかつてコンと云ふ鳥の意味に取つたのだと。しかし逍遙遊篇には「北冥有魚、其名爲鯢。鯢之大、不知其幾千里也。化而爲鳥、其名爲鵬。鵬之背、不知其幾千里也。」とある。して見ると、コンドリでは無くて

ホウドリと云ふべきだ。

## 一一五 トランプ

トランプ

トランプ (Trump) と云ふカルタの遊びは、西洋から傳來したものである。その名について面白い事がある。勝負遊びの事であるから勝利を誇つて、元はトライアンフ (Triumph) 即ち勝利と名づけたので有るさうだ。それが、人に考へ違ひをさせ、己れの計略を遂げて勝たうとの意味からして、類似の音の Trump 即ち欺くと云ふ語に變つたのであると云ふ。

聯想や先入觀念と語音の聽き損じとが結びついて誤りの起ることが時々ある。我が國で、洋食のハム (ham) をハモ (鱧) と取違へたり、また或話で、昔の人は大きかつた。アダム (Adam) も大きか

ハモ

つたし、アフラハム (Abraham) も大きかつた。と云はれた事を、昔の人は頭あたまも肋骨あばらばねも大きかつた」と云ふ様に聴き違へたりする例が有つたと聞く。

## 一一二六 外來の變生語

ゴネル  
サボル  
トース

江戸の俗語に、死ぬのを「ゴネル」と云つたのは、御涅槃に入るの略である、大槻博士が語られた。「涅槃」は梵語である。さて「ハイカル」の如き外來の變生語は、少し古くなつたが、近來は、英語のサポタージサボタージュ (sabotage) 即ち「怠業」をするの意で、「サボル」と云ふ新語が流行してゐる。またパンを薄く切つて炙り、之にバターなどを塗つたのをトースト (toast) といふ英語から、「パンをトース」と云ふ新語も出來てゐる。

## 一二七 洋語まがひ

洋語まがひの和語

近來和語を洋語まがひに呼ぶのが往々に有る。藥の名に「ツヨール」〔強る〕、「ナホール」〔治る〕、飲料の名に「スカル」〔好かる〕、洗張用品の名に「フノリン」など。「ハイトマルトスペール」は、茶目が言ひ出した、禿頭の稱號で「ブルバルドル」は氣取屋の異名である。

## 一二八 ことばの洒落

無邪氣な  
しやれ

たま／＼無邪氣な洒落しやれをはさんで話をする人として田尻子爵の例を失敬する。或所での講演の中に曰く、イギリス人は今は寢て居ても資金の利得で生活して尙餘りが有る程の富を持つて居るが、しかし元は勤勉と節儉とで積み上げたもので、夜も

ネルソン

ヒシヤク

きたなり

寢ずに働いたネルソンと云ふ人も有つたと。また或禪寺の和尚から、貴方は何々院長何博士子爵と云ふ偉い肩書を持つて御座るさうぢやと言ひかけられると、子爵は何も偉いことは御座らぬ、私のシシヤクは、あのヒシヤクの様なものだと言つて、大丈夫の庭の笥の水に打たれて居る柄杓を指されたさうだ。

岐阜縣に過ぎたるものが二つあり

坪井の竹に名和の昆蟲

といふのは、同縣旅行の時の子爵即興の歌である。北雷といふ號は、身なりをかまはぬ、着たなりの意であると。手近な洒落は、世の人の耳に入り易く、談話に一種の感興を起させるものである。但し、洒落はたま／＼言ふのが宜しく、その濫發は談話を下品にし厭氣いひまを催させるものだ。

## 一二九 うそ字うそ読み

生徒の答案や店の看板や學者の原稿にまでうそ字を書いて有るのは、珍らしく無い。學者の書いたうそ字が活版屋に直されると云ふ事實もある。もと大日本圖書株式會社の活版部長であつた能勢新太郎氏の話に、どうもうそ字を見ると氣になるもので、何時ぞやも、自分が日頃乗り降りする電車停留場の邊の或商店の看板に何々「商店」と書いてあるので、氣になつて仕方が無く、とう／＼其の店へ這入り込んで、知合でも無い店の主人にどうか、あの看板の字を書き直してくれたまへと請求したことが有ると。

かつてローマ字ひろめ會の集會のとき、林董伯は、江戸の昔か

能勢氏の  
話

林伯の話



ら人いぢめに書かせる。比叡山獻上の鹽竈しほがまといふ漢字を満足に書ける人が、この會衆に幾人あらうかと云はれ、それから

兩あふ大師などと澄まして讀んで行き。

と上野寛永寺の兩あふ大師の表札を誤讀した川柳などを引き、林伯をベルリンと誤讀されたことまで話された。すると、或大學生が「大隅伯今の侯と書いたといふ話も聞えた。川柳子に言はせたら、

大隅あふに候あふと書いて平氣なり。

### 一三〇 議會の大笑

議會において「枚舉あふ」をボクキョあふと云つた大臣もあり、「矛盾あふ」をホコトあふと云つた大臣もあつた。又いつぞやの議會において豫

ケツガイ  
病

算總會が開かれた時の出來事に、此の時委員長、報告漏れありたりとて委員會に於ける希望事項を報告す。報告中、結核をケツガイと言ひ過り、野黨側は笑ひこけ、佐々木照山君、日本の歴卷也と言ふや、委員長、何が誤りなりやと怪しみ、與黨側よりケツカクの誤りなりと言ひたるに對し、木扁に亥の字ありてガイといふ音也、若しカクといふ字ならば提出者の誤りなりと辯解した(東京朝日新聞)とあつた。

ゾーキョ

ついでに他の話一つ。或佛教大學の近所の書店の主人の話に、いつぞや二十歳位の學生が店へ来て、「ゾーキョ」が有るかと聞いた。大藏經の事かと思つて、それは大部のもので有つて、今店に無いが注文なれば、取寄せますと答へると、彼の學生は、いい、唯一冊の活版本であるさうだと云ふ。どう云ふ字の本かと

聞くと、増まといふ字と鏡かてみといふ字と答へた。あゝ「増鏡まきかてみ」それなら有りますと、一場の喜劇を演じた事があると。

一三一 言葉の色々

○つまらぬ

つまらぬ

今でも「つまらぬ」といふ語は、江戸の劇場から出たもので、観客が多ければ「つまる」けれども、少ければ「つまらぬ」から、轉じて「つまらぬ」といふ語が流行したのであると云ふ。尤も「つまる」の方は轉用されて居ない。

○血 税

血税

明治の初め徴兵令が布かれてから、兵役は國民の「血税」(Blood tax)の意譯だと云はれた。それを文字通りに誤解して、兵隊の

生血いぢちをしぼつて電信をかけるのだと思つた者が有つたと。

○司會者

司會者しゑしやと云ふ語は、會合を司る人の意味で造つた語であるが、はじめ基督教徒の間に用ゐた語であるので、基督教くさい語になつたのであると。

○天麩羅

テンブラといふ料理の語は、もとイスバニア語の寺てらの意である。テンプロ(templo)の轉訛であらうと。

○ドライバー

機械の動輪をいふドライバーは、英語のドライバ(driver)の訛つた語。また括弧をバレンといふのは、英語のバレンゼシス(parenthesis)の略訛り。

司會者

テンブラ

ドライバー

バレン

トタンキス

ヨサニア  
ノ

當世の略  
語の色々

○タンキスト(短歌作家)

タンキストは、日本語の「短歌」と英語の接尾語のイスト(ist)即ち人との相の子言葉。タンキストで思ひ出す事がある。下位氏が雑誌「Sakura」(櫻)の上で與謝野晶子さんの短歌をイタリア譯にして見せると、非常な評判になり、感傷的といふやうな意味で「Yosuniano」といふ新語が出来たさうだ。

○帝展、院展

當世に行はれてゐる略語を見るに、日銀銀行、帝國劇場、早稲田大、東京帝國大學、醫學專門學校、鐘紡株式會社、の如く、その特徴を表はす二つの漢字で、呼び好く略稱するのが、通例である。「外調交會調查活辯活動寫文檢定試驗」の如きも、さうである。その類で甚だ簡略にされた例は、「帝展美術展覽會院展美術展覽會」

## 一三二一 文章の趣味

嘗て尾崎紅葉氏は、言文一致會において言文一致體と擬古體とを比較して、言文一致と擬古文と兩方で同じ事を書くにしても、擬古文の方は、かげで音樂を奏でて居るやうな趣がある。錯綜した思想を片つ端から、すらくと書くのは言文一致に限る。擬古文の方は、不自由であるが、その中にどうも餘韻がある。」と述べた。成程謂はれのある事である。氏の説は、擬古文は餘韻のある文章、趣味の深い文章として、言文一致體にまさると云ふのである。

さてその餘韻とか趣味とか云ふものは、譬へて見れば、菜種油の燈火の如きであらう。之に對して言文一致體の方は、ガスや

電氣の燈火の如きであらう。實用として、ガスや電氣の燈火が日々使はれて居る。しかし今でも、神社や佛閣には、菜種油の燈火が昔の様に用ゐられて居る。菜種油の燈火に有りがたみのあるのは、ポツとして奥ゆかしく見える事である様だが、電氣やガスの燈火にも摺すガラスを被せれば、ポツとして奥ゆかしく見える。之と同様に、言文一致體でも、修辭上の工夫によつては、有りがた味が出来る筈である。さうして趣味には、習慣が必要であるから、我等は言文一致體を用ゐ慣れて行けば、漸次その趣味が増して來るのである。

### 一三三三 言葉と文章

言葉は活きたもので有つて、一定不變の形式を永く保ち得な

## 言文二途

いから、多くの年代が立てば、また著しい新形式が成り立つものである。斯様に言葉の變遷が著しいのに較べると、文章の方は餘程保守的である。特に平安朝中期の如き文藝隆盛の後を承けた平安朝末期などは、前期の文章を模範即ち標準としたので、言文二途に向ふ世となつた。尤も文章が如何に保守的であると云つても、必ず幾分かは時代時代の活きた言葉の影響を受けざるを得ない。

明治の大御代に至つて、言文二途では國民一般の實用に適しない事が知られて、言文一致が段々と興り榮えるやうになつた。さうして言文一致には標準語を要する。その標準語なるものは、凡そ我が帝都の東京の言葉に基づいて選定されて居る。しかし東京語そのものも常に一定不變では無くて、多くの年代を

## 言文一致



經る間には、段々と變遷するにちがひない。それ故に甚だしい言文二途を生じない中に、少々づつ標準語の形式を修正して、言文一致の文章を之に従はせるが宜いわけである。斯の如く、言葉の變遷に文章を順應させるやう、安全瓣を設けて置けば、大なる言文二途の不都合を免れて、永く言文一致の便利を受けられる次第である。

### 一三四 文章の模範

文章は各の人の思想感情を自在に發表するのを本旨とする。けれども文章の優良なる形式を學ばないで、徒らに文章を作るのは、恰も定石を知らないで碁を打つ様なもので、決して上達の出來る道では無い。模範文の必要はこゝに在る。賴山陽が日

本外史を草する時には、朝な朝な先づ史記を読んで、然る後に筆を執つたと云ふでは無いか。しかし模範は自信を堅めるために必要なのである。模範に拘泥しては、虎を畫がいて、犬に類する様な事になる。書道の教訓にも、常に古人無かるべからず。然れども自ら筆を執り紙に臨むに當つては、古人有るべからず。」と云つてある。文章においても、同じ様な心得が無くてはならぬ。

### 一三五 文章の洗鍊

「看多、做多、商量多」は、歐陽修の作文の三多の訣として言ひ傳へられて居る。「看多」は他人の文章を読むことの多い事で、「做多」は自分の文章を作ることの多い事である。勿論、それは悪文を讀

推敲

醉翁亭記

紅葉の小  
説

んだり、無暗に作つたりするので無い。さうして最後に、商多量と云ふのは、文章の洗鍊即ち推敲である。逸話によれば、唐の賈島が、烏宿池邊樹、僧敲月下門の詩句を草する時に、僧推としようか、僧敲としようかと思案して未定稿で有つた時に、韓退之が後の方に賛成したので、さう決定したと云ふことである。歐陽修が「醉翁亭記」を草する時に、最初は「滁州四面有山」以下數十字を以て書き綴つたのを段々と洗鍊して、とうとう「環滁皆山也」の五字に縮約したと云ふ話は、古來人口に膾炙して居る。近くは紅葉が小説を草した時に、之を妻君等に讀み味はせ、その批評を受けて修正したと云ふ事は、かの白樂天の苦心に比すべき話である。

## 一三六 指導の兩面

およそ物事は、之を難いと云ふ所から見れば、如何にも難く、之を易いと云ふ所から見れば、如何にも易く思はれるのである。それで、初學を導くのには、先づ易い所からして、漸く難い所に及ぼし、能く上達の功を積ませねばならぬ。作文の指導について、私は參考として度々語つて居る二つの話がある。どれも俳諧の道では能く知られて居る話であるが、相對して見ると、一しほの面白味がある。その一つは伊勢の中川乙由ちゅうゆの話、また一つは美濃の蘆元坊ろうげんぼうの話である。

乙由は伊勢の山田の神官で、芭蕉翁の晩年の門人であり小庵を麥畑の中に結んで麥林舎と稱へて居た。或日たづねて來た者が「私は俳句を學びたいと思ひますが、愚者でも其の道に入ることが出來ますか。」と尋ねた。すると乙由は「何のむづかしい

事があらうか。志があれば出来る。」と答へた。「では、如何して句をよむのが宜しいか。」別の事でも無い。たゞ眼前の有様を見て、之を句によむのだ。」と云ひ、乙由は起つて障子を明け、彼方の田畑を指さし、「あれを見られよ。この冬の寒さにも、鍬を肩にして野に出て行く百姓がある。如何にも寒さうに見えるでは無いか。之を句によめば、

百姓の鍬かたげ行く寒さかな

と云ふのだ。」と教へて會得させたと云ふことである。

次に廬元坊は、蕉門十哲の一人支考の高弟であつた。時に加賀の千代が風流の志あつて俳諧を嗜み、廬元坊の教を受けて斯道に達したいと願つて居た所が、丁度美濃から加賀へ廬元坊が行脚して來たので、千代はその旅宿を訪ねて志を陳べた。坊は

くたびれて寝て居たが、それでは一句よんで見よ」と云ひ、折から初夏の頃に有つたので時鳥を題とした。千代は即座に一句を吐いた。坊は千代の才力と氣韻がたゞもので無いのを見ぬいて、却てその即座の句をうけつけず、それは誰でも出来る平凡な句である」と云つた。それではと、千代は又一句を吐いたが、坊は又うけつけなかつた。やがて坊は眠りこんでも、千代は立去らないで沈吟し、坊の眼のさめた時をうかゞつては又々一句を吐き、斥けられては數句に及び、とう／＼夜明け方になつた。坊は驚いて、夜が明けたでは無いか。」と尋ねた。そこで千代は、

ほとゝぎす／＼とて明けにけり

と吟じた。坊は大いに之をほめて、これだ／＼。御前は此の心をわすれねば、俳諧に上達することが出来るぞ。」と教へたと。

千代の天才も斯の如き教訓を受けなかつたら、平凡に終つてしまつたであらうに。

## 一三七 祖國の言葉

我等は、理の上からも情の上からも、祖國の言葉を敬ひ愛し之を永遠に傳へ、且つ發展させて、國語の自主獨立を完くせねばならぬ。たゞ外來語を採つて以て國語を發達させるべき場合には、外來語を採つて然るべきであるが、祖國の言葉を虐げてまでも、外來語を採る様なことは、最も戒めねばならぬのである。近世このかたヨーロッパの先進國などは、何れも此の方針に向つて進んで居る。今後教育が進めば進むほど、此の方針で國語教授をせねばならぬ事が明かである。我等は立派に祖國の言葉で

云はれる事は、之を用ゐて行くやうに心がけねばならぬ。「受取」よりは「領收」、「うけもち」「受持」よりは「擔當」、「たんたう」「面白」よりは「興味ある」、「きょうみある」「思ひ切り」よりは「斷念」、「だんねん」「薬」の「きゝめ」よりは「藥劑の効能」、「かうのう」「忙しくて忘れた」よりは「多忙にして失念した」などと云ふ方が優等の言葉であると思ふ様な心得ちがひをせず、却てその反對に祖國の言葉を正しく用ゐる方が、優れた言葉づかひで有ると心得るべきである。

### 一三八 日本語の性

國語の名詞や代名詞には、ドイツ語などにおいて見るやうな、男性、女性及び中性と云ふ形式的區別を立てないで、たゞ、男性と女性とを區別する必要がある場合には、ムスコ<sup>〇</sup>とムスメ<sup>〇</sup>、アニ<sup>〇</sup>と



アネ、ヲヒとメヒ、ヲウシとメウシなどと云ひ分けるのである。併し一般には名詞の性を區別することが少いのみならず、昔ではヤモヲとヤモメ、シカとメカなどと區別したもので、廢れて、ヤモメは男性にも通じ、シカは女性にも通じる様になり、第二の必要に應じては、或は新に名詞を異にしてヤモメに對してゴケ(後家)と云ひ、或は性を示す接頭辭を添へてヲシカとメシカと云ひ分けて居る。

次に代名詞の中にも、男性に、第一人稱のヤツガレ(奴がれ)セツシヤ(拙者)や、第二人稱のキデン(貴殿)などや、女性に、第一人稱のワラハ(妾)や、第二人稱のキチャウ(貴嬢)などがある。けれども今の口語には、此の如き性の區別をする事が稀である。近來の文章で、第三人稱にカレ(彼)とカノヂヨ(彼女)との如き性の區別をする

事も有るのは、西洋語直譯から來たハイカラな言ひ方である。特に新聞紙や軍艦・汽船などの如き事物に、第三人稱のカノヂヨと云ふ代名詞を用ゐるのは、そのハイカラの絶頂である。

### 一三九 言葉と心情

國語は國民の手形だと云ふが、國語の中の諸方言は、又それぞれ地方人の手形であり、一郷の言葉は又々一郷の人の手形である。諸方言の特徴を知つて居れば、之を話す人の故郷を鑑識することが容易い。他郷の地で是まで見ず識らずの人に遇つて、同郷の名乗合をすることは屢々有る事である。

言葉は固より心情の表現であるから、之を思想や趣味の上から見て面白いものである。オイドンの一語は、如何にも能く薩

言語は人  
の手形

現  
心  
情  
の  
表

摩人のの氣質を表はすでは無いか。ペイペイ言葉は、如何にも昔の武藏野が原ごろ以來住んで居る關東人の心持を表はすでは無いか。東京人のイラッシャイに京阪人のオイデヤス、何と好い對照であらう。田舎の見物客を見て、江戸子はだは、イナカッペイとかアカゲットとか云ふ。しかし京都人は客相應の敬意を表し、しかも自らは昔の大宮人の氣風を保つてオノポリサント云ふ。

はしたなく云ひな散らしそ言の葉に

心の色の見えもこそすれ (小澤盛庵)

## 一四〇 かなづかひ

或時「かなづかひ」と云ふものは、元どうして定めたものか、又奈

良朝や平安朝の人はその間違をしなかつたのに、後にはその間違が多くなかつたのは何故か。」と尋ねた人が有つた。そこで「それは古事記傳に「假字用格のこと、大かた天曆のころより以往の書どもは、みな正しくて、誤りたること一つもなし、其はみな口にいふ語の音に、差別ありけるから、物に書くにも、おのづからその假字の差別は有りけるなり、」と説いてある如くだ。」と話した。言語の生命、言語の音韻の變遷と云ふ事に不案内の人は、得て斯様な疑問を起すのである。

しかし宋の朱熹の如き博學の人でも、詩經などの押韻法を説明する時に、説明しにくい所には協韻説を立て、置いたのである。明の顧炎武等が古今音韻の變遷を明らかにしてから、かの協韻説は破れた。我が國で假名遣のみだれを正した第一の功

は難波の僧契沖に歸するのである。その假名遣は復古的、歴史的のものである。古文又は擬古文を書くには、當然此の假名遣に據るべきである。所で、現代の標準語を、恰も古人が古文を綴つた様に發音的、時代的に綴るが宜いと云ふのは、明治以來の大思潮で、嘗て國語調査委員會も主張したところである。

歴史的假名遣を用ゐるので、假名の音價が錯雜し、時々左の例のやうな變にまぢがつた假名遣を見あたることがある。

以前に帝劇や日比谷俱樂部などのドアの入口に「ヲス」と書いて有のを或る人が見て、「押ス」の假名ちがひだと云ふと、他の一人が、いや、此の入口からはヲス(雄)が這入り、他の入口からはメス(雌)が這入るのだらうよとしやれた。何時か電車の内で、東京鶏卵合資會社の廣告文に「古る卵は」云々と書いて有つた。またエビ

スピールと書くべきのを「エビスピール」と書いてある。つまり、此等の誤は、和行のキエヲの發音が阿行のイエオと同じになつた所から起る一結果である。

## 一四一 櫻根博士

ローマ字書きの著書に自ら“Romanji-kichigai”と書いて居られる櫻根孝之進博士は、ローマ字ひろめ會の柱石たる人で、財團法人「帝國ローマ字クラブ」の設立者である。博士のその熱心は、大阪醫科大學にはローマ字狂といふ一種の狂病があると云はれてゐる程である。先年博士は、ローマ字ひろめの講演の約束をたがへず、重患の母上から離れて岡山市に行き、とう／＼死に目に合はれなかつたと聞く。「孝」を名にしよふ博士が大不孝人か

ローマ字  
書きがひ

親の死に  
目にあへ  
なかつた

大孝行人かは、知る人ぞ知るであらう。

Hito no mi no yamai wo naoshi,

Saiwai wo ataeru michi ni,

Na no takai Sakurane Hakase wa,

Awaremi no fukai kokoro ga,

Yaruse naku afuredete,

Kunitami no monji no yamai,

Kunitami no kotoba no yamai,

Tasukezu ni okareyō ka to,

Oinaru negai wo tate,

Hagemarenu arigatai hito :

Aa tooto ya ! Aa tooto ya !

## 一四二　ローマ字と國語

天草版の  
平家物語

黒川博士  
とローマ  
字

文祿二年天草版のローマ字書き平家物語などは、我が文獻上の寶物である。新村博士は大英博物館で之を寫して來られた。

明治の初の方、國學者の泰斗黒川眞頼博士は、ローマ字を以て古事記などを書き綴ることを唱へられ、百人一首の如きは、既にローマ字で歴史的假名遣式に綴つて出版された。左にその一首を紹介しよう。即ち權中納言匡房の歌

Takasago no wonohe no sakura saki nikeri,

Toyama no kasumi tata zu no ara namu.

後にローマ字ひろめ會では、百人一首ローマ字ガルタを出版した。その綴りは、左のやうにローマ字會式を用ゐてある。

ローマ字  
歌がるた



Takasago no onoe no sakura sakinikeri,

Toyama no kasumi tazazu mo araran.

ローマ字  
の遊技

ローマ字  
の良著

ローマ字  
と電報

ローマ字  
の投票

また樋口勘次郎氏考案の「ローマ字いろはガルト」や加茂正一氏考案の「ローマ字あそび」や大宮季治氏考案の「ローマ字俳句合せ」もあり、藤岡博士の「ロー字手引」や近藤光次氏の「發音とローマ字」や高島直一氏の「ローマ字教授法の研究」の如き良著もある。

つぎに電報の事を一言する。海外電報は、萬國電信條約に依り、日本語の電報用字はローマ字に限られて居る。内國電報は如何といふに、明治三十三年に遞信省令第四十六號電報規則において、電報に用ゐる言語を普通辭、祕辭、隱語の三種と定め、ローマ字を以て記した日本語は普通辭と見做すと規定してある。

また大正九年北海道旭川區における衆議院議員選舉にロー

マ字で書いた投票は、大審院の判決でも有効となつてゐる。

### 一四三 歌ガルタ

百人一首  
の讀み方

夏は戸外の遊樂の季節であり、冬は室内の遊樂の季節である。歌がるたの遊びは我が國の室内遊樂の最もなるものの一である。それについて百人一首の讀み方が間違つて居るので、正しく讀んで欲しいと思ふことが常である。實はカルタの文字まで違つて居るものもある。尤も百人一首は歌の調が優美流暢なので、多くの人は、たゞその歌調の好いのを面白く感じて楽しむのであり、必ずしも歌の意味を知るには及ばない。何分にも讀み方は正しくして欲しいと思ふ。今その例を舉げて見れば、

天の原ふりさけ見ればかすかすかなる。

かすがな  
る

三笠の山に出でし月かも (安倍仲麻呂)

三の句は奈良の春日かすがに在ると云ふ意である。仲麻呂が遠方から幽かすかに見たやうにカスカナルと讀むのは誤り。

立別れいなばの山の峯かみにおよぶ

まつとし聞かば今歸りこむ (在原行平)

三の句は、字餘りであり、峯に生長して居るの意で、四の句の松に續き、その松に、待つまちの意を掛けたのである。それをば、立別れて因幡の山の峯に居るかの如くミネニナルと讀んでならぬ。一と二の句は、立別れた往ぬいに、行先の因幡の國を掛けてあるが、行平は山の峯に居たのではない、因幡守となつて國府に居たのである。

ちはやぶる神代も聞かず立田川

水くくるとは

人に知られで

山がはに

唐くれなるに水くくるとは (在原業平)

五の句は、立田川の水が流れる紅葉のため眞紅な絞くり染め即ちしぼり染めにされるとは神代の昔にも有つたとは聞き及ばぬの意である。それをば紅葉が水中を泳り流れるかの如くミヅクグルトハと讀むのは誤り。

名にしおはゞ逢坂山のさねかづら

人に知られでくる由もがな (三條右大臣)

四の句は、人に知られずしての意であるから、テと讀むのは誤り。

山川〇〇に風〇のかけたるしがらみは

流れもあへぬ紅葉なりけり (春遊列樹)

山川は山にある川の意の熟語であるから、ヤマガハと讀むべきである。ヤマカハと讀めば、ヤマとカハとを並べて云ふ意に取

られる。

久方の光のどけき春の日に

しづごころ無く花の散るらむ (組 友 則)

四の句は、静心無く即ち長閑な心無くの意で、静心は熟語であるから、シヅ、ココロと離して讀んではならぬ。

人はいさ心も知らずふるさは

花ぞ昔の香ににほひける (組 貫 之)

いさは知らずに副ふ語で、打消の副詞である。イザサラバのイザと混同してヒトハイザと讀むのは間違ひ。

戀すてふ我が名はまだき立ちにけり

人知れずこそ思ひそめしか (壬 見 忠 見)

こそしかの係り結びであるのだから、五の句をオモヒソメシガ

るしづこ

人はいさ

こそしか

と讀むのは誤り。

君がため惜しからざりし命さへ

長くもが  
な

長くもがなと思ひけるかな (藤原義孝)

四の句のがなは願望の語で、五の句のかなは感歎の語であるから、四の句のがなをカナと讀むのは間違ひ。先の三條右大臣定方公の歌でも同様。そのほか鎌倉右大臣の「世の中は常にもがもな」の歌などに、この誤りが幾らも出て來る。

めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に

雲がくれ

雲がぐれにし夜半の月かな (紫式部)

雲がくれは熟語である。クモ、カクレと離して讀むのは誤り。

朝ぼらけ宇治の川霧たえんに

じせいのあ  
じる木

あらはれわたるせいのあじろぎ (權中納言定頼)

幾夜ねざめぬ

せいは瀬々である。それをゼゼ、即ち宇治川の出てくる琵琶湖の畔の膳所町であるかの如く讀んではならぬ。

淡路島かよふ千鳥のなく聲に

幾夜ねざめぬ須磨の關守 (源 兼 昌)

四の句をイクヨネサメンとかイクヨネサメノとか讀み誤るの時々聞く事である。句の意は、あはれ關守は幾夜か千鳥の鳴く聲で夢をさまされてゐると思ひやるのだから、幾夜か寢覺めぬ。の心で讀まねばならぬ。

おほふかな

おほけなくうき世の民におほふかな

わがたつ袖にすみぞめの袖 (前大僧正慈圓)

うき世の民に墨染の袖を覆ふかなの覆ふを、滅法界に思ふなどと讀みちがへてはならぬ。

## 一四四 松蟲と鈴蟲

昔の名の標準

歌學びの書にも「松蟲はリン〜、鈴蟲はチンチ〜リンと鳴く」と教へ、謠曲にも「松蟲の聲リン〜リン〜として」といつてある。漢語でも元は「松蟲を『金琵琶』と書き、鈴蟲を『金鐘兒』と書いてある。琵琶の音はリン〜、金鐘チンの音はチンチロと聞かれる。

後世には、その名を反對に呼ぶ所が出来た。俗謠に「夜は松蟲チン〜〜〜チロリ〜」といふのもある。國定小學讀本の歌に、  
あれ、松蟲が鳴いてゐる。ちんちろ〜〜ちんちろりん。

あれ、鈴蟲も鳴き出した。りん〜〜〜りんりん。

とあるのも、東京語を標準としてゐるもので、古語の標準とは反對である。今の博物學での呼び名も、東京語に従つてある。

今の名の標準



## 一四五 鶯

うぐひす

黄鳥

ホーホケキ「ー」と鳴く「うぐひす」に鶯の字を書くのは、日本流である。支那でいふ鶯は「黄鳥」即ち日本でいふ「朝鮮うぐひす」である。黄鳥は「金衣公子」の雅名もあり、一體が黄色で翼と尾とに黒羽がまじり「うぐひす」より大きく、その聲は機はたを織るやうだと云はれてゐる。

英語のナイチンゲール(nightingale)に鶯の譯字を用ゐて「うぐひす」と讀むのは不當である。ナイチンゲールは鶯とは別種で、直譯すれば「夜鳴鳥」である。鷗村氏の英詩評譯に、この鳥はイングラントに棲み、身の丈六七吋あり、羽色は頭と背とが黄褐で喉や腹は灰白で、四月頃から雛の孵かるまで、日暮から夜にかけて朗か

ナイチンゲール



衣更着(如月) まだ寒くて衣を更にかさね着ることがある

月の義。

彌生(病月) 草木のいや生ひかさなる月の義。

卯月(余月) 卯の花の盛りに咲く月の義。

早月(阜月) 早苗月の義。幸月の義。

水無月(且月) 暑くて水が涸れるから水無し月の義。田に水

を引き湛へるから水の月の義。

文月(相月) 文ひろげ月の義。稻の穂含月の義。穂見月の義。

葉月(壯月) 葉の黄ばみはじめる月の義。葉落月の義。

長月(玄月) 夜長月の義。穂長月の義。稻熟月の義。

神無月(陽月) 大物主神が諸神をひきつれて天にのぼられ

るから神の留守の月の義。諸神が出雲に集られるから神

の留守の月の義。神の月即ち神集かみつどひの月の義。雷鳴かみなりの無  
くなる月の義。十進で數の上かみ無月の義。

霜月しもづき(幸月) 霜降月の義。

四極しごく又は師走ししづ(涂月) 年果としぼつの月の義。萬事ばんじ爲果しぼつの月の義。

佛事が多くて師しの走はせまはる月の義。

などと説いてある。普通の解釋としては、陰曆第何月の和名といへば足りる。和名の下の括弧の内のは漢名である。「如月、皐月」の如き漢名の字を借りて和讀する場合もある。和名の漢字は萬葉假名で有つて、必ずしも正訓に用ゐたのではない。漢字に囚はれて語原を説き、又は音韻の通略延約で勝手に語原を説くのは甚だ不安である。且つ諸説まち／＼のものも多いから、和名の語原については、もつと研究せねばならぬ。

和名の漢  
字は萬葉  
假名

## 一四七 神代の古事

蘆芽あしなのもえし神代の古事ふるごとも

言の葉にこそ世に傳へけれ (橋 千 蔭)

古事記

書紀や祝  
詞や萬葉  
集

國學者の  
功勞

我が國の大昔の事が、古事記その他の古典によつて今に傳へられてゐるのは、有りがたい。古事記が文字に書き記されたのは、元明天皇の和銅五年即ち西曆七一二年の昔であるが、その言葉は、その前に代々語りつぎ言ひつがれたままに書き記されたのである。日本書紀の如きも歌は元の言葉そのまゝに記してある。祝詞いわひことも、萬葉集中の言傳への事も、よほど古いものである。大昔の祖先の言葉によつてその精神を知り得られる國民は、幸である。國學者が我が古典を研究した功勞は甚だ大きい。

## 一四八 國語の分布

植物學者の説く所によれば、我が國の勢力は、東亞特有の櫻の木の分布地域に向つて擴がつてゐると云ふことである。さうして言語學者が普通に説く所によれば、琉球語は大昔の日本語の支流であり、朝鮮や滿洲や樺太などの固有語は、日本語と共にウラル・アルタイ語族に屬してゐる。臺灣などの支那語は、日本人の先祖が澤山に採用し同化した漢語と同じ系統に屬してゐる。これらの土地の人民に日本語を以て教育を施すのは、如何にも宿縁のある事と思はれる。そのほか廣くアジアや南洋やアメリカなどに我が同胞の居住する所には、日本語が話されてゐる。

國遠み思ひなわびそ風のむた

雲の行くごと言はかよはひ (萬葉集)

と我が上つ世の祖先が詠じた。さやう。國が遠いとて、さびしく思ふな、風や雲のやうに、言葉は通ふ。

## 一四九 文藝の大使

青年の頃からダンテ研究の志があり、東京に来ては英語や國語を修め、又本元のダンテを讀みたいので、イタリア語を學び、その上達に先づガスコ先生を驚かしたのは、下位春吉氏。イタリア大使館から推され、火山ベスピオの眺めに名高いナポリの東洋語學校に日本語科教授として、君は、あこがれのダンテの國へ、大正五年に赴いた。友人は、文藝の大使よと祝福して君を送つた。

ダンテと  
下位

空青いイタリヤの國で、君はただ教室のみでなく、君の機關雜誌「Sakura」（サクラ）で、又イタリヤの新聞や雜誌の上で、又公會に於ける講演や演説で、日本の文藝は勿論、日本及び日本人までイタリヤ國民の心に入れてゐる。君が心を盡くして御迎へ申上げた、御外遊當時の我が東宮殿下は、畏くも君がイタリヤにおける平素の努力を御喜びになつたと承る。君のダンテ研究は益々深く廣くなり、ダンテに關する物は何でも集め、後には東京にダンテ館を建てる決心である。君の純眞なる日本文で本元の「神曲」がうつされることは、君の同胞が待ち望んでゐる所である。

君はイタリヤの學者や文藝家や政治家などに友とされ、殊に愛國の文豪ダヌンテオに愛されて「弟」と呼ばれてゐるとの事。



先頃ダ氏と同乗で日本に飛行し來るべく新聞に喧傳されたが、親友葛原氏への便りに「落ちたら死ぬ。ダン公、情死の相手としての不足はねエヤ。」と有つた。徳富氏の「日本から日本へ」にも、「伊太利人にも日本人にも無くてはならぬ人」とある。

## 一五〇 現代の文章

現代の文章は、明治初年の新聞雑誌を始として、主として漢文直譯體から進み出した。只今でも官報の文章が其の面影を保つてゐる。明治十五年に小中村博士は、當時の文章が純然と獨立した國文とは云ひ難いと云つて、

「平常の言詞に中古の雅言と漢語とを交へ、卑俚ならず、詰屈ならず、平暢にして通じ易からん事を要す。」(陽春廬雜考)

## 今の候文

と説かれた。さて同二十年頃から、從來の文體の外に和文體も興り、歐文直譯體も現れ、口語體も新しく起り、これから漸次これらの諸文體が統合されて來て、謂はゆる普通文なるものが出來た。この普通文は、雅俗を折衷し、和漢洋の文章法の長所を取り合はせ、耳遠い中古の語法を淘汰して、後世の口語法を加味したものである。今の候文の如きも、形式をきめてある文は別として、一般の文においては普通文の影響をうけて居る事が甚だ多く、普通文の中に所々候文體語を交へた程のものが増して來た。

今では殆ど隔世の感があると云はれよう、明治十九年に山田美妙の「夏木立」といふ言文一致體の小説が出た頃には、口語文の生立も幼いもので、當時文部省や民間で編纂した小學讀本に新しく加へられた口語文を見ても、まだ幼かつた事が知られる。

それが段々發達して、今では論説文や書牘文にも口語文が用ゐられ、口語體の歌まで作られる様になつた。さうして現に國民の義務教育は主として口語文を以て施されて居る。今後は益々口語文が發展し、之につれて從來の普通文や候文の勢力がちゞまり、終には口語文の世の中となる時が來るで有らう。これは必然の勢とは云ひながら、我等は此の大勢に逆らはない様心がけ、成るべく此の大勢を助長して、二重三重の文體の不經濟を改良する様に努め、早く新文體と舊文體との過渡時期を通り越したいもので有る。

## 一五一 蘇峰と雪嶺

徳富蘇峰と三宅雲嶺との兩文豪ほど操觚の齡の長い人は稀

操觚の  
長い人

兩文豪の  
特色

外史綱筆  
の詩

であらう。明治二十年ごろ「國民之友」や「日本人」が創刊された時から、現に「國民新聞」や「日本及日本人」の今日に至るまでを數へても、その筆の命は三十幾年に及んでゐる。兩文豪は現代の文章の活歴史であり、國民に思想の糧かたを與へてゐる。評論家として我が文壇に並び立つてゐる兩文豪は、相似た點も少くはないが、しかし兩方の特色は鮮明である。名詮自性、蘇峰を讀めば、「火起接天」と古書にも記した阿蘇山の如く、また雪嶺を讀めば、「みねなる雪のきゆる日もなし」と古歌にも詠じた白山の如き感じがする。

## 一五二 賴山陽

卅萬言皆帶血痕、龍拏虎攫事紛紛

保元寫徹慶長尾 自覺筆邊生瑞雲

この詩は、山陽が日本外史の摺筆の時の作である。如何に山陽が天才であり努力の人で有つか、又如何に外史摺筆の時に得意満々で有つたかと察せられる。

嘗て備中笠岡町の舊家生いんぎ長氏珍藏の外史原稿の寫しを見て、この詩の眞を味ふことを得た。その原稿の添削改竄は初卷において最も甚だしく、朱筆又は藍筆を用ゐて、幾ど紙面の空所が無い程である。「我を刻苦勉勵すると云ふ人は能く我を知る者だ。」と山陽自らも語つたと。

評論家は、山陽は史學の天才ではなくて文學の天才であると云つて居る。げに其の天才は其の詩文に顯れ、その史籍の如きも文學的で、能く讀者を動したのである。さうして此に惜しい

吉野即興

と思ふのは、この文學的天才が若し國文に表されて有つたならばと云ふ事である。しかも其の能く爲し得べき事で有つたのは、山陽が吉野花見の即興に詠じたと云ふ今様、

花より明くる三吉野の 春のあけほの見渡せば

もろこし人も高麗人こまびとも やまと心になりぬべし

の一首を誦しても、思ひやられるでは無いか。

### 一五三 井上梧陰

春畝伊藤公の四天王の一人に數へられた梧陰井上子爵は、漢學の素養の深い士君子で法典編纂などにも與つて勳功が有つた。

さて明治二十年前後までは一齋點流儀の漢文直譯體が流行

藤公四天  
王の一人

し、國學者の方では誰知らぬ者も無い程の國文法も誤られる事が有り勝て有つた。子も亦嘗て、知らず識らず之を誤つて、後にその道の人から之を説き示されて、深く己れが國文に暗いことを恥ぢ、大いに懺悔して、それから深く國文を修め世にも國語教育を奨められたと聞く。梧陰存稿の卷の首にも、

「己れ年少き比は好みて漢文を學び、なまじ愁ひに彫琢の業を勉めたりしが、中年の折より齟りて其の非を悟り、(中略)誓ひて國文興起の盛運を扶くべしとの微志をも公にしたるは、さりとともとおもふ心の切なるよりにぞありける」。

と述べられてゐる。明治二十五年子は文部大臣に任ぜられて普通教育に最も國語科の必要なることを主唱し、親しく諸學校の國語教授を視察し、また學者や教育家の意見をを用ゐて、大いに

讀書の快

國語教育を振ひ興された。惜しいかな、子は一兩年にして退いて病を養はれる身となり、遂に二十八年三月十五日五十三歳で薨去された。子の薨去は、特に國語國文の發達のために甚だ残念がられた所である。

子は嘗て「一室の内に在つて古今の書を愛讀するのは、恐らく十萬の軍を動すの愉快にも勝るで有らう」と語られたさうだ。

## 一五四 夏目漱石

漱石の號

晉の孫楚が「枕石漱流」と云ふべきを誤つて「枕流漱石」で押し通した。「漱石」の號は、そのユーモア又は俳諧味と負嫌ひとを表はしてゐるやうだ。明治三十八年一月の雜誌「ホトトギス」に一短篇を寄せて評判となり、その續きを書かされて評判の高まつた

地稿の誕生



のが「猫」。「猫」の誕生地は、その頃偶然私も居た東京駒込千駄木町五十七番地で、漱石順禮者の參るべき所だ。「膝栗毛」や「浮世床」の後、この方面の傑作が久しくたねぎれの所へ出た「猫」の大評判。しかも「猫」を好い加減に始末して置いて、段々と新趣向を出されたのは、えらい。「猫」の生れる頃は一種の逆境。逆境が無かつたら、大部の全集も出来なかつたらう。陶庵公の雨聲會に招かれて、ほととぎすかは。廁か。なか。ばで出かねけり。

と斷つたなどは、えらい事であるまい。赤門の講師時代の文學論に自ら不満足を感じ、晩年には改めて「則天去私」の文學論を講じたいと云つて居られたさうだに、大正五年惜しくも白玉樓中に入られた。しかし、現代の口語體で此の江戸子に建設された新文學は立派な光明を放つてゐる。

(をばり)

すじりの海墨の色こそふかけれど

我がかく筆のいろあさくして（本居大平）

ちのづから心の見ゆるわざなれば

筆とることのはづかしきかな（村田春海）

大正十一年九月二十一日印刷

大正十一年九月二十五日發行

國語の趣味と常識

定價二圓

著者 日下部重太郎

發行者 東京市麴町區平河町四丁目十三番地  
土屋泰次郎

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英會工場  
吉田松次



發行所

東京市麴町三丁目  
振替東京七八四七

丁未出版社

【電話九段六六〇】

大正十一年九月二十一日印刷

大正十一年九月二十五日發行

國語の趣味と常識

定價二圓

著者 日下部重太郎

發行者 土屋泰次郎  
東京市麴町區平河町四丁目十三番地

印刷者 吉田松次  
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英會工場



發行所

東京市麴町三丁目  
振替東京七八四七

丁未出版社

【電話九段六六〇】

著 氏 郎 太 重 部 下 日

---

- |           |          |       |       |
|-----------|----------|-------|-------|
| (4)       | (3)      | (2)   | (1)   |
| 實用漢字の根本研究 | 日本ローマ字文法 | 國文朗讀法 | 現代の國語 |